

東南アジア大陸部 越僑コミュニティの基礎研究

ベトナム仏教寺院資料分析から

令和4～8年科学研究費補助金研究成果報告書
(基盤研究B、23K21975)



2026年3月

研究代表者 大野美紀子（京都大学東南アジア地域研究研究所）

例言

- 本書は、令和4～8年度科学研究費助成事業基盤研究（B）（課題番号：23K21975）にかかる研究成果を刊行するものである。
- 研究課題名「東南アジア大陸部越僑コミュニティの基礎研究ーベトナム仏教寺院資料分析からー」
- 研究組織は以下の通り（所属は令和8年度時点）

研究代表者 大野 美紀子（京都大学東南アジア地域研究研究所）

研究分担者 清水 政明（大阪大学大学院人文学研究科）

西田 昌之（東北学院大学教養教育センター）

木谷 公哉（京都大学東南アジア地域研究研究所）

下條 尚志（神戸大学国際文化学研究科）

芹澤 知広（天理大学国際学部）

菊池 陽子（東京外国語大学大学院総合国際学研究院）

矢野 正隆（東京大学大学院経済学研究科）

研究協力者 大田 省一（京都工芸繊維大学デザイン・建築学系）

若曾根 了太（チェンマイ大学人文学部・日本研究センター）

Thanyathip Sripana（Chulalongkorn University）

Xaraj Phrawong（Rajamangala University of Technology Thanyaburi,
Architecture）

Bounthavy Sosamphanh（National University of Laos, Geography）

金 知雲（京都大学大学院アジアアフリカ地域研究科）

目次

はじめに

大野 美紀子	1
--------------	---

第1部 フィールド調査報告編

第1章

タイ国安南派の概要

大野 美紀子	4
--------------	---

第2章

Wat Samananam Borihan in Bangkok and the Vietnamese in the Early-Rattanakosin Period

Thanyathip Sripana	12
--------------------------	----

第3章

景福寺 Wat Samananam Borihan の建築的特徴

大田 省一・Xaraj Phrawong	26
----------------------------	----

第4章

Architectural Survey of Annamnikai Temples in Thailand:

Focusing on the Eclectic Forms of Architectural Expression in Buddhist Temples in Thailand and Vietnam

Xaraj Phrawong	33
----------------------	----

第5章

力の源としての死後世界

—タイ国安南派仏教団（アンナムニカーイ）における心霊譚の活用

西田 昌之	38
-------------	----

第6章

ラオスにおけるベトナム仏教寺院

大野 美紀子・菊池 陽子…………… 43

第2部 文献調査報告・論考編

第7章

「景福寺資料」の構成と形態的特徴

矢野 正隆…………… 47

第8章

ベトナム語方言史資料としての景福寺ハンノム資料

清水 政明…………… 58

第3部 地域研究と Informatics

第9章

地域研究のための研究データ管理の始め

木谷 公哉…………… 73

第10章

参考資料：東南アジア大陸部におけるベトナム仏教寺院分布

—Google map と GPS 情報を用いた可視化の試み

木谷 公哉…………… 89

はじめに

本科学研究プロジェクト「東南アジア大陸部越僑コミュニティの基礎研究：ベトナム仏教寺院資料分析から」は、2017～2022年に実施された「景福寺資料調査研究」のフィールド編に相当する。先行研究が主として文献調査に依拠していたのに対し、本研究はフィールド調査によってそれを補完・発展させることを目的とした。また、先行研究および本研究はいずれも、景福寺資料をバンコクから本邦にもたらし、同寺に越僑墓碑が存在することを明らかにした桜井由躬雄氏の研究成果に対する、約40年を経たフォローアップ研究を兼ねていた。

1979年に本邦へ将来された景福寺資料のみからは解明し得ない諸点、すなわちタイ国安南派という景福寺をはじめとするベトナム仏教寺院組織の存在、各寺院が所蔵していると想定される漢喃大乘仏教経典への期待、さらにそれらの経典を携えてきた担い手であるベトナム人僧侶・信者、すなわち越僑の存在に着目し、18世紀末から現在に至る東南アジア大陸部における越僑社会の歴史を再構築することを企図した。

したがって、本研究プロジェクトの課題設定は、第一に、文献資料のみでは解明し得ない諸点—①景福寺を含む安南派寺院の実態、②各寺院所蔵の Hán-Nôm 経典から浮かび上がるベトナム仏教の実像、③経典の担い手である僧侶・信者の実態—を明らかにし、それらを通じて越僑社会の構造を解明することにあった。

他方で、本研究は調査対象を物質資料に限定したマテリアル・サーヴェイ (material survey) を中心とした。具体的には、寺院文物、経典類、寄進文書、墓碑銘などの物質資料および文献資料、さらに日常的に読誦される経典の実践的利用の実態を対象とした。その理由の一つは、調査対象が中国系大乘仏教であり、研究組織の構成員がベトナム・中国研究者を中心としていたことによる言語的制約である。さらに、宗教施設である仏教寺院には長期にわたる文献・碑文などの物的証拠が蓄積していると見込まれたことも理由である。本研究は、物質文化を通して仏教寺院の人的ネットワークおよび組織的活動を総合的に捉える試みでもあった。

当初、本研究は東南アジア大陸部のうちタイのみならずラオスおよびカンボジアも調査対象地域に含めていた。ラオスについては、ビエンチャンおよびサワンナケートを中心に同国のベトナム仏教寺院の位置を比定し、数か所で寺院調査を実施した。ラオスは、1944年のタケク事件などを契機として、越僑の移動過程を考察する上で重要な中継地域であり、タイ国内の越僑社会を理解するための周辺フィールドとして位置づけられるからである。一方、カンボジアは対象から除外した。調査準備段階において、同国では内戦以前の古いベトナム寺院が現存していないとの報告があり、歴史的連続性をもつ寺院資料の調査が困難であると判断したためである。

研究課題を越僑社会史の再構築と設定したことから、仏領期および冷戦期に連なる歴史を有する寺院を調査対象として選定し、2020年以降のASEAN統合推進期における新たな移民社会の寺院建立とは一線を画した。Pooleは、冷戦期以前にタイに流入した越僑を old comer、それ以後を new comer と分類している [Poole 1970: 36-51]。この枠組みを援用すれば、現在では、これらに加えて「new new comer」とも呼ぶべき新たな越僑層の増加が認められる。その一例として、1979年に桜井がリストアップしたベトナム仏教寺院は13寺であったが、現在タイ国内には25か所以上が確認されている。本研究では、桜井報告の13寺に限定して調査を行い、歴史的連続性を重視した。

本研究の出発点とも言うべき桜井由躬雄氏の論考「在泰京越南仏教寺院景福寺」をあらためて言及しておきたい。同論考は、第一に史料解説として景福寺および安南派の沿革、仏足石築山に所在する越僑墓碑群を紹介し、論考全体の約三分の二を文献目録の提示に割いている点に特徴がある。しかしながら、この論考を桜井研究史の中に位置づけるならば、それは東洋史学中心の研究からフィールド主体の研究へと移行する過渡期の成果と見ることができる。1979年当時に構想されていた、文献研究とフィールド調査を統合したベトナム研究の深化は、その後のハノイ駐在経験、1980年代末のいわゆる「史料革命」、さらに1990年代初頭からのBách Cốc研究の展開の中で、方向転換を余儀なくされた。その結果、景福寺資料もまた、約40年にわたり本格的な再検討が行われないうちに今日に至った。

桜井氏が景福寺研究に寄せた期待は、「当寺はこのようなヴェトナム寺院としての伝統を保ち……」[桜井1979:78]との記述に端的に示されている。すなわち、同寺がヴェトナム寺院としての伝統を保持しながらも、本国の寺院との交流を絶った状態にあったため、戦前期ヴェトナム仏教の形態を比較的純粋な形で保存している可能性に着目したのである。さらに、異民族宗教としてのヴェトナム大乘仏教が上座部仏教社会の中でいかに変容したかを解明することに、その学術的意義を見出していた。本研究もまたその問題意識を継承するものであるが、残念ながら今日に至るまで十分に解明されたとは言い難い。

本著は、第一部「フィールド調査報告」、第二部「文献調査報告・論考」、第三部「地域研究と情報学」から構成されている。第三部を設けたのは、本研究を通底する問題意識として、近年その重要性が高まる研究データ管理への対応と、フィールドワークを基盤とする地域研究に対して情報学がいかに貢献し得るかという問題意識を共有しているためである。

参考文献

桜井由躬雄 (1979). 「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本目録：研究ノート」『東南アジア：歴史と文化』8. pp.73-117

Poole, Peter A. (1970). The Vietnamese in Thailand : a historical perspective., Cornell University Press.

第 1 部

フィールド調査報告編

タイ国安南派の概要

大野 美紀子

1. タイ国安南派

タイ国では、中国系大乘仏教に属する仏教寺院を中国派と安南¹派（Annamnikaya）の 2 派に分けて公認している。安南派は、その呼称「安南」が示すように、同国ではベトナム仏教寺院組織として認識されている。

2024 年安南派ウェブサイト上によれば、同派の寺院数は 25 寺 3 僧堂²、うち 1 寺は海外のカリフォルニア州に所在する。

表 1 安南派寺院（2024 年時点）

No.	ベトナム語名	漢字名	タイ語名		所在地
1	CHÙA CẢNH PHƯỚC	景福寺	วัดสมณานิยมบริวาร (กันเพือกถั่ว)	Bangkok	Wat Somananayam Borihan (Wat Yuan Sapheh Khao)
2	CHÙA KHÁNH VÂN	慶雲寺	วัดอุภัยราชบำรุง (คันเค็งถั่ว)	Bangkok	Wat Uthai Ratchabamrung (Chùa Khánh Vân)
3	CHÙA THỦY NGÂN	潯岸寺	วัดชัยภูมิการาม (ต๋นพ่านถั่ว)	Bangkok	Wat Chaiyaphum Karam (Wat Ti Ngan Tui (Chùa Ti Ngan))
4	CHÙA KHÁNH THO	慶壽寺	วัดถาวราราม (คันถั่วถั่ว)	Kanchanaburi	Wat Thaworn Wararam (Chùa Khánh Thọ)
5	CHÙA HỘI KHÁNH	會慶寺	วัดมงคลสมัคม (โหมถั่วถั่ว)	Bangkok	Wat Mongkol Samakhom
6	CHÙA PHƯỚC ĐIỀN	福田寺	วัดเขตนบูนยาราม (เพือกถั่วถั่ว)	Chanthaburi	Wat Khet Na Bunyaram
7	CHÙA NGỌC THANH	玉清寺	วัดอนันนิภาเจสิมพระชนมพรรษากาล (พริกถั่วถั่ว)	Suphanburi	Wat Annam Nikaya Chalerm Phrachonmaphansakan
8	CHÙA HUNG THANH	興盛寺	วัดธรรมปัญญารามบางม่วง (สงถั่วถั่ว)	Nakhonpathom	Wat Tham Panyaram Bang Muang
9	CHÙA HUNG PHƯỚC	興福寺	วัดเจริญบุญโพศาล (สงถั่วถั่ว)	Kanchanaburi	Wat Charoen Boon Phaisan
10	CHÙA TAM BẢO CỒNG	三寶公佛寺	วัดอุภัยภาธิการาม (ตามบ่าวถั่วถั่ว)	Chachoengsao	Wat Upai Patikaram (Sam Po Kong)
11	CHÙA TỬ TẾ	慈濟寺	วัดโลกาญเคราะห์ (ตั่วถั่วถั่ว)	Bangkok	Wat Lokanukroh
12	CHÙA KHÁNH THO HATYAI	慶壽寺	วัดถาวรารามหาดใหญ่ (คันถั่วถั่ว)	Songkhla	Wat Thaworn Wararam Hatyai
13	CHÙA LONG SƠN	龍山寺	วัดถ้ำเขาน้อย (ตั่วถั่วถั่ว)	Kanchanaburi	Wat Tham Khae Noi
14	CHÙA CỤC LẠC	極樂寺	วัดสุทธานิพนธ์นาราม	Chiangmai	Wat Sukhavati Annamwanaram
15	CHÙA PHỒ CHIÊU	普照寺	วัดศรีรัตนนิพพานนิยาราม (โหมถั่วถั่ว)	Samutskhon	Wat Sattha Yim Phaniit Wararam
16	CHÙA KHÁNH AN	慶安寺	วัดสุนทรพระติษฐ์ (คันถั่วถั่ว)	Udonthani	Wat Sunthorn Pradit
17	CHÙA QUẢNG PHƯỚC	廣福寺	วัดอนันนิภาคาราม (ท้าวถั่วถั่ว)	Bangkok	Wat Annam Nikayaram
18	CHÙA KHÁNH SANH	也拉慶生寺	วัดมหาญาณกาญจนามาสารามฐิตะปารุ้ง (คันถั่วถั่ว)	Yala	Wat Mahayana Kanchanamaset Bamrung (Wat Yuan Yala)
19	CHÙA HUNG VÂN	興雲寺	วัดศิริจรรย์ธรรมนิยาราม (สงถั่วถั่ว)	Pathumthani	วัดศิริจรรย์ธรรมนิยาราม (สงถั่วถั่ว)
20	CHÙA Quan Âm	觀音寺	วัดมหาโพธิสัตว์อนันนิภาคาราม	Ratchaburi	วัดมหาโพธิสัตว์อนันนิภาคาราม
21	CHÙA PHỔ TẮNG	普藏寺	วัดแสงมนิศรีมหาญาณ	Ratchaburi	วัดแสงมนิศรีมหาญาณ
22	CHÙA PHỔ PHƯỚC	普福寺	วัดกุศลสมาคร (โหมถั่วถั่ว)	Bangkok	Wat Kusol Samakorn
23	CHÙA VÂN THO	萬壽寺	วัดมณีวันวาราม (หย่างถั่วถั่ว)	Ratchaburi	วัดมณีวันวาราม
24	CHÙA PHƯỚC THỌ	福壽寺	วัดนพรัตน์วาราม (เพือกถั่วถั่ว)	Chanthaburi	วัดนพรัตน์วาราม
25	CHÙA PHƯỚC THỌ	佛光寺	วัดประธมพุทธาราม (เม็กถั่วถั่ว)	California (USA)	1635 N Lake Ave

1		สหภังคารสถานสงฆ์ท่าคลองโพธิ์ (เขานก)	Samnaksong Tham Klongthip	Chanthaburi	
2	[慶安仏堂]	สำนักสงฆ์วัดเขานอนิมพุด	Samnaksong Tan Lian Anan Phrot	Udonthani	
3	[極樂禪寺]	สำนักสงฆ์แดนสุขาวศิริเกษ	Samnaksong Wat Saeng Mani Wachira Mongkhon	Ratchaburi	

出典：安南派ウェブサイト (<https://www.annamnikayathai.com/annam-sect-temple-house>)

1 安南は、中国歴代王朝により 19 世紀まで使用されていたベトナムの旧国名。ベトナムを指す呼称として、19 世紀以後にもアジア各国で広く使用された。

2 本稿では สำนักสงฆ์Samnaksong/Monastery を僧堂と仮訳した。タイでは法制度上寺院施設を寺院・小寺と 2 分して登録されている [林 2008: 88-89]。

2021 年安南派ウェブサイトでは 24 寺 4 僧堂、遡って 1979 年 13 寺 [桜井 1979: 74] 1965 年に 10 寺 [Poole 1970: 27] と、寺院数は増加している。増加要因の一つは、安南派組織内で僧堂から寺院への昇格である。例えば、同派ウェブサイト 2021 年から 2024 年にかけての推移を見ると、Ratchaburi に所在する 1 僧堂が寺院へ昇格している。現存する寺院の中にも會慶寺・興福寺・慈濟寺の前身と思しき「庵」が散見され [桜井 1979: 86, 97, 101, 105]、同派内で規模等何らかの要件を満たすことにより僧堂から寺院へ昇格する仕組みが設けられていることが推察される。このような僧堂から寺院への昇格例が同派の信者数増加を直接反映しているかは不明である。

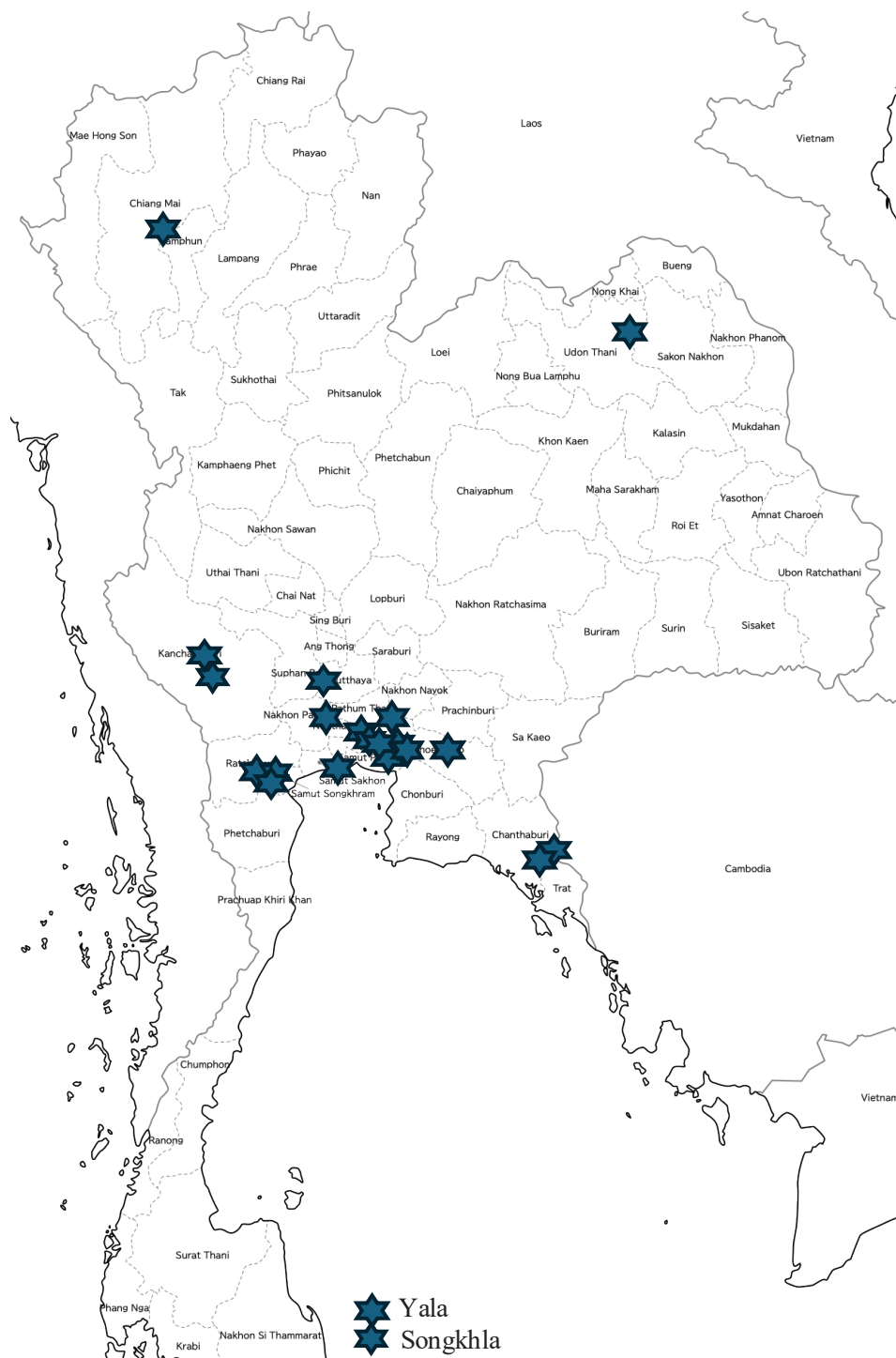


図 1 タイ国内安南派寺院分布図

タイ国安南派について本邦に初めて紹介されたのは 1897 年日本から同国へ渡航した僧侶とその通訳による新聞記事によってである[村嶋 2024: 68]³。それ以後 1979 年に発表された桜井氏による論考まで忘却されていたが、インドシナ戦争によりタイ国に流入したベトナム難民へ注目が集まったことから、同国における在外ベトナム人（越僑）の歴史に関連して、安南派について言及されるようになった [Poole 1970; 桜井 1979]。

本研究では、東南アジア大陸部越僑社会の消長をベトナム仏教寺院に残された資料から分析するという課題を設定したことから、歴史的連続性を重視して、1960-70 年代に存続していた安南派寺院 13 寺を主な対象に現地調査を試みた⁴。本稿はその中間報告である。

下表に 1979 年と 1965 年の安南派寺院を挙げた。調査では、Songkhla 所在 Wat Thaworn WararamHatyai を除く 12 寺を訪問し、所在地・寺名等を確認した。

安南派寺院は、1965 年-1979 年の 10 年間で、越僑・華僑が集住していた Bangkok・Kanchanaburi・Chanthaburi から、Bangkok 南方地域・ラオス国境地域へと分布を拡大させていったことが窺われる⁵。

表 2 安南派寺院（1979 年、1965 年時）

1979年時点 1965年時点					
No.	ベトナム語名	漢字名	タイ語名		所在地
1	CHÙA CẢNH PHƯỚC	景福寺	วัดสมณามันมบริหาร (กันเพือกตือ)	Wat Somananamborihan	Bangkok
2	CHÙA KHÁNH VÂN	慶雲寺	วัดอุภัยราชบำรุง (คันเี่ยงตือ)	Wat Upai Ratchabumrung	Bangkok
3	CHÙA THỦY NGÂN	翠岸寺	วัดชัยภูมิการาม (ต้งงานตือ)	Wat Chaiya Pumikaram	Bangkok
4	CHÙA KHÁNH THỌ	慶壽寺	วัดถาวราราม (คันถ่อตือ)	Wat Thaworn Wararam	Kanchanaburi
5	CHÙA HỘI KHÁNH	會慶寺	วัดมงคลสมาคม (โหยคันตือ)	Wat Mongkol Samakhom	Bangkok
6	CHÙA PHƯỚC ĐIỀN	福田寺	วัดเขตนามบุญาราม (เพือกเตี้ยนตือ)	Wat Khetnaboonyaram	Chanthaburi
7	CHÙA NGỌC THANH	玉清寺	วัดอนัมมิกายเฉลิมพระชนมพรรษากาล (หวิอกหันตือ)	Wat Anamikai Chaloem Phrachonmaphansakan	Suphanburi
8	CHÙA HƯNG THANH	興盛寺	วัดธรรมปัญญาารามบางม่วง (ฮังฮันตือ)	Wat Dharm Panyaram Bang Muang	Nakhonpathom
9	CHÙA HƯNG PHƯỚC	興福寺	วัดเจริญญไพศาล (ฮังเพือกตือ)	Wat Charoen Boon Phaisan	Kanchanaburi
10	CHÙA TAM BẢO CÔNG	三寶公佛寺	วัดอุภัยภาติกการาม (ตามบ่าวก้องเค็กตือ)	Wat Upai Patikaram	Chachoengsao
11	CHÙA TỪ TẾ	慈濟寺	วัดโลกาเนเคราะห์ (ตือเตตือ)	Wat Lokanuklor	Bangkok
12	CHÙA KHÁNH THỌ HATYAI	慶壽寺	วัดถาวรารามหาดใหญ่ (คันถ่อตือ)	Wat Thaworn Wararam Hatyai	Songkhla
13	CHÙA LONG SON	龍山寺	วัดถ้ำเขาน้อย (ล้องเซงตือ)	Wat Thamkhaonoy	Kanchanaburi
14	CHÙA CỤC LẠC	極樂寺	วัดสุขาวดีอนันนาราม	Wat Sukhavati Annamwanaram	Chiangmai
15	CHÙA PHỔ CHIẾU	普照寺	วัดศรีธาณัมพณิขรราราม (โพเจียวตือ)	Wat Sattha Yim Wararam	Samutsakhon
16	CHÙA KHÁNH AN	慶安寺	วัดสุนทรประดิษฐ์ (คันฮังตือ)	Wat Sunthorn Pradit	Udonthani
17	CHÙA QUẢNG PHƯỚC	廣福寺	วัดอนัมมิกายาราม (กว้างเพือกตือ)	Wat Annamikayaram	Bangkok
18	CHÙA KHÁNH SANH	也拉慶生寺	วัดมหายานกาญจนามาสราชวรบำรุง (คันฮันตือ)	Wat Mahayan Kanchanamat Radbamroong	Yala
19	CHÙA HƯNG VÂN	興雲寺	วัดศรีจรรยาธรรมปัญญาาราม (ฮังเี่ยงตือ)	Wat Sirijanyadham Panyaram	Pathumthani
20	CHÙA Quan Âm	観音寺	วัดมหาโพธิ์สถอนันมิกายาราม	Wat Mahaphothisat Annamikayaram	Ratchaburi
21	CHÙA PHỔ TÀNG	普蔵寺	วัดแสงมณีศรีมหายาน	Wat Saeng Mani Sri Mahayana	Ratchaburi
22	CHÙA PHỔ PHƯỚC	普福寺	วัดกุศลสมาคร (โพเพือกตือ)	Wat Kusolsamakorn	Bangkok
23	CHÙA VẠN THỌ	萬壽寺	วัดหมื่นปิ่นาราม (หย่างถ่อตือ)	Wat Muen Pi Wanaram	Ratchaburi
24	CHÙA PHƯỚC THỌ	福壽寺	วัดนพรัตน์าราม (เพือกถ่อตือ)	Wat Nopparat Wanaram	Chanthaburi
25	CHÙA PHƯỚC THỌ	佛光寺	วัดประทุมพุทธาราม (เือกกว้างตือ)	Wat Prathom Phuttharam	California (USA)

注：5. CHÙA HỘI KHÁNH は、1965 年リストでは Khanh-Hoi と表記されている。

3 1897 年安南派寺院を訪問した上村観光・重田友介両氏の経緯等については村嶋氏論考に詳述されている [村嶋 2023: 203-226; 村嶋 2024: 69-80]。

4 13 寺のうち、Songkhla 所在 Hatyai 慶壽寺は未見。

5 1965 年リストに挙がっていた Songkhla 所在 Wat Thaworn Wararam Hatyai は、1979 年リストに欠けている。同寺は寺名から Kanchanaburi に所在する Wat Thaworn Wararam の分寺と推察されるので、同一寺に誤認されたと思われる。

2. 安南派の沿革と越僑 (Việt Kiều)

安南派寺院の縁起には、18世紀末ベトナム中・南部・タイ・トンブリ朝～ラッタナコーシン朝間の政治外交関係が関係している。ベトナム中部フエに拠った広南阮氏は、Tây Sơn の乱に追われ Hà Tiên (河仙) を経てタイに逃れた。うち、バンコクに亡命した広南阮氏一族の阮福映 (1802 年阮朝嘉隆帝として即位) 帰国後も、その一部はタイ国内残留を選択した。

ラーマ 1 世 (1782–1809) が土地を下賜して建立されたのが慶雲寺・廣福寺、その後ラーマ 3 世 (1824–1851) 期にベトナム・中国から多数の移民が流入するようになり、1834 年頃それら移民が Kanchanaburi に移住させられたことを契機に建立されたのが慶壽寺である。[桜井 1979: 75–76; Thanyathip 2022: 101–106]。慶雲寺はバンコクの現チャイナタウン近、廣福寺は広南阮氏一族縁のバンコク郊外 Bang Pho に所在し⁶。Kanchanaburi は対ビルマ最前線として、ラーマ 1 世期の広南阮氏一族・郎党やラーマ 3 世期のベトナム人・中国人移民が動員され、戦役や建設労働に従事した地である。廣福寺は、後のラーマ 4 世 (1851–1868) 期にタイ語名 Wat Anamnikayaram に改称したように、この時期から安南派寺院が移民の菩提寺としてのいわば私的存在から、中国系大乘仏教寺院として社会的認知を受けていった⁷。安南派寺院は、ラーマ 5 世 (1868–1910) 期の 1897 年には 7 寺に所在していた。その一部はタイ国内残留を選択した。は 7 寺に所在していた⁸。

3. タイ国「安南」派

安南派の起源は、トンブリ朝～ラッタナコーシン朝初期 (19 世紀初) におけるベトナム人移民集団の建立に紐付けられて理解されており、その縁起は安南派内において言わば「歴史的レガシー」として継承されてきた。安南派 Annamnikaya の「安南 Annam」が想起するベトナムと重なることから、宗派としての実態はさておき、安南派組織自身も、安南派を取り巻くタイ社会・ベトナム側もまた安南派寺院＝ベトナム仏教寺院との認識が成立していると思われる。



図2 ベトナム大使館から寄進された梵鐘

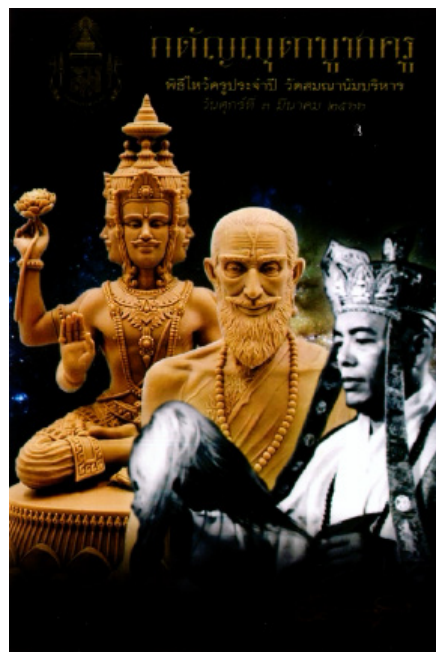


図3 宝恩・Jivaka 像・梵天像の絵葉書 (景福寺)

- 6 広南阮氏 Ong Chieng Sue がラーマ I 世に従いビルマ遠征に参加した後 Bang Pho に滞在。約 4 年間タイに滞した後仏暦 2329 年 (1786 年) に帰国した。その兄弟 Ong Hodueng duck と Ong Thong yung yan が後を追ってタイに移住したとされる [桜井 1979; Thanyathip 2022]。
- 7 私的寺院として建立された廣福寺はラーマ 3 世時代に公認寺院となったとされるが [Poole 1970: 25]、「公認」の定義が家産制国家とも言える当時のタイにおいて、国王による認知を受けた、あるいは法制度上宗教団体として承認されたことを意味するかは曖昧である。
- 8 前出「暹羅通信」によると、安南派 7 寺・中国派 3 寺と記述されており、1897 年当時から既に、中国系大乘仏教を 2 派に分けて認識していること、安南派の方が中国派よりも寺院としての同派組織化が早かったことが窺われる [村嶋 2024]。

ベトナム側では、1995 年 ASEAN に加盟しタイとの国交関係が再開すると、インドシナ戦争の戦跡訪問や戦間期の在タイ・在ラオス越僑による独立運動への貢献を懸賞する動きが始まった。2000 年代 ASEAN 圏が緩やかな繋がりとして発展していくと、ベトナム人の ASEAN 圏への短期流入・移住が増加し、タイ-ベトナム間外交・民間ベースの交流機会も増えてきた。この傾向に伴い、在タイベトナム大使館・ベトナム側仏教会から安南派への働きかけが活発に行われるようになった。すなわち、在タイベトナム大使館が音頭をとって安南派各寺院への梵鐘⁹・顕彰碑等の寄進や越僑会組織化、あるいはベトナム本国の仏教会から働きかけたベトナム仏教会・安南派間の交流事業やタイへの留学僧の派遣である。

安南派側もベトナム起源を意識しており、慶雲寺・普福寺が編集・刊行した記念本には、在タイベトナム大使が寄稿した挨拶や官員の参加行事写真を収録するなど、双方の親密さをアピールしている¹⁰。但し、両者の歴史的レガシー認識には、微妙な差異が存在している。

安南派では、(1) タイ国における大乘仏教伝播の端緒、(2) 1930-60 年代ベトナム人僧侶の活躍による同派の拡張にあり、一方、ベトナム側では、インドシナ戦間期における越僑とベトナム人僧侶及び越僑を支持母体とした安南派寺院による独立運動への貢献が評価されている¹¹。両者の認識の差異は、ベトナム人僧侶宝恩 (Báo An, バーオウン) の事績評価について、顕著に表れている¹²。安南派にとって、宝恩は同派景福寺住職在位中に行った種々の霊媒儀礼を通じて強力な霊験を以て越僑に留まらずタイ人信者を獲得し、安南派の拡大を導いた功労者である。宝恩が霊媒儀礼によって神降ろししたとされる Jivaka (耆婆) 像や肖像画は現在も各寺院に祀られている。前述した宝恩の活躍によって、「タイ民衆の間では霊媒術による fortune teller の寺としても有名」[桜井 1979: 78] となり、安南派寺院の支持母体を越僑・華僑からタイ人一般へと拡大させる契機となった。ベトナム側にとっては、宝恩は 1940 年代タイにおける Viet Minh による独立運動の支援者である¹³。すなわち、安南派・ベトナム側双方がひとつの歴史事実を異なる解釈をもって共有している。

4. 安南派寺院の現状

安南派の自己及びタイ社会における認識においてベトナム由来を標榜しているにも関わらず、安南派各寺院の内実から「ベトナム性」が失われて久しい。1979 年安南派の景福寺ほかを調査した桜井は、「僧侶は 8 人で 2 人がヴェトナム系、6 人が中国系のタイ人であるが、一様に黄色の衣を着けタイ語で談笑し、また建物もヴェトナム寺院特有の龍の屋根飾り、中国ヴェトナム両寺院に共通してみられる漢文の額、聯等を除けば、建物の様式や壁面に飾られるジャータカとおぼしき絵画等、素人目には上座部寺院のそれと明確な差をみいだしがたい」「景福寺のほとんどの僧は漢字のヴェトナム音を知らない」とすでに安南派寺院でベトナム人僧侶・ベトナム語による經典読誦が維持できなくなりつつある状況を報告している [桜井 1979: 76-77]。

安南派各寺では、概ね釈迦如来を本尊とし、薬師如来と観音・文殊の両菩薩を脇佛として¹⁴、神部では帝釈天・梵天・韋駄天を以て構成されており、大乘部・上座部双方に配慮している。

安南派僧侶は、同派内・中国派寺院から調達されており、ベトナム出身僧侶はいない。試みに各寺の僧侶にその出身を問うと、一様に中国系タイ人として中国派寺院とその仏教学校で学んだ後に安南派に移ったと回答された。

安南派寺院における經典読誦も、管見の限りでは、タイ国内で販売されている漢字經典 (タイ音ルビ付) を使用していることから、ベトナム語音ではなく、中国語音から構築された「五音」に拠っていると思われる¹⁵。

9 安南派各寺院に梵鐘 (ベトナム語文・ベトナム地図入り) が寄進されている。

10 普照寺が開催した 100 周年記念法会を記録した「In Commemoration of Charoen Dhamma Panyanusorn : The Annam Nikaya Sangha of Thailand…」(2018) など。

11 社会主義政権下において等閑視されていた仏教・カトリック教などの抗仏・抗米運動への貢献について、2000 年代以降専著・回顧録等で刊行されるようになった。宝恩については、新聞各紙が Nguyễn Hùng 編の回顧録 (2005 年) 等に依拠して、その事績を大きく採り上げた (<https://www.sggp.org.vn/duong-quang-dong-xuyen-tay-post359077.html>)。

12 宝恩の事績と安南派における供養儀礼については、5 章西田論考に詳述。

13 安南派と Viet Minh の関係については、Goscha (1999)、Trần Đường (2009)、Phalasthira (2015) ほか。

14 Chachoengsao 所在三寶公佛寺では、寺名が示す通り三寶公を本尊とし、後背に渡海文殊群を配していた。

15 片岡によると、タイ国中国派寺院で使用されている漢文經典の読み方は北京語・潮州語でもない、五音 (Ngou Im) と俗称される特殊な合成言語である [片岡 2015: 80]。

安南派寺院は概ね禪宗に属する。法統については、一寺内の師弟継承例が少なく、住職の代替わりに際して曹洞宗と臨済宗が交替する例も往々にあり、寺院・宗派内で連綿とその独自性を継承していく意識は薄いようである¹⁶。2、3寺の祖師廟・供養塔を散見する限り、ベトナム出身僧侶も1980年代以降在籍していないと思われる¹⁷。

これら「ベトナム性」喪失の背景には、1970～90年代前半までのタイ・ベトナム間外交関係の低迷や越僑のタイ出国が影響している。「本国」との断絶によって、宗派を維持する資源となる僧侶・信者が補充できず、タイ国内中国系タイ人・中国派寺院へと傾斜せざるを得なかった。

一方で、安南派の枠組みは依然として現在まで維持されており、中国派と一体化することはない。その理由として、タイ国行政法上で「安南派」が公認された組織体として稼働しており、敢えて既存の枠組みを再編する必要性がないからでもあるが、前述した歴史的レガシーを以て中国派との独自性をタイ社会に対して喧伝していることが挙げられよう。功德・靈験は、越僑・華僑に限らずタイ人の嗜好に合い、毎年タイ王室を前にして行われる供養儀礼（ゴンテック）や宝恩の靈験を採り上げるテレビ番組など、メディアを通じてタイ国安南派の存在が膾炙している。

5. 安南派組織

タイ国25寺3僧堂から成る安南派各寺堂は、安南派に属している認識を有し、安南派長の選出・各種会合等安南派組織の構成員としてその運営に等しく与っている。これら寺院の中には、タイ国王から称号を下賜された証として「勅賜」、独自の寺号を掲げている寺院がある。うち、それぞれ鎮國・興國・護國を冠しているのが景福寺・廣福寺・普福寺の3寺であり、それぞれ「勅賜鎮國景福寺」・「勅賜護國廣福寺」[桜井1979: 73, 76]・「勅賜興國普福寺」(2023/8調査による)と称し、寺号の「福」の一字も共通しており、これら3寺が親しい関係性を持っていたことが窺われる。寺号の命名はその寺の縁起・願望等が反映するものであり、タイ語名に含まれない鎮國・興國・護國を敢えて掲げるに何らかの意図が含まれていると推察されるが、これらの「國」がタイ国・ベトナム国あるいは漠然とした「国」を示すかは不詳である¹⁸。

また、Chanthaburi所在福田寺は、「鎮國長江安養福田寺」を称し、「長江安養」はベトナム中部フエ由来の地名と言われている¹⁹。

安南派内では、僧侶以外にも、經典・仏具の貸借・譲渡・融通等協力関係がある²⁰。Samutsakhon所在普照寺²¹の聴取例では、80年代華僑宗廟に使用されていた寺域を近年安南派の仲介により取り戻して寺を再建した際に、新造するには高価と思われる仏具・造作等はほかの安南派寺院から譲渡されていた。Chanthaburi所在福田寺の聴取例では、1950～60年代にかけて菩薩堂改修に際して、本尊をバンコクから運び、宝恩を含む安南派各寺の僧侶が集まって盛大なセレモニーが行われた、Kanchanaburi所在慶壽寺には他寺から譲渡されたと思しき古鐘が所持されている等々、安南派内において儀礼等折々の機会に相互協力がなされている。

Samutsakhon・Chanthaburi所在安南寺院の聴取例からは、同派の寺院数増の仕組みとして、前述した僧堂から寺院への昇格という要因に加えて、寺が経営拡大を目指して新たに分寺を構える・年数を経た僧侶が寺堂を構えて独立するが相まっていることが窺える。すなわち、Samutsakhonでは、一時的に寺が断絶した後に現住職が安南派から補填されて復活している。またChanthaburi所在福壽寺は同じくChanthaburiに所在する福田寺の言わば分寺であり、住職も本寺から派遣され、同寺域内に一般信者向け瞑想道場が設けられ、週末になると本寺の住職・僧たちが指導のために来参する。いずれの例も、住職たり得る適当な人材の当て、なによりも葬祭業・瞑想道場といった寺院経営の目処をつけての営為であろう。2000年代以降タイ在住ベトナム人（＝越僑）人口

16 聴取した僧侶によると、「曹洞宗も臨済宗も同じ禪宗だから（問題なし）」(2023.8)

17 2019年10月安南派景福寺訪問の際にベトナムからの留学僧が止宿していたが、留学先寄宿舎が完成して以降留学僧の受入はなくなった。

18 1897年日本人僧侶による景福寺訪問記事では、安南派寺院景福寺を「勅賜鎮南景山寺」と称しており、当初は「鎮南」＝ベトナム（＝旧国号の大南・越南）を指していた可能性がある（『暹羅通信』大阪毎日新聞明治30年10月10日付6面）

19 ベトナム中部地名と言われているが、実際にはベトナム北部長江 Trường Giang・安養 An Dương とともにベトナム北部 Yên Bái 省の社名。

20 景福寺旧蔵經典の中にも、僧侶の異動や貸借によると見られる會慶寺・興福寺・慈濟寺旧蔵經典が散見される [桜井1979: 86, 97, 101, 105]。

21 旧建物は現在葬祭業者事務所となっており、壁に宝恩の大判肖像写真が掛かっている。



図5 寺名

左：廣福寺の山門「勅賜廣福寺」(Bangkok, Ban Pho)

上：福田寺の菩薩堂扉「勅賜鎮國長江安養福田寺」(Chanthaburi)

も増加しているとは言え²²、安南派各寺院がタイ社会に根を下ろし、タイ人・中国系タイ人を信者層として取り込んでいる証左とも言えよう。

調査対象の安南派寺院13寺は、概ね禅宗に則り、葬祭・供養・お祓い等宗教儀礼に伴う布施を経営の核として位置付け、寺域面積に余裕がある寺には葬祭場が付設されている（景福寺・廣福寺・福田寺など）。一方で、ヤワラート近では狭小な寺域と華僑・中国系タイ人が集住する地の利を活かして盂蘭盆行事の寄進を積極的に募る寺院もある（翠岸寺・慶雲寺）。

うち、Kanchanaburi 所在慶壽寺・Samutsakhon 所在普照寺・Chachoengsao 所在三寶公佛寺では、現在中国人宗廟・中国寺院が隣接している。普照寺住職から聴取した同寺の寺域譲渡と取り戻しの事例を敷衍するならば、これら3寺は寺域の一部を譲渡したと推察される。

6. まとめにかえて—タイ国安南派とは何か？

本報告では、タイ国安南派寺院の現地調査を通じて、その歴史的形成過程と現在の実態を明らかにした。結果として、安南派は Annamnikaya という名称や起源においてベトナムとの強い歴史的結び付きを有し、タイ社会・ベトナム双方から「ベトナム仏教寺院」と認識されている一方で、現在の寺院運営や僧侶構成、宗教実践にはベトナム的要素はほとんど残されていないことが確認された。

1970年代以降のタイ・ベトナム間の国交停滞や越僑社会の変容により、ベトナム出身僧侶や越僑・華僑を母体とする信者社会との連続性は失われ、安南派は中国系タイ人僧侶とタイ人信者を基盤とする中国系大乘仏教寺院へと変化してきたと言える。しかし、タイの宗教行政上「安南派」という独立した組織が維持されていること、また創建伝承や歴史的レガシーが宗派のアイデンティティとして継承されていることから、中国派へ統合されることなく独自の組織を維持している。

さらに、安南派は固定的な宗派組織ではなく、寺院経営や信徒基盤に応じて寺院の新設・復興・昇格・分寺化が柔軟に行われ、僧侶も宗派を越えて移動するなど、個々の寺院についても、その実態としては教義よりも葬祭・供養・祈祷などの宗教的サービスを提供する経営組織として機能している。

²² 越僑が集住するラオス国境に接する Udonthani 所在慶安寺では、寺域にベトナム語学校が付設されており、新旧の越僑人口が信者層となっている可能性がある。

参考文献

- 桜井由躬雄. 1979. 「研究ノート：在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本目録」『東南アジア：歴史と文化』No. 8. 73-117.
- Poole, Peter A. 1970. *The Vietnamese in Thailand: A Historical Perspective*. Cornell University Press.
- Thanyathip Sripana ; 西田昌之訳. 2022. 『ベトナム人と安南派仏教（アンナムニカーイ）の来泰、およびラッタナコーシン王朝初期におけるワット・サマナーナムボーリハンの建立』（Japan-ASEAN Transdisciplinary Studies Working Paper Series. No.13）. 京都大学東南アジア地域研究研究所.
- 村嶋英治. 2023. 『南北仏教の出会い：近代タイにおける日本仏教者, 1888-1945』（リサーチシリーズ No. 7）. 早稲田大学アジア太平洋研究センター.
- 村嶋英治. 2024. 「『南北仏教の出会い：近代タイにおける日本仏教者, 1888-1945』への補遺・修正：吉丸徹太郎, 重田友介を中心に」『アジア太平洋研究』No. 49. 51-97.
- Goscha, Christopher E. 1999. *Thailand and the Southeast Asian Networks of the Vietnamese Revolution, 1885-1954*. Curzon
- Nguyễn Hùng. 2005. *Dương Quang Đông, Xuyên Tây : truyện dài tư liệu*. NXB. Công an Nhân dân.
- 片岡樹. 2015. 「タイ国の大乘系経典におけるいわゆる「五音」について」村上忠良編『宗教実践における声と文字-東南アジア地域からの展望-』pp. 78-92.
- 林行夫. 2008. 「東北タイ仏教社会の時空間マッピング：寺院をめぐる情報とフィールドワーク」『アジア遊学 113. 地域情報学の創出』84-91.
- Trần Dương. 2009. *Cuộc Hành trình của Bác Hồ trên đất Thái Lan* NXB. Văn hóa-Thông tin.

Wat Samananam Borihan in Bangkok and the Vietnamese in the early-Rattanakosin Period

Thanyathip Sripana

- This research started in 2020
- **Objective** of my research and presentation is to :
 - As our colleagues are studying on scripture found in this temple , I would like to introduce the temple, by giving some information and overview.
 - Explore the builds in this temple
 - Briefly examines and identify those who played key role in founding, developing the temple
 - The Vietnamese community in the past around the temple

2

Methodology

The research is based on documentary research, interviews, and field surveys conducted from mid 2020 until even now.

- **Collecting information;** using rare books and documents which is very hard to find and so expensive.
 - Royal chronicles and documents published by Annamnikaya temples were meticulously read, as well information regarding Samananam Borihan Temple scattered across numerous other documents.
- Several long **interview and discussion** sessions were conducted with senior monks and other informants.
- **Visiting and exploring** this temple and others in Bangkok and in other provinces
- In fact, I know and visited this temple for the first time when I was 6 years old, and had opportunity to meet the former Vietnamese abbot who is very important person.

3

การมาถึงของชาวเวียดนาม ศาสนาพุทธอนันตนิภา
และการก่อตั้งวัดสมณามันนบริหารในไทยในสมัยกรุงรัตนโกสินทร์ตอนต้น
ベトナム人と安南派仏教(アンナムニカイ)の来泰、および
ラッタナコーシン王朝初期におけるワット・サマナーナムボーリハーンの建立
The Arrival of the Vietnamese, Annamkaya Buddhism, and the Formation of the
Samananam Borihan Temple in Thailand in the Early Rattanakosin Period

ธัญญาทิพย์ ศรีพนนา
Tanayathip Siripana

แปลภาษาญี่ปุ่นโดย มาซายุกิ นิชิคุะ
西田 昌之 訳
Translated by Masayuki Nishida



Japan-ASEAN Transdisciplinary Studies Working Paper Series No.13
January 2022

uploaded on the [Kyoto University repository KURENAI](#)

4

Names of Wat Samananam Borihan temple

- Wat Samananam Borihan was called *Cảnh Phước Tự* or *Chùa Cảnh Phước* at the beginning. It was also called in other names by local people.
- *Wat* means temple in Thai. *Chùa* means temple in Vietnamese.
- Wat Samananam Borihan is 1 of the 24 Vietnamese temples in Thailand. The Vietnamese temples, we can call Annamnikaya or Annamnikai temples. I will use the term *Annamnikai*.
 - What is *Annamnikai* ?

5

Names of Wat Samananam Borihan temple

- Wat Samananam Borihan was called *Cảnh Phước Tự* or *Chùa Cảnh Phước* at the beginning. It was also called in other names by local people, such as :
 - Wat Yuan Nang Lon
 - Wat Yuan Saphan Khao
 - Wat Klong Padung*Wat* means temple in Thai. *Chùa* means temple in Vietnamese.
- Wat Samananam Borihan is 1 of the 24 Vietnamese temples in Thailand. The Vietnamese temples, we can call Annamnikaya or Annamnikai temples. I will use the term *Annamnikai*.
 - What is *Annamnikai* ?

6

Annamnikai Buddhism

What is Annamnikai ?

What is the meaning of Annamnikai ?

- Annamnikai means Vietnamese Mahayana Buddhism in Thailand. The word *Annamnikai* has been used only in Thailand.
- Vietnamese Buddhism was brought from Vietnam into Siam/Thailand during Thonburi period and the early of Rattanakosin period by the Vietnamese monks.
- When a number of the Vietnamese had migrated and settled down in Siam in the mid of the 18th century, due to internal conflict in Vietnam. The first Vietnamese temple was built for the first time during Taksin reign of Thonburi period, then the next ones during the first reign of Rattanakosin, and after that.

7

The founding of the temple

- The temple started to be founded in form of a monk house without Ubosot or Viharn or Chapel, in the reign of Rama III (1824-1851) with the participation of the Vietnamese in the area . (later, as well as the Chinese).
- It became a temple when the Ubosot or Viharn or chapel was built with the support of King Rama IV (1851-1868).
- The temple has been actively supported not only by Rama IV, but later also strongly by King Rama V (1868-1910) and King Rama IX (1946- 2016) too.
- King Rama V gave name as Wat Samananam Borihan in 1875, and appointed Abbot of Samananam Borihan, (as well as the Chief Abbot of Annamnikai Buddhism in Siam)
- Wat Samananam Borihan is the place where the Vietnamese have met each other from the period of Rama III until Rama IX.

8

The buildings in the temple :

- The Ubosot
- The Stupas
- The Mandapa or Mondop

9

Ubosot is the most important building in the temple. Ubosot means the ordination hall, where new monks are ordained and other important ceremonies take place. The ubosot is not necessarily the largest building in a temple compound, and may not always be open to the public. The ubosot will always have an alter with at least one Buddha image, the ubosot is surrounded by Bai Sema stones.

Bai Sema is boundary markers, always made of stone. The ubosot is always surrounded by eight boundary stones, marking the sacred ground of the temple. The word *bai* means *leaf* in Thai. The stones are usually leaf-shaped



17 Bar (eastern side), Wat Yuen, Bangkok



10



11



12

Bai Sema is boundary markers, always made of stone. The ubosot is always surrounded by eight boundary stones, marking the sacred ground of the temple. The word bai means "leaf" in Thai. The stones are usually leaf-shaped



13



16

The Abbots of Wat Samananam Borihan from 1875 to the present :
6 abbots : 4 Vietnamese, and 2 Chinese descent

- Ong Chi Lap had very close relationship with King Rama IV and V
- Received support from the kings
- Uposot construction supported by King Rama IV

17

The Temple and the Vietnamese

• The Vietnamese community in the past around the temple

- The Vietnamese community was found on the moat of Padung Krungkasem Canal, surrounded the temple
- As the community was set up next to big market, trade areas (Nang Lon, Mahanak), the community grew up very fast
- The community took big part in building temple, so they had close ties with the temple.

18



Padung Krungkasem Canal

In 1897

<https://www.facebook.com/photo.php>



In 1947

<https://www.pinterest.com/pin/161214861655908726/>

19



คลองตุงกรุงเกษมถ่ายในสมัยรัชกาลที่ ๖



20



21



22

Where did the Vietnamese in this area come from ?

- The Vietnamese who set up community on the moat of Padung Krungkasem Canal, they arrived in Siam during Siam's King Rama III :
 - they were prisoners of war, the war between Vietnam and Siam, or
 - Some voluntarily fled the battle from Vietnam to Siam.
 - Some are the villagers who fled the hardship in southern Vietnam and Cambodia, and joined Siam forces to Bangkok.
 - They were brought to Siam by Siam forces. A number of Vietnamese prisoners of war were allowed to serve in Siam's army.
- Regarding the first arrival in Siam of the Vietnamese, it was in the Ayutthaya period, particularly in the reign of King Narai (1656-1688) .
- The came to Ayutthya for trade and came with the French missionaries.
- Later in Thonburi period (1767-1782) and in the early Rattanakosin period (from 1782-1850). They fled Vietnam due to internal political conflict, religious repression in Vietnam.

23

- Those who lived Samananam Borihan area were those who arrived in Bangkok in 1834. A number had already lived in the area before 1834.
- The Vietnamese who arrive in Siam in 1834 were first sent to Kanchanaburi province to guard a fortress against the Burmese (built in 1832).
- Later upon their request to the King Rama IV, they were allowed to move and live in Bangkok, precisely in the area of Samananam Borihan temple nowadays, along Padung canal. For those who wished to live in Kanchanaburi province, they could do.
- In the reign of King Rama III, the Vietnamese took part in building a small house of monks. But after a number moved from Kanchanaburi to this area, they help build temple, Ubosot in particular which was supported by King Rama IV.

24

The role of the Vietnamese in building and maintaining the temple in the Early-Rattanakosin period

- The first Abbot of the temple
- Phra Chonlathan, a Vietnamese-Thai Métis, a hind ranking officer in a ministry
- Luang Annam, a Vietnamese, an officer in Siam Army.
- These two persons had an important role in fostering the temple, fund raising in order to maintain and renovate the temple.

25

The relationship between the Vietnamese community and the temple in the past, apart from maintaining and renovating the temple, can be perceived from :

- The burial of the Vietnamese in the old stupas in the temple
- The burial of the bones and ashes at Mondapa in the temple
- This means an attachment of the Vietnamese to the Temple.

26

- Today, no Vietnamese live in the area around Wat Samananam Borihan,.
- They gradually left to live in other places as the neighborhood became crowded.
- Impacted by Vietnam War and the Thailand-Vietnam relationship deteriorated
- The community was impacted when Vietnam's war against the US escalated in the 1960s, and the Thailand-Vietnam relationship deteriorated. They were suspected of supporting the Communist regime in North Vietnam and came under surveillance. This also caused them to leave the community.
- It was not until the political situation in the region, and the Thailand-Vietnam relationship, improved in the early 1990s that Thai of Vietnamese origin (Việt Kiều) living in Thailand, and Vietnamese from Vietnam, came to visit Samananam Borihan Temple again.
- Though there are not Vietnamese anymore in the area at present, some Vietnamese born in Thailand, as well as those from Vietnam, still visit the temple

27

- Wat Samananam Borihan was founded in the mid 19th century and has still existed until now.
- It is considered an important Annamnikai temple, among 24, in Vietnamese style.
- This is an overview of the Temple.
- Thank you for your attention.

第3章

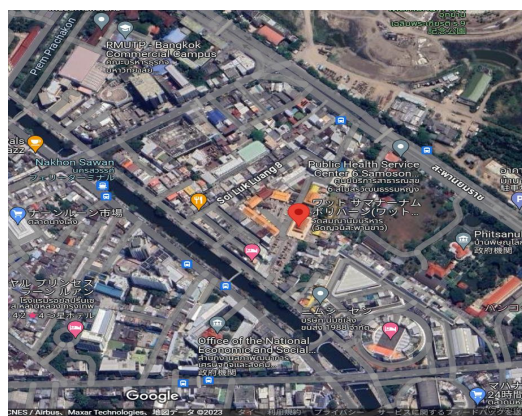
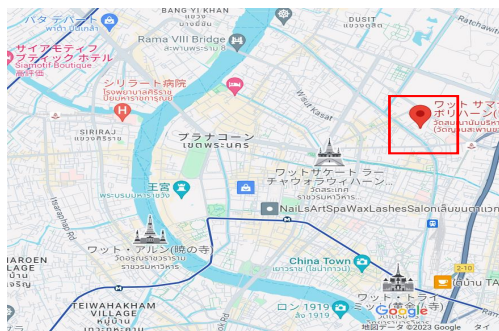
景福寺 Wat Samananam Borihan の建築的特徴

大田 省一・Xaroj Phrawong

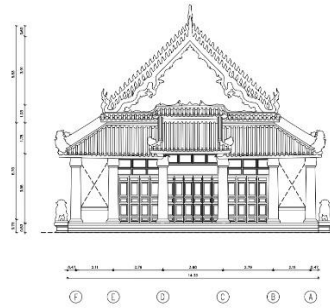
景福寺 Wat Samananam Borihan 簡史

- ベトナム移民の僧堂として、現在地（パドン・クルンカセム運河 Padung Krungkasem canalに面した位置）に建立.
- ラーマIII世(1824–1851CE)期に、景福寺 Cảnh Phước Tự(Canh Phuoc Temple) と命名.
- 仏堂viharn (ubosot) がラーマIV世の寄進により建立.
- 1875年、Wat Samananam Borihan とラーマV世 (1868-1910)により命名.
- 仏暦2491年(西暦1948年)、仏堂 ubosot改修
(碑文では「改葺（屋根の葺き替え）」となっているが、より大規模な改修が行われたと思われる)

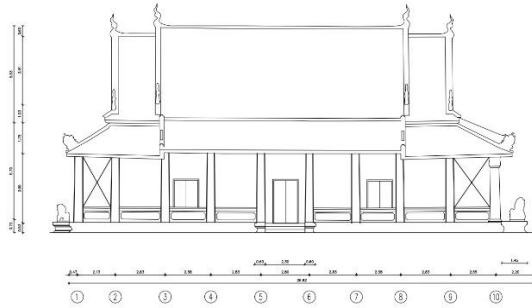
周辺図



正面図・側面図（仏堂 Ubosot）



ELEVATION 1
SCALE BAR 0 1 2 3 4 5 10



ELEVATION 2
SCALE BAR 0 1 2 3 4 5 10

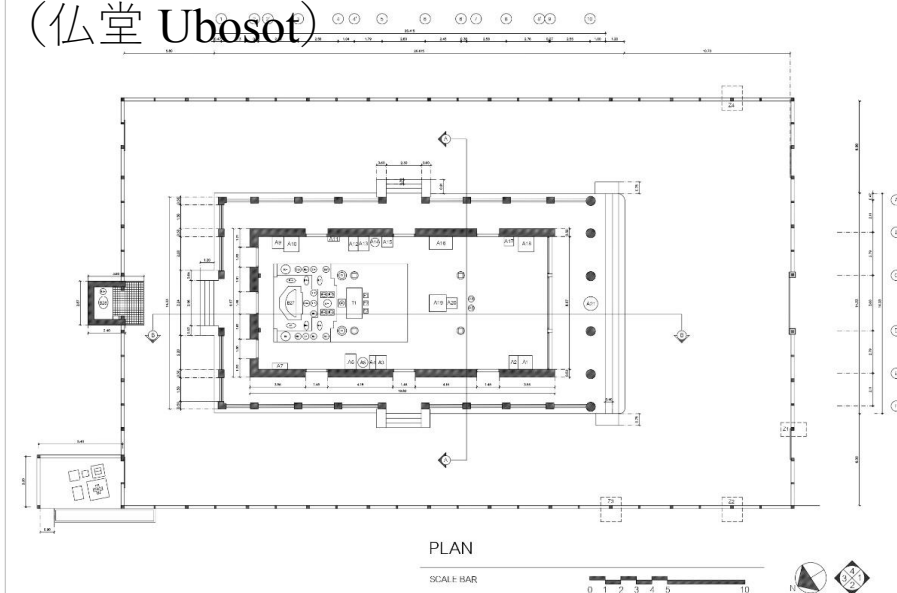
外観（仏堂 Ubosot）



仏堂 Ubosot の変遷



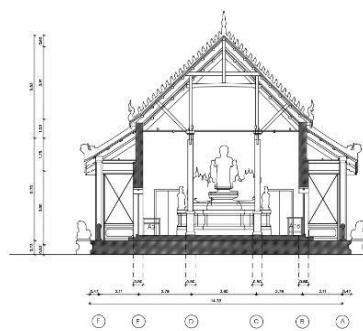
平面図 (仏堂 Ubosot)



内観（仏堂 Ubosot）

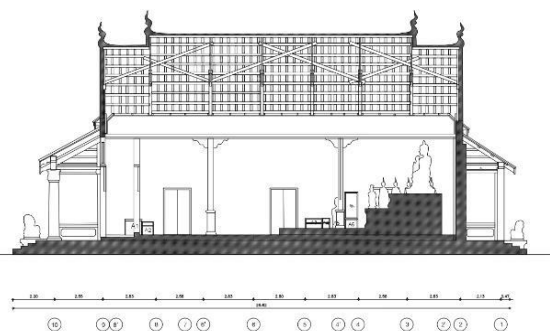


断面図（仏堂 Ubosot）



CROSS SECTION

SCALE BAR 0 1 2 3 4 5 10



LONGITUDINAL SECTION

SCALE BAR 0 1 2 3 4 5 10

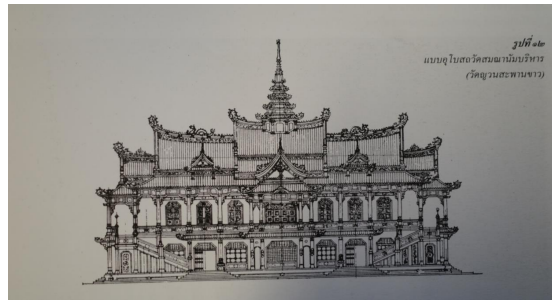
仏塔 Mondop



Mondop



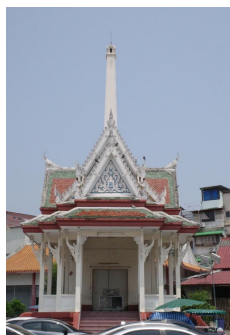
祖師堂



藏經樓



火葬施設



Architectural Survey of Annamnikai Temples in Thailand: Focusing on the Eclectic Forms of Architectural Expression in Buddhist Temples in Thailand and Vietnam

Xaraj Phrawong

Introduction

From 2023 to 2025, architectural surveys were conducted on six Vietnamese Buddhist temples, an An Nam sect (Annamnikaya) in Thailand, and five other temples. This survey report provides an overview and architectural drawings of the five temples. Wat Samananam Borihan Temple (Chùa Cảnh Phước, 景福寺) will be covered in another survey report.

This survey aimed to examine the historical development and transformation of the Vietnamese Buddhist temples (Annamnikaya) in Thailand, which have a history spanning nearly 300 years, through an analysis of changes in their architectural forms. I selected five sites among more than twenty Annamnikaya temples as following (see Table 1).

Table 1

No	Romanized Thai name	Thai official name	Chinese name (Han characters)	Vietnamese name
4	Wat Thawornwararam	วัดถาวราราม	慶壽寺	CHÙA KHÁNH THỌ
6	Wat Khet Na Bunyaram	วัดเขตรักษาบุญาราม	福田寺	CHÙA PHƯỚC ĐIỀN
10	Uphaipatikaram Temple	วัดอุทัยภาติการาม	三寶公佛寺	CHÙA TAM BẢO CÔNG
15	Wat Sratthayimphanichwararam	วัดศรีททัยมพานิชวราราม	普照寺	CHÙA PHỔ CHIỂU
24	Wat Nopparat Wanaram	วัดนพรัตน์วาราม	福壽寺	CHÙA PHƯỚC THỌ

Note: List numbers are based on the Annamnikaya temple list in Chapter 1-1.

These five temples include historically significant temples established by the early twentieth century and newly founded temples constructed after the 2000s¹. The architectural surveys were conducted at these sites, together with interviews with temple related personnels.

Among the five temples selected for this survey, two historic temples—Wat Thawornwararam, Wat Khet Na Bunyaram—were established between the nineteenth and early twentieth centuries. Both of two were located at key nodes of water transportation networks and were founded by immigrant communities from Vietnam (and China). However, owing to the rise and decline of these immigrant communities, which constituted their principal body of devotees, as well as the effects of recent urbanization, these temples have undergone repeated renovations. As a result, it has become difficult to identify traces of their original architectural styles.

The remaining two temples—Wat Sratthayimphanichwararam and Wat Nopparat Wanaram—are newly established temples founded in the 2000s. The circumstances surrounding their establishment reflect recent changes in the composition and characteristics of their devotee communities.

The following section outlines the histories and architectural features of these five temples.

1 Annamnikaya association in Thailand. <https://www.anamnikayathai.com/anamzzzzsect-temple-house>

4. Wat Thavorn Wararam (วัดถาวราราม, 敕賜慶壽寺)

Address: Ban Nuea, Mueang Kanchanaburi, Kanchanaburi 71000

History

During the reign of King Rama III, many Vietnamese families migrated to Thailand seeking refuge. In 1834, the government relocated some of them to Kanchanaburi Province, where they established an Anam Nikaya sect temple.

The construction of the ordination hall was completed in 1895. Later that year, the abbot requested a royal name from King Chulalongkorn (Rama V). On February 24, 1896, the temple was royally granted the name "Wat Thawon Wararam."

Overview

The temple was established in the late nineteenth century on the basis of an undifferentiated community of Vietnamese and Chinese migrant laborers who had settled in Kanchanaburi and formed its lay supporter base. The temple grounds, which once extended to the banks of the River Kwai, have gradually diminished in size as urbanization has progressed. In front of the main gate lies a cemetery area densely populated with Chinese-style tombstones, while approximately half of the inner precincts are now occupied by a Chinese temple. No trace remains of the original main hall; only a new reinforced-concrete ordination hall stands on the site, following renovation and reconstruction works that began in 1968.

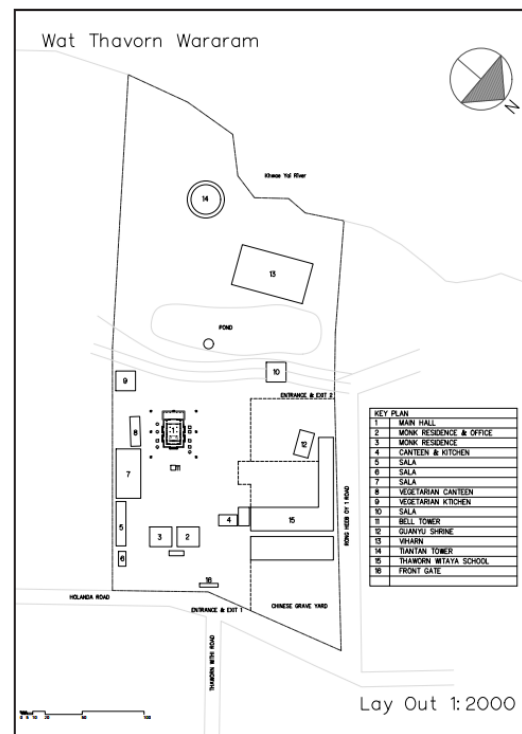


Fig. 1 Lay out of Wat Thavorn Wararam



Fig. 2 Inside the main hall



Fig. 3 In front of the main hall

6. Wat Khetnaboonyaram (วัดเขตรับบุญาราม, 福田寺)

Address: 151 Thanon Khwang, Wat Mai, Mueang Chanthaburi, Chanthaburi 22000

History

This temple was built by Vietnamese immigrants who settled in Chanthaburi Province during the reign of King Rama III.

Construction began in 1834, and the temple is now 183 years old. It is a Mahayana Buddhist temple of the Anam Nikaya sect, governed by Anam Nikaya monks. During the reign of King Rama V, His Majesty graciously bestowed a Thai name upon the Vietnamese temple, preserving the original meaning. "Phueak" (福) translates to "merit," "Dian" (田) translates to "field," and "Tue" (寺) translates to "temple." Therefore, on February 24, 1896, the temple was royally granted the name "Wat Khetna Bunyarama."

Overview

Located on the coast of the Gulf of Thailand, Chanthaburi has long served as a collection and distribution center for goods from Vietnam and Cambodia, and has historically been home to Vietnamese and Chinese communities. This temple is situated adjacent to an old market known for trading gemstones from Cambodia. During the Vietnam War, large numbers of Vietnamese refugees arrived in the area as boat people, leading to the establishment of Buddhist temples and Catholic churches that served their communities. This temple was likewise renovated and expanded in response to the increase in the local Vietnamese refugee population.

The new main hall was constructed in 1968, replacing the old, traditional-style hall, as evidenced by old photographs. The new hall, built with modern materials like concrete, is a blend of Theravada Buddhist architecture in its form and a mix of Thai and Chinese decorative styles. The connection to King Chulalongkorn (Rama V), who named the temple, is displayed through the royal emblem of King Chulalongkorn at the main entrance gate.



Fig. 4 Lay out of Wat Khetnaboonyaram



Fig. 5 Inside the main hall



Fig. 6 In front of the main hall



Fig. 7 In front of the old main hall

10. Wat Upai Patikaram (วัดอุภัยภาติการาม, 敕賜三寶公佛寺)

Address: Thanon Suphakit, Na Mueang, Mueang Chachoengsao, Chachoengsao 24000

History and Overview

Originally, this was a Chinese Mahayana temple built in 1906. King Chulalongkorn (Rama V) visited the temple in 1917 and contributed funds for its construction, also bestowing the name "Wat Uphaiphatikaram." In 1969, it was converted into a Vietnamese temple. The structures within the temple are all built with modern materials, and the current ordination hall was renovated in 2024.

A Chinese clan ancestral hall stands adjacent to the main ordination hall, and the principal deity enshrined in the hall is Sanbao Gong (三寶公), is a personal deity of Chinese origin.



Fig. 8 Lay out of Wat Upai Patikaram

15. Wat Sattha Yim Phanich Wararam (วัดศรัทธายิมพานิชวราราม, Chùa Phổ Chiêu từ)

Address: Mahachai, Mueang Samut Sakhon, Samut Sakhon 74000

History and Overview

Based on information from the National Office of Buddhism, the temple was established on November 17, 2003. It has not yet received a Wisungkamsima (royal grant for the land where the ordination hall is located).

According to the abbot, the site was originally established as a Vietnamese Buddhist (Annam Nikaya) temple, but was later converted into a Chinese ancestral shrine. In the 1990s, the Annam Nikaya organization sought the return of the property and subsequently reestablished the temple. As a result, architectural elements such as the altar platform (Sumeru pedestal) in the main hall were reused from other Annam Nikaya temples. The temple compound also contains a funeral service office, where photographs of Annam Nikaya monks from the 1960s are displayed. A Chinese ancestral shrine is located adjacent to the temple.

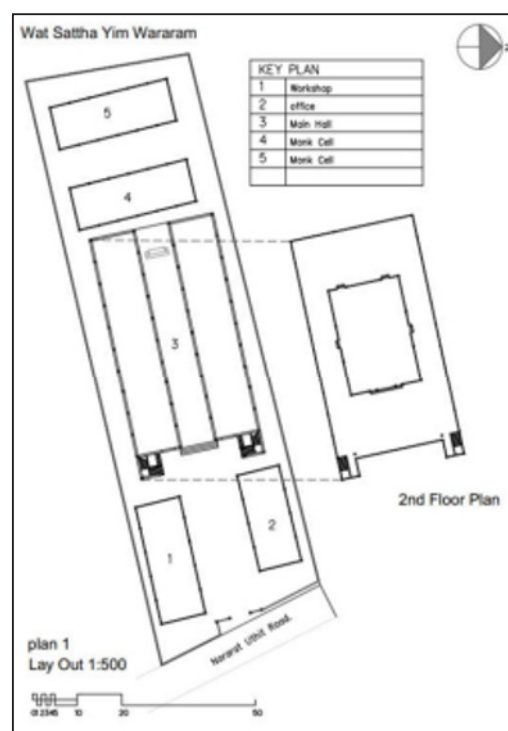


Fig. 9 Lay out of Wat Sattha Yim Phanich Wararam

24. Wat Noppharat Wanaram (วัดนพรัตน์วานาราม, Chùa Phước Thọ Từ)

Address: Phatthawi Sub-district, Makham District, Chanthaburi 22000

History & Overview

Wat Noppharat Wanaram is a branch temple of Wat Khetnaboonyaram that hosts activities related to teaching Buddhist principles and meditation practice. Construction of this temple began in 2013 and is not yet complete. Some parts of the temple are already in use, but the ordination hall is still awaiting completion.



Fig. 10 Lay out of Wat Noppharat Wanaram

Conclusion

A Buddhist temple consists fundamentally of 3 essentials as the Buddha, the Dharma, and the Sangha, together with the internal organizational structures that support them (temple administration and financial management) and the community of lay devotees outside the temple. Changes in these constituent elements are often manifested in corresponding changes to temple architecture.

From the overview of these five temples, it is evident that these Buddhist temples were significantly influenced by changes in the lay communities that supported them.

In other words, the development and decline of Vietnamese migrant communities, which formed the social base of the Annamnikaya temples, directly affected the temples' history. Established between the nineteenth and early twentieth centuries, these temples underwent major renovation and expansion of their facilities during the 1960s in response to the increase in Vietnamese refugees during the Vietnam War. The main halls that remain today largely date from that period.

This survey was unable to clearly determine what architectural differences, if any, distinguish these Annamnikaya temples from Chinese Buddhist temples, which likewise adhere to Mahāyāna Buddhism. Therefore, further and continuing research will be necessary.

力の源としての死後世界

—タイ国安南派仏教団（アンナムニカーイ）における心霊譚の活用

西田 昌之

本稿は、タイ国においてベトナム仏教を起源とする公認の大乗仏教宗派の一つである安南派（アンナムニカーイ）に注目し、同宗派が死後世界および靈魂に関する語り（心霊譚）をいかに宗派の権威形成と社会的関係の構築に活用してきたかを明らかにする。特に、追善供養儀礼であるゴンテック（功德）儀礼と、憑依・招魂儀礼をめぐる実践と語りを分析し、それらがタイ王室儀礼、政治権力、ベトナム移民との関係の中で果たしてきた役割を検討した。

はじめに

安南派仏教団（アンナムニカーイ）は、タイ国に2つ存在する公認大乗仏教教団の一つであり、ベトナム仏教を起源とする宗派である。18世紀後半以降、ベトナム仏教僧によってタイ領域¹内にもたらされ、現在ではタイ国内に23寺、海外に1寺を有する教団へと発展している [คณะสงฆ์อนัมนิกายแห่งประเทศไทย 2020]。本稿は、安南派が死後世界や靈魂との関係性を強調してきた点に注目し、そうした実践と語りが宗派の基盤としてどのように機能してきたのかを検討する。なお本研究は2022年の京都大学東南アジア地域研究研究所におけるタンヤーティップ・シーパナー博士の論文翻訳研究プロジェクトおよび2023年に実施された本科研費による現地調査と資料収集に基づく考察である。

タンヤーティップによる安南派の歴史をまとめると、次のようになる [タンヤーティップ 2022: 99–101]。安南派は19世紀後半、ラーマ四世およびラーマ五世の庇護の下で王室から正式に公認された。特にラーマ四世は皇太子モンクット王子であったときに剃髪して僧となっていたが、大乗仏教戒律への関心を通して、安南派僧と交流を深めた。王子がバンコクを視察している時に、慶雲寺の仏塔に目を止め、同寺が大乗仏教の寺であることを知った。そこで当時、その寺の僧であったオン・チャン・フン（Ong Trần Hưng）に大乗仏教戒律について下問した。これによって王子の知遇を得たフンは、王子の自由時間に大乗仏教についてわかりやすく教授することとなった²。それ以降ベトナム僧は王の御前に伺候する機会が与えられた。1851年に王子がラーマ四世として即位すると、フンを慶雲寺の住職に任じて、寺院修繕の支援を行った。

さらに次のラーマ五世は1899年に安南派を王室行事に参加可能な僧団として制度的に位置づけた。僧位階を整備し、僧位扇（ターラバット）を与え、御前に伺候すること、王の誕生日の祝いの儀式に僧が祝いを述べることなどを許した [タンヤーティップ 2022: 100]。これにより、安南派はタイにおける大乗仏教の代表宗派としての地位を確立することとなった。

1 本稿では、1939年シャムからタイへの国号変更以前についても便宜的にタイと呼称する。

2 オン・チャン・フン（1802–1885）は、ベトナムからタイに移住し、タイで得度したベトナム僧である。ラーマ四世の大乗仏教の師であり、慶雲寺（別名ワット・ウパイラートバムルン）の住職となる。ラーマ五世期に「プラクルーカナーナムサマナーチャーン」の僧位階が下賜され、初代安南派僧団長に就任した。

1. 死後世界を引き受ける安南派とゴンテック儀礼

安南派の最大の特徴の一つが、追善供養儀礼であるゴンテック儀礼の担い手としての役割である。ゴンテック儀礼は、死後の靈魂に徳を送り、極楽往生を助けることを目的とする大乘仏教儀礼であり、安南派と中国派によって実践されてきた。

19世紀後半以降、ゴンテック儀礼は王室葬儀に組み込まれ、国家的儀礼として制度化された。これにより安南派は、王室の死後供養を担う宗派としての象徴的役割を獲得し、死後世界と王権とを媒介する存在となった。ラーマ六世は崩御する前に遺言状を作っており、その中で遺言の五点目としてゴンテック儀礼への信仰を次のように記載している。

七日間の積徳のうちに、国王の遺体を礼拝する時でもよいし、プラメーン（火葬場）での儀式をするときでもよいし、ゴンテック儀礼を行ってほしい。もし私のために行ってくれる信者が誰もいなかったら、私の後継者に安南派か中国派の求道者を探し出して、私のために儀式を行ってほしい。[タンヤーティップ 2022: 115]

この遺言を受け、ラーマ七世は、ラーマ六世の葬儀において 1925 年 1 月 14 日に五十日法要（クロップパンヤーサマワーン）（50 日目）、1925 年 3 月 5 日に百日法要（クロップサッタマーハ）（100 日目）としてゴンテック儀礼を献じた [タンヤーティップ 2022: 115]。このことは安南派ゴンテック儀礼の王室儀礼への定着の過程として見ることができる。またタイの著名な民俗学者であるアヌマーンラーチャトンは、ゴンテック儀礼がタイの庶民の間にも普及し、新しい習俗を作り上げたことを述べている [พระยาอนันตราชัน 1993: 77]。

2. ギンテック儀礼と招魂の実践

ゴンテック儀礼とは、死去した家族・親類の靈魂を天国へと導くために、死後に現世から徳を送る儀礼である。ゴンとは功、テックは徳のことを指す。安南派と中国派の両派で行われる大乘仏教儀礼である。ゴンテック儀礼の始まりについて、安南派では次のような故事から説明している [เจ้าคณะใหญ่อนัมนิกายแห่งประเทศไทย 1994: 50]。昔、母殺しを行ったが、改悛して僧となった者がいた。その者はその後善行を積み、多くの弟子を持つ高僧となったが、死後、母殺しの咎で阿鼻地獄（無間地獄の一つ）へ落ちた。ある日、弟子の一人が瞑想中に地獄で苦しむ師の姿を見た。そこで弟子たちが償いのために追善供養を行うと、その甲斐があつて忉利天に往生したという。

ゴンテック儀礼の一例について概要を述べる。ゴンテック儀礼はまずは 6 つの壇を設ける。1) 仏の壇、2) 法の壇、3) 僧伽の壇、4) 南瞻部洲諸神・天人の壇、5) マーライ尊者³の壇、6) 閻魔王の壇である。さらに周囲に観音の像を配置し、5 名以上の僧で行う。ゴンテック儀礼は以下の 14 の段階から成り立っている。呼び出した靈魂とともに疑似的にあの世とこの世を往還し、また仏に諸神や供物をささげ、許しを請う儀礼である。かつては 5 日 5 晩行われたが、現在は、1 日で終わることが多いという。ベトナム僧はこの冥界めぐりと招魂の技術に長けているとされる。

1. 仏の招請（正しい位置に仏、観音、諸神を招く）
2. 物故者の招魂（経を唱えて、位牌や氏名の書いた紙に招魂する）
3. 死者の靈への清めの水かけ
4. 過橋（子孫が、冥界へと架かる模造の橋を渡り、故人の靈魂がかつて現世に渡る際に輪廻の中で作った債務を橋のたもとの壺に小銭を入れて支払う）
5. 破地獄（模造した地獄の門を破り、地獄の衆生に経と徳を届け、靈魂を救い出す）
6. 鐘突きと散華（鐘の周囲を巡りながら、三度鐘を突き、靈魂の形代に僧が散華をする）

3 マーライ尊者は、タイの葬式の際に誦経されることがある『プラ・マーライ経』に登場する法力僧である。また『プラ・マーライ経』はスリランカから北タイ、アユッタヤと南伝で伝わった上座部仏教経典である。マーライ尊者は、地獄に下っては法力によって亡者を救い、また一転、天界三十三天に昇ってはチュラーマニー仏塔で弥勒菩薩に邂逅し、未来における弥勒降臨に向けて功德を積むようにと、現世の人々に教え諭したことで知られる。このことから、ゴンテック儀礼において上座部仏教が混交していることが読み取れる。

7. 旗立て（三界の諸神のために旗を立てる）
8. グンゴ（供盒？ 諸仏に供物を進ずる）
9. 斎僧（僧に供物を進ずる）
10. 放水燈（紙製の花の形をした灯籠 36 基に花、線香、36 サターンの銭を入れて池や運河に流す。）
11. 死者への供え（物故者の靈魂に供物（紙で作った日常品など）を供える）
12. 施孤（供え物を貧しい人々へ無償で配る）
13. 招魂し、罪の許しを請う（諸仏に経を上げて物故者の靈魂のために許しを請い、紙で作った供物を燃やして、冥界へと送る）
14. 供仏（儀式に招いた諸仏、諸神を元の場所へ送る）

[เจ้าคณะใหญ่หน้ภูมิภาคแห่งประเทศไทย 1994: 12-15]

以上、ゴンテック儀礼は招魂、破地獄、過橋、放水燈など 14 の段階から構成される複雑な儀礼体系を持つ。例えば過橋においては、安南派僧は疑似的に親族を冥界に連れていき、死者の生まれ変わりのために功德を積むことができように取りなしを行う。死者の魂を降ろした旗とともに冥界に架かる橋のたもとで銭を払っていくものである。安南派が伝える『受生経』（玄奘三蔵が西域で見つけた経典とされる）によると、人は生まれてくる際に現世に至るために仏に借金（受生銭）を負ってきているという。新たな良い生を受けるためには、その借金を支払っていく必要がある。そこでゴンテック儀礼では、現世の親族が僧の導きによってあの世への橋を越え、故人が新たな借金ができるように返済に向かうのだという [เจ้าคณะใหญ่หน้ภูมิภาคแห่งประเทศไทย 1994: 50]。このように儀礼において安南派僧は、死者の靈魂とともに象徴的に冥界を往還し、徳を冥界へと送る能力を持つ存在として位置づけられる。特にこの憑依や招魂といった実践は、僧が死後世界と直接交渉可能であることを示す重要な要素であり、安南派の宗教的権威の核心をなしている。

3. バーオウン師による死霊との対話

20 世紀中葉に活躍したバーオウン師は、まさにこの招魂儀礼と憑依実践によって安南派の霊的能力を象徴する存在であった。師は、ラーマ九世の行幸に際して宗教儀礼を執り行うなど、王室との関係を通じて宗派的威信を高めた [ตันยาร์ทิพย์ 2022: 112]。

特に知られている師の事績とすると、景福寺の布薩堂の中にあるボーロムクルペート・チーウォックゴーマーラパットの招霊と神像の铸造がある。仏陀の薬師とされるチーウォックゴーマーラパット像の建立の逸話は、景福寺においてよく語られているものである。現在も尚、病を治す霊験あらたかな像として信仰を集めているが、この像は、師が 1954 年 3 月 18 日招魂儀礼を行った際に、信徒のタウィー・ヂャムルーンヂャン警察少佐の体に憑依した妻の靈魂の言葉がきっかけとなり、铸造することとなった像である [องสรภามมธุรส (บัวเอ็ง) 1959: 16]。師は、自らの親指にチーウォックゴーマーラパットを招霊して、尊顔を映し、仏師にそれを彫らせたと言われている。こういった心霊譚は彼自身のカリスマ性を強化すると同時に、安南派教団の聖性を可視化する資源として機能した。

4. 死後世界の力と政治

靈魂との交渉能力は、宗教的領域にとどまらず政治的領域においても重要な意味を持った。プレーク・ピブーンソンクラーム政権期には反共政策の中でベトナム系住民が監視対象となる一方で、バーオウン師は例外的に保護された。さらにサリット・タナラット政権下では憑依儀礼が禁止される中で、噂ではあるが、安南派の憑依実践は「本物」として容認されたと語られている [The Real Ghosts 2020]。このように心霊譚は、政治権力との関係の中で安南派の正統性を支える重要な装置として機能していた。

一方で、ベトナム戦争の激化に伴い、タイ政府は親米政策を強め、共産主義勢力を支援していると目される寺院周辺集落のベトナム人を監視対象とするようになっていった [ตันยาร์ทิพย์ 2022: 130; มนธิรา 2013]。ベトナム集落の住民たちは、生活しづらさのために集落を出てゆき、また一部はバンコク郊外や地方、ベトナム

ムに離散していった。しかし、安南派はすでに多くをタイ人、中国系タイ人の僧が占めていたために、ベトナム出身僧を移入しなくても、宗派の維持は可能であった。このような流れの中で、バンコクでは安南派寺院は維持されたものの、多くのベトナム集落は、タイ政府のベトナム戦争への関与の中で消えてゆくこととなった。

5. 方便としてのオカルト

今日においても、安南派はタイを拠点とする大乘仏教宗派として、また死後世界とかかわりの深さという異質性において異彩を放っている。安南派は死後世界や霊魂に関する語りを、信者獲得のための方便として活用している。テレビ番組やメディアを通じて語られる心霊譚は、いわゆるスピリチュアルな志向を持つ人々を惹きつけ、安南派の教えに関心を向けさせる導入口となっている。

すでに多くの安南派の高僧たちが霊との対話を強調しているせいか、安南派僧は特に心霊譚を語ることに躊躇はない。むしろ仏法の力を語るための方便として用いているようにも見える。僧の葬式本（タイの伝統として死後に作られる文集）の中にも、霊を見た話が載っているものがある。例えば、カーンチャナブリー県興福寺のプラソムプット・ミンラップ師の葬式本にも、いくつかの心霊譚が掲載されている。

1983年の森林行（トゥドン）：カーンチャナブリー県シーサワット郡プラントム洞窟

三日目の夜、深夜12時過ぎにうとうとしている時に、ふと通路の奥に目をやると、尼の霊が見えた。立って何かを読経しているが、よくわからない。私の方では持っていた数珠から声が聞こえて来て、瞑想をさせておいてほしいとのことであった。私も右手で仏壇を触れ、優しく祈った。彼女がものを入れている皿がまわる音がして、私は完全に目覚めたが、彼女の姿はもはやなかった。私は座り、その尼の霊に功德を届けるために15分ほど読経を行った。[วัดเจริญบุญไพศาล 2022]

このように現在もなお、安南派の心霊譚において、死後の霊の存在と追善供養による法力の霊験は、安南派の世界観を生み出す物語生成装置として機能している。小さな物語ではあるが、大乘仏教宗派である安南派の持つ世界観を示している。死後の彷徨える霊の存在、追善供養、そして霊の成仏という心霊譚のプロットは、そのまま安南派の信仰を支える基盤となっているのである。

おわりに

安南派仏教団は、王室儀礼を担う中で死後世界との結び付きを制度化し、霊魂との交渉能力を宗派の中核的資源としてきた。バーオウン師に代表される心霊譚は、その宗教的・社会的影響力を可視化する装置であり、政治権力や社会変動の中で安南派の存続を支える重要な役割を果たしてきた。また今日においても、オカルト的要素を含む死後世界の語りは、安南派の宗教的魅力を支える基盤であり続けている。

参考文献

タイ語

คณะสงฆ์อนัมนิกายแห่งประเทศไทย. 2020. คณะสงฆ์อนัมนิกายแห่งประเทศไทย [タイ国安南派僧伽]. <https://www.anamnikayathai.com/> (2024年2月18日閲覧)

เจ้าคณะใหญ่อนัมนิกายแห่งประเทศไทย. 1994. อนุสรณ์งานพระราชทานเพลิงศพ พระคณานัมนิธรรมสมาธิวัตร (ข้ากหมิงมหาเถระ) เจ้าอาวาสวัดมณฑลสมาคม คณะใหญ่อนัมนิกายกิตติมศักดิ์ ณ เมรุวัดสมณานัมบริหาร กรุงเทพมหานคร [วัตต์・มอนคอนซัมเมอร์ 住職およびタイ国安南派僧団長 プラカーナムタムマサマーティวัตต์師（ヤークムーンマハーテラ）のバンコク都วัตต์・サマナーナムボーリハーンでの火葬記念]. กรุงเทพมหานคร: ประชาชน.

พระยาอนัมนานราชธน [เสถียรโกเศศ]. 1993. ประเพณีเนื่องในการตาย [死にまつわる伝統慣習]. กรุงเทพฯ: ศยาม

- มนธิรา ราโท. 2013. ไทยในการรับรู้และความเข้าใจของเวียดนาม [ベトナム人の認識と理解におけるタイ]
 ไทยในสายตาเพื่อนบ้าน [近隣諸国から見たタイ], pp. 261-313. กรุงเทพฯ: ศูนย์เชี่ยวชาญเฉพาะทางด้านแม่โขงศึกษา
 สถาบันเอเชียศึกษา จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย.
- วัดเจริญบุญไพศาล. 2022. ประวัติพระสมุณ มินห์ลั๊บ จาวตระกูล [プラソムブット・ミンラップ・ヂャ่ว拖拉グーン師の経
 歴]. กาญจนบุรี: วัดเจริญบุญไพศาล
- องสรภานมรุส (บัวเอ็ง). 1959. บันทึกปฐมเหตุที่ได้พบและการปั้นหล่อรูปบรมครูแพทย์ชีวกโกมารภัฏ [โบ-
 มกุลเปต・チーウ็อกโก-มาร์ลาพัตの顕現と像鑄造の起源に関する記録]. กตัญญูตานุสรณ์
 ชิวประวัติบรมครูแพทย์ชีวกโกมารภัฏ [報恩記念 โบ-โรมกุลเปต・チーウ็อกโก-มาร์ลาพัตの伝記],
 pp. 16-24. พระนคร : คณะสงฆ์อนัมนิกายธรรมเดวาสสิก.
- The Real Ghosts. 2020. ตำนานทรงเจ้า วัดญวนสะพานขาว EP.75 ช่องส่องผี [降霊伝説 サパ-ンカーオのベトナム寺院
 EP.75 幽霊目視チャンネル] . <https://www.youtube.com/watch?v=OltkpeX3SmE> (2024 年 2 月 21 日閲覧)

日本語

- ตันยาร์ทิ๊ปปะ-ชีปะนาร์. 2022. 「ベトナム人と安南派仏教（アンナムニカーイ）の来泰、およびラッタ
 นาโค-ชิน王朝初期におけるワット・サมานา-นามบอ-ริฮาร์นの建立」西田昌之（訳）. 『日 ASEAN 超学
 際研究プロジェクトワーキングペーパー』No. 13. 京都：京都大学東南アジア地域研究研究所.

第6章

ラオスにおけるベトナム仏教寺院

大野 美紀子・菊池 陽子

1. ラオスにおけるベトナム仏教寺院

現在確認されているベトナム仏教寺院及び関連施設（神祠・亭・越僑会館等は下記のリストの通りである。ベトナム仏教寺院以外に、神祠・同郷会館も含めている。

ラオスでは、上座仏教系寺院を統括する組織は存在しているものの、それ以外の宗教施設に関する統計等の情報が公開されていないため、伝聞に基づき現地調査を行った対象を挙げている。公式情報を欠くため、正式名称が不明・通称のものも含まれている。

また、仏寺以外に神祠・ベトナム人協会同郷会館等においても、神仏への礼拝・供養儀礼や戦没兵士の慰霊・顕彰が行われることから、それらの宗教施設・会館等も下記のリストに含めている。

表1 ラオスにおけるベトナム仏教寺院等の名称・所在地

No	Vietnamese name	Lao name	Japanese Name	Location
1	Chùa Phật Tích	ັດພຣະບາທ	伏跡寺	Luang Prabang
2	Chùa Kim Sơn		金山寺	Pakse
3	Hội Người Việt Nam Tỉnh Champasak	ສະມາຄົມຫວຽດນາມແຂວງຈຳປາສັກ	チャムバサック県ベトナム人会	Pakse
4	Chùa Thang Nghiem	ັດຕຣາງງຽມ	莊嚴寺	Pakse
5	Mình Đức Dien? Đình-Lăng	ຫໍ້ ຫຽດນາມ	明德殿	Pakse
6	Chùa Thanh Quang		清光寺	Pakse
7	Chùa Long Vân	ັດລອງເວີນ	龍雲寺	Pakse
8	Chùa Diệu Giác	ັດຢືງວຢາກ	妙覺寺	Savannakhet
9	Chùa Bảo Quang	ັດບາວກວາງ	宝光寺	Savannakhet
10	Hội Việt Kiều SAVANNAKHET	ສະໂມສອນໂຮ່ງບ່າງ / ສະໂມສອນໂຮ່ງບ່າງ	サワンナケート越僑会	Savannakhet
11	Chùa Pháp Hóa	ັດພາບຮວາ	法華寺	Xeno, Savannakhet Province
12	Tỉnh Kham Muon Hội Người Việt Nam Plan Oon Xiengvang	ສະມາຄົມຫວຽດນາມສາຂາຊຽງຫວາງ	カムムアン県シエンワーン支部 ベトナム人会	Shiengwang Village, Khammouang Province
13	Chùa Xieng Vàng	ັດຊຽງຫວາງ	シエンワーン寺（通称？）	Shiengwang Village, Khammouang Province
14	Nghĩa Trạng Xieng Vang		シエンワーン戦没兵士記念碑	Shiengwang Village, Khammouang Province
15	Hội Người Việt Nam Tỉnh Kham Muon	ສະມາຄົມຫວຽດນາມແຂວງຄຳມ່ວນ	カムムアン県越人会	Thakhek, Khammouang Province
16	Chùa Bồ Đề	ັດໂບ່ເຕີ	菩提寺	Thakhek, Khammouang Province
17	Chùa Phật Tích	ັດເພີຕິກ	佛蹟寺	Vientiane
18	Đền thờ Đức thánh Trần Hưng Đạo	ັດເຈີນຮຶງດາວ, ສານເທບເຈີນຮຶງດາວ	陳興道聖徳祀殿	Vientiane
19	Chùa Bang Long	ັດບາງລອງ	鳳龍寺	Vientiane
20	Hội Người Việt Nam Thủ đô Vieng Chan	ສະມາຄົມຊາວຫວຽດນາມນະຄອນຫຼວງວຽງຈັນ	首都ビエンチャンベトナム人会	Vientiane
21	No Name	ຫໍ້ບ້ານຍວນ	ニュアン村お堂	Xieng Khouang
22	Đền Cầm Đồng Dân	ສິນກຳດົງດຳນ	カム・ドン・ザン殿（講堂）	Xieng Khouang

2. 上座部仏教圏におけるベトナム仏教寺院の在り方：ラオス Vs. タイの比較

ラオスにおけるベトナム仏教寺院等については調査途上であるが、同国と同じく東南アジア大陸部において上座部仏教が優勢と見られる隣国タイと比較すると、中国系大乘仏教寺院の一派であるベトナム仏教寺院の在り方には、明確な相違が認められる。

1) 法統の継続性

ラオスでは、本国との直接的・継続的な交流が維持され、ベトナム仏寺がインドシナ戦間期から継続的に存続している。すなわち、僧侶がベトナムから直接派遣される、あるいはベトナム出身僧侶からラオス生まれの越僑第二世代・第三世代僧侶へと、法統が直接継承されている。読誦經典もベトナム語によって行われる。また、本国ベトナムから寺院改修・布施などの寄付金が流入している。一方、タイでは、冷戦期・後におけるベトナム-タイ間政治関係の緊張や越僑のタイ国外流出によって、ベトナムとの交流関係が途絶した。その間に、安南派寺院では、タイ国内中国系大乘仏教寺院から僧侶を補填するなどで寺院を維持し、經典読誦・儀式次第など実質的な「中国化」が進行した。

2) 比丘尼の存在

ラオスのベトナム仏教寺院には比丘尼が存在する事例が確認されるに対し、タイの安南派寺院では比丘尼が不在である。

事例：ビエンチャン・サワンナケートの寺院では、先代住職が男性僧侶であったのに対し、次代住職は尼僧が務めている。また、男性僧侶と尼僧が同一寺院に居住し、寺院運営にあたっている例も見られた(2025.4)。

3) ベトナムとの関係

ラオスでは、ベトナムからラオス側仏寺へ僧侶の派遣、仏教会・ベトナム仏教信者団体による寄付・布施が寺院改修・越僑福祉に充当されている例が散見された。

事例：ビエンチャンでは、南部ホーチミン市から『Giác Ngộ 覚悟』新聞が主催した信者団体がラオス観光を兼ねた寺院への寄付イベントを開催(2025.4)、セーノーの無住寺に中部フエから僧侶が盂蘭盆を主催するために訪問する例(2023.8)など。

タイでは、ベトナム仏教会から働きかけての安南派との相互交流やタイ在住ベトナム人による寄進が見られるものの、法統の継承を目的とするベトナムから安南派寺院への僧侶派遣例は見られない。

事例：安南派寺院で一時期ベトナムからの留学僧の寄宿受入例があった(2019)。

上記に概括したように、ラオスとタイにおいてベトナム仏教寺院、もしくは中国系大乘仏教寺院のあり方が大きく異なる背景として、両国における宗教-国家・社会間関係の相違があると考えられる。

ラオスでは、ベトナムに相似して信教の自由を保障しつつも、活動の自由についてはケースバイケースによる運用上の制限を受ける。主要団体たる上座部仏教系寺院組織は大衆組織として存在し公認されているものの、それ以外の宗教団体については、相互交流はあるものの、連合組織化されていないのではないと思われる。

一方、タイにおける大乘仏教2派-安南派(=ベトナム派)・中国派-は同国の公認組織であり、安南派各寺は国王の公認を示す「勅賜」を寺名に掲げている。寺院運営面でも、同国における宗教行政管理と社会規範を受けて、上座部仏教寺院の運営組織を概ね踏襲している。その一端が、比丘尼の不在や、寺院運営に際して在家信者による管理委員会が設置され、僧侶が表向きには金銭管理に直接関与しない仕組みとして現れている。仏教寺院組織の在り方の相違が、教理よりもむしろ、宗教行政的枠組み・社会慣行の差異を反映した結果となっている

と言えよう。

ラオスにおけるベトナム仏教寺院を考察するにあたり、ラオスとベトナム本国との政治的・社会的関係を相当程度考慮に入れる必要があると思われる。インドシナ連邦期以来のラオス・ベトナム間の擬似的な兄弟関係を基盤として、ベトナム本国からラオス側へ公式・非公式の働きかけが継続しており、その一環に仏教寺院や同郷会館に対する人的・資金的支援が行われている。ベトナム仏教寺院を支える信者集団たる越僑についても、戦前・戦間・戦後を通じてベトナムから移民が流入しており、1995 年 ASEAN 加盟後の更なる流入増加を受けて、同国における越僑社会は、隣国タイやほかの東南アジア諸国に先駆けて新たな段階を迎えていると推測される。

以上のように、タイとラオスにおけるベトナム仏教寺院の相違は、両国とベトナムとの国家間関係を背景とする歴史的・社会的文脈の中で理解されるべきものと考えられ。

ラオスにおけるベトナム仏教寺院については、今後のさらなる調査を必要とするものである。

第 2 部

文献調査報告・論考編

「景福寺資料」の構成と形態的特徴

矢野 正隆

- 資料群の全体像把握のための基礎データ整理。
- 現物資料が日本にあることの意味。
- コンテンツ研究(歴史学、言語学、文学、宗教学、....等)と、コンテキスト研究(図書館情報学、博物館学、アーカイブズ学...等)からみた「景福寺資料」

2

この共同研究(科研基盤研究B「東南アジア大陸部越僑コミュニティの基礎研究:ベトナム仏教寺院資料分析から」23K21975)は、故桜井由躬雄博士(1945-2012)がタイから将来した資料群の分析と、フィールド調査を大きな柱とするプロジェクトであるが、現段階では、この両者が、相互参照しながらおこなわれているとは言い難い。これはひとつには、この資料群について、個別の詳細情報はあっても、全体としてどういうものなのか明確には示されていないことが、要因のひとつになっていると思われる。

本報告は、そもそも、この資料群がこういった特色をもつものであるかを、現時点で判明している情報を整理し、簡潔に示すことを目的とする。

その際にまず前提として踏まえておくべきは、この資料群が、複製物(紙、フィルム、デジタル等)ではなく、オリジナルの現物資料であり、これがタイの現地ではなく日本にあるということである。

この状況は、「研究」する立場からすれば、まず、複製物からは得ることのできない情報に容易にアクセスできることが注目されるであろう。いっぽう、「研究」を一旦措くと、現物がこの場にあるということは、これを「管理」する、つまり、現在だけでなく将来に亘り利用可能な状態に維持する、という立場が不可欠になる。つまり、この資料群に対する視点として、少なくとも、その内容の「研究」と、現物の「管理」という2つの立場からのものが想定される。

スライドではこの2つを、「コンテンツ」への視点と「コンテキスト」への視点、という仕方で区分しているが、前者については、既に言語学的研究[清水 2022]が、後者については古文書学(アーカイブズ学)的研究[小島・矢野 2022]で、その一端が示されている。

資料群の基礎データ

- 出所

漢字名: 勅賜鎮國景福寺

ベトナム語名: チュア・カインフォックChùa Cảnh Phước

タイ語名: ワット・サマナーナムボーリハーン Wat Sommananam Boriharm

- 伝来経緯

桜井由躬雄(当時京大東南研助教授)、1978年1-11月のバンコク滞在中に景福寺「所蔵経典ほぼ全部の借覧とマイクロフィルム化を許された」...293種の目録とそのうち147種約14000コマのマイクロ化。高津茂によるマイクロフィルム化の整理(桜井1979: 73)

- 容量

桜井氏将来資料群の一部。物理単位98点。本紙は計7491枚。本紙部分の総延長61cm(枚数×料紙1枚の厚み、表紙や容器は含まない)。全体は書架3段分程度?

3

この資料群の出所は、タイ国バンコクにある大乘仏教寺院。

伝来経緯については、桜井 1979 で紹介されているが、そこで示されている情報と、実際にここ（京都大学東南アジア研究所）にある現物資料との関係については、不明点も残る [大野 2022]。

1978 年に撮影したとされるマイクロフィルムの行方はいまのところ不明であり、また、将来された現物資料は、当時桜井博士が目にした資料群の一部に過ぎない。

この資料群の分量は、およそブックトラック 1 台分くらい。

全体像/個体把握の難しさ

- 「種」(桜井1979: 73): 物理単位? タイトル? カウントの難しさ。
- 複数タイトルが同一物理単位に合冊されている場合 (WS007など)、同一タイトルで版の異なる場合・分冊されている場合あり。また複数の異なるタイトルを有するテキストを抜粋したものもある。タイトル単位でのカウントは困難。
- 零本あり (WS098など)、当初108物理単位→整理/調査により、98点に (WS092、093など)。
- 桜井目録カウント合計307点、1979紹介文に言う「293種」との差異。桜井目録中 (M) 表示131点、「147種」との差異。
- 零本や書誌情報のないもの → 1物理単位の範囲やタイトル確定の困難 (WS009など)。
- → 基礎データの把握 (コンテンツだけでなく、キャリアー、コンテキスト情報も)

4

まず問題になるのは、個体把握および全体の数的把握の困難。

複数タイトルが合冊されているものや、逆に 1 タイトルが分冊されているもの、さらに、複数の異なるテキストを抜き書きしたものなどが多くあるため、カウントの際には、タイトル単位と物理単位を区別することが肝要。

物理単位でカウントする場合、元々 1 つのまとまりであったものが複数の分離していることもあり、これら

を接合して復元することが不可欠。接合ではまず、内容や文字・図像の配置等が重要な情報になるが、それだけでは判明しないことも多々あり。そこで援用されるのが、紙質や製本等のモノを対象とする調査から得られた情報。

個々の資料の把握では、名称を付することが第一歩となるが、標題紙がない場合、困難なことも多々ある。たまたま標題紙が欠けているのか、それとも、もともとないのかで名称の付け方は異なるし、断片の場合は、接合されるかどうかでも異なってくる。さらに、伝来不明の鈔本も多くあり、どの範囲を1つの物理単位にするかということと、資料にどのような名称を付するかということとは、相互に切り離せない作業となる。

資料群の受入当初は、108の物理単位として把握していたが、こうした調査の結果、98にまとめられた。詳細は矢野ほか 2022。

以下のスライドは、このような個体把握 / 全体像把握の過程で取得された情報をまとめたもの。逆に言えば、こうした調査を通じて初めて、現在のような資料管理が可能になった。

なお、この資料群には零本も含まれており、現時点での名称は、その零本の不完全な情報から付したものであるが、その出所（景福寺の原コレクション全体）から接合可能な断片が発見され、復元される可能性も皆無ではない。そのような工程も視野に入れるのであれば、この資料群と出所のコレクション全体との関係も把握しておく必要がある。

出所のコレクションについては、桜井 1979 では「293 種」と記されており、この資料群は、当時桜井氏が現地で見たとのものの一部であることは明らか。しかし、逆に、この資料群には、同論稿に提示されているリストには見られないタイトルも含まれており（20 点）、桜井氏作成の目録を、原コレクション全体と見做すこともできない。両者の関係をより正確に把握するためには、将来の過程に関するさらなる情報の取得や、現地調査との連携が必要になる。これは今後の課題。

A presentation slide titled "コンテンツ情報" (Content Information). It contains two main sections: "印字方法" (Printing Method) and "本文言語" (Main Text Language). The "印字方法" section includes a table with 2 rows: "印刷本" (Printed Book) with 32 titles (including 10 editions of Kanben, Hapben, Heiban, and Aben) and "鈔本" (Copied Book) with 68 titles. A note states that the total number of physical points is 98, but WS006 and WS007 are excluded due to title overlap, resulting in 100 titles. The "本文言語" section includes a table with 6 rows detailing the number of titles and examples for various languages like Chinese, Vietnamese, and Khmer. The slide is numbered 5 in the bottom right corner.

印刷本	32タイトル	(刊本10、排印本10、平版印刷本10、油印本2)
鈔本	68タイトル	

※物理点数は98だがWS006、WS007は2タイトル合綴のため、タイトル数は100

			例
漢字	60タイトル	(印刷27・鈔33)	
漢字・字喃	18タイトル	(鈔のみ)	WS008(手帖),018(双行注),001・007(逐字。書入?),005(本文字喃),015(異体字),044(巻末字喃。)
漢字・クオックグー	3タイトル	(印刷2・鈔1)	WS012(油印本),083(刊本),031(手帖)
漢字・タイ語	1タイトル	(印刷)	WS089(一紙)
字喃	15タイトル	(鈔のみ)	WS014・029(名称不詳、009と同一部分)023(手帖に書写?)
クオックグー	2タイトル	(印刷のみ)	WS016

まず、資料のコンテンツに関わる情報から。

例に掲げてある WS で始まる記号は、この資料群に付された請求記号。これらの画像は既に、京都大学貴重資料デジタルアーカイブにて公開されており、この記号により実際の画像を確認できる (<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/cseas/canhphuoc>)。

印字の形式としては、鈔本が印刷本のおよそ 2 倍。

言語の区分はやや複雑。ベトナム人がタイに建設した寺院で生成したコレクションであるため、まずベトナム語とタイ語が含まれ、仏教関連であるため、漢語が含まれる。さらに、その漢語をベトナム語で解釈する際、

現代ではクオックグーが使用されるが、クオックグーが普及する以前だとチューノムが使用されている。このように少なくとも4つの言語/文字の組合せになる。

注意を要するのは、ここに提示しているのは、「本文」で使用されている言語であるということ。印刷本であれば、どれが本文でどれが書入かは一目瞭然だが、鈔本の場合は、この分別は必ずしも明確であるとは限らず、筆跡や印字材料の調査が必要になる。書入の言語については、別のスライドで紹介する。

キャリアー情報

- 料紙(繊維、製紙...)
- 装幀(製本、綴じ...)
- 印字材料(インク、墨、鉛筆...)

6

現物資料でしか得られない情報（ここでは、料紙、装幀、印字材料）についてまとめる。

料紙の構成繊維

構成繊維	件数	割合	例
木材パルプ	39	38%	WS021,012(網目状の素地目),052(圧縮加工痕)
木材パルプ混合	9	9%	WS011(楮),037(竹),049(Dó),054(故布),081(亜麻),090(稲藁・竹)
竹	34	33%	WS060(刊本-實目42本-厚0.05mm),007a(鈔本-實目30本-厚0.10mm) ※
竹・稲藁	4	4%	WS086
楮	14	13%	WS007b(米粉),091(素地目あり。タイ製の複層紙か?)
楮・稲藁	1	1%	WS062
亜麻	3	3%	WS077
合計	104	100%	

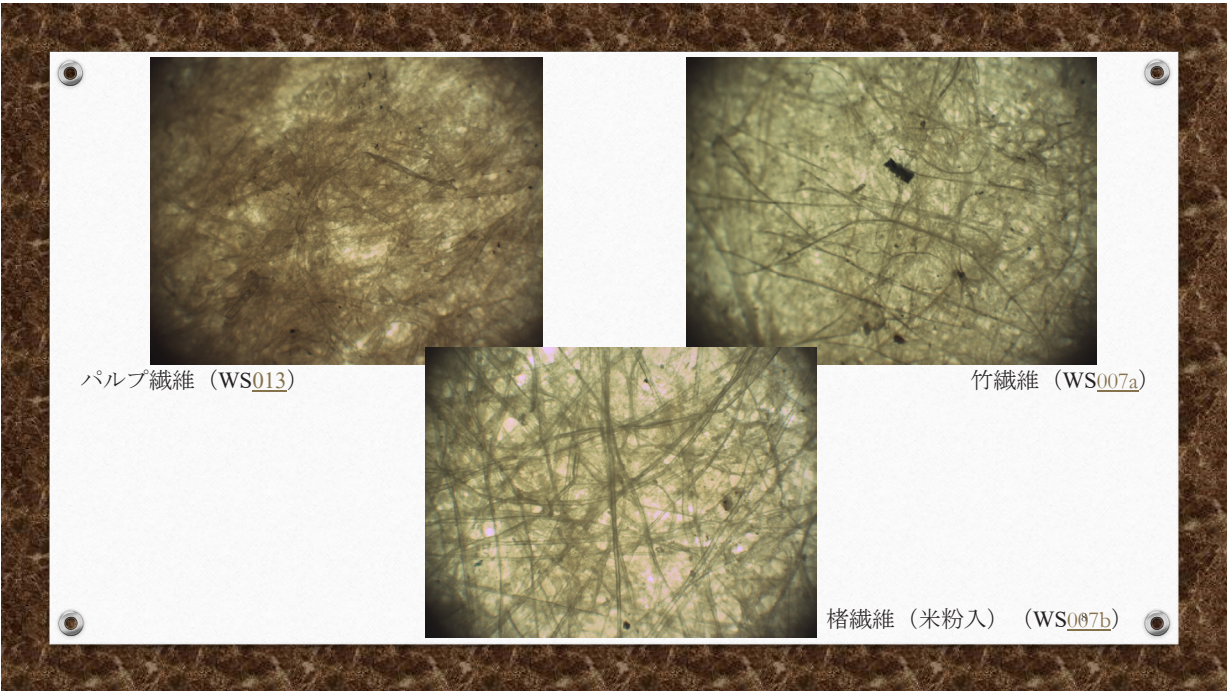
7

料紙を構成する繊維については、小島・矢野 2022 で詳細に論じたところ。

木材パルプに見られる、網目状の素地目 (WS012 など) は機械抄紙機の金網痕、ローラー等による圧縮痕 (WS052 など) とともに、機械抄紙の痕跡と判断される。

この資料群のうち、ゾー (Dó) 樹皮が用いられている資料は、1 点のみであった (WS049)。ゾーは沈丁花科に属する樹木で、その樹皮は伝統的にベトナムの高級紙として使われてきた。

竹紙は、中国では刊本に使われることが多いとされるが、この資料群では鈔本の方が多く、特徴として指摘されている。一寸あたりの簀の本数をみると、刊本より鈔本の方が少なくなっており、同じ竹繊維でも漉き方で用途を別にしていることが分かる。



代表的な繊維の写真。パルプは、幅の広いリボン状の繊維や、裁断された繊維で、竹は中央下にみられる孔紋導管で、楮は線条痕や結節といった特徴によって判断される。

装幀		
	数量	例
一紙	3タイトル	WS044,089,097
経折装	20タイトル	WS065
線装	(四針眼訂) 25タイトル	WS003, 019 (簡、左綴) ※縦平均24.2cm
	(五針眼訂) 8タイトル	WS050, 018 (簡) ※縦平均26.7cm
	(六針眼訂) 15タイトル	WS005, 001 (簡) ※縦平均24.7cm
洋装	14タイトル	WS016, 064 (無線綴)
紙縫綴	7タイトル	WS009
包背装(袋針金綴)	3タイトル	WS050
零葉	1タイトル	WS098
その他	4タイトル	WS012(無線)075(袋ステイプラー綴)085(五針眼線装上に紙縫四目仮綴)093(綴糸逸)

「線装」は、片面に印字した料紙を袋状にし糸あるいは紙縫で綴じるタイプ、「洋装」は、両面印字の料紙をステープラー等で綴じるタイプ。

「線装」の場合、糸の綴じ穴の数による区分も記している（穴が6つの場合は「六針眼訂」のように）。また、線装本の綴じ糸は、縦方向（天-地）だけでなく、横方向に冊子の背の部分を包むようにする形が一般的であるが、この資料群では、背の側には糸を掛けないものも散見した。これらについては、「(簡)」と記してある。

コンテキスト情報

- 印刷/書写情報(筆記者情報、紙背利用、書き損じ....)
- 所蔵/伝来情報(印章....)
- 読書情報 (書入...)

10

印刷部分のうち、コンテンツ以外の情報をまとめる。

書写情報

- 「謹筆明洪廣恩禪僧奉供」 (WS003_030) 「釋子明洪字廣恩證明, 法名守義奉供代願」 (WS082_025)
- 「沙彌(法名因緣法名入定) 誠心同敬寫 奉供」 (WS005_130, WS026_117, WS033_125) 「景福寺弟子因緣寫」 (WS018_012)
- 「阮氏孝奉供」 「潘永福奉寫」 (WS007_041)
- 「景福寺修道丁本福慈奉写」 (WS009_009)
- 「承世姓杜字成功錄記」 (WS013_072)
- 「弟子法名神通奉寫五念卷壹/覺迷」 (WS014_023)
- 「景福寺法名善根奉」 (WS020_004)
- 「田氏尋奉墨, 信女吳氏敬奉送」 (WS028_063)
- 「弟子法名僧平定奉送」 (WS030_037) 「敕賜慶壽寺僧平定奉抄」 (WS077_042)
- 「臨濟正宗四十二世諱上覺下蘭/弟子法名覺蘭字法禪/越南臨濟源派法名覺蘭」 (WS031_026) 「林方連/陳玉池.../林樹美」 (WS031_031) → cf 印章「覺蘭」 (WS056_001 WS065_003)
- 「遊方僧人號智光敬抄」 (WS034_093)
- 「阮氏智本妙清奉敬」 (WS038_030)

11

特に鈔本については、その作成者（内容の作者ではなく、抄写、記録した者）が、標題紙等に記されているとは限らず、一目では見分け難いので、記されているページ数とともにリスト化した。

以下のスライドでまとめている印章と同じ作成者も見られる（WS031、WS056、WS065 など）。

書写情報(続)

- 「廣福寺沙彌上無下染誠心奉寫」 (WS041_064)
- 「善行號記」 (WS043_001)
- 「黎文泰元生甲子年十八歳、阮氏復元生丁卯年十五」 (WS046_039) 031以降は初学者の練習帳として用いられたか?
- 「沙彌法名上智/法名甘泉抄写」 (WS056_049)
- 「法名僧善種抄本」 (WS057_002)
- 「阮文遇奉供/醫生黎泰岱奉寫」 (WS073_026) → 印章「翠岸寺 รัชชัญญิ」 (WS073_002)
- 「信女武氏槎奉供」 (WS078_026)
- 「臨濟正宗法名清修本循理抄紗」 (WS078_049)
- 「信主(阮文仕、許氏演)奉供」 (WS081_026)
- 「法名本末」 (WS085_039)
- 「廣福寺法轉寫」 (WS093_003)

書誌情報

- 「鼓山常住所有經板目錄序開列」(WS060_168-170 同書肆既刊目錄)

12

印章(景福寺)



- 「พระราชทานนามวัดสมณานัมมบริหาร (王によって名を賜った ワット・サマナーナムボーリハーン)」
- WS005_005 WS026_004 WS033_006



- 「勅賜/景福寺/白橋 พระราชทานนามวัดสมณานัมมบริหาร (王によって名を賜った ワット・サマナーナムボーリハーン)」
- WS060_002



- 「พระราชทานนามวัดสมณานัมมบริหาร (王によって名を賜った ワット・サマナーナムボーリハーン)」
- WS089_004



- 「景福寺」
- WS018_001 WS039_016 WS081_004

13

印章(蔵書印)は、その資料の伝来をたどる上で非常に重要な情報となる。ここでは、寺院名と個人名に分けて一覧する。

まず景福寺のもの。形態やインクは複数種類あり、もう少し事例を蓄積すれば、使い分けや使用時期についてもある程度明らかになるであろう。

印章(景福寺以外)



- 「會慶寺 พระราชทานนามวัดมงคลสมาราม」
- WS016_001 WS092_032
- 別名ワット・モンコンサマーコムともいい、1776年に建立された。この寺院は安南派僧団に所属する二番目の寺院である。



- 「翠岸寺 วัดจันทน์」
- WS073_002 WS090_011
- 「別名ワット・チャヤブーミガーラームといい、サムバンタウォン郡チェースワニヨム小路に立地。ラーマ三世期の1840年頃に僧院として建立されたのに続いて、ラーマ四世期の1862年にシーマー結界処を授かって寺院となった。その後、ラーマ五世にチャヤブーミガーラームの寺名を授かった。(Sripana 2022: 105)」



- 「敕賜興國普福寺 พระราชทานนามวัดกุดตมมารัก」(王によって名を賜ったワット・グソンサマーコン)
- WS087_002
- 「サムバンタウォン郡ラーチャウォン通り近辺に立地し、1840年に建立され、1857年シーマー結界処を授かり寺院となった」(Sripana 2022: 104)



- 「萬福堂」
- WS045_003

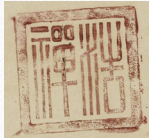


- 「慧靈山寺」
- WS083_002

14

印章には景福寺以外のものも含まれており、他寺との文化的ネットワークが窺われる。この資料群は、一寺院で完結したものとしてではなく、他の寺院に残された資料も含めて、より広い文脈の中に位置付ける必要があることを示す情報である。

印章(個人...)



- 「浩禪」
- WS053_008



- 「覺蘭」
- WS056_001 WS065_003



- 「南榮金章寺和尚 Phnom-Penh Kim Chương Tự Hòa Thượng」
- WS083_055

15

個人蔵書印。

書入(本文:漢字—60タイトル)

漢字	1タイトル	WS013
漢字、クオックグー	2タイトル	WS027,065
漢字、クオックグー、タイ語	2タイトル	WS062,057(クオックグー:インク、タイ語:鉛筆)
漢字、タイ語	3タイトル	WS039(メモ・句点),066(巻末),092(漢字読音?)
字喃	3タイトル	WS007b,017,037(巻末)
字喃、クオックグー	2タイトル	WS003・004(同一手?)
クオックグー	7タイトル	WS011,034(「上下」)043(手帖),049,088(逐字),091(手帖),097
クオックグー、タイ語	2タイトル	WS077(インク焼・鉛筆),082(消痕)
タイ語	7タイトル	WS019(逆綴),030,056,072,078,081・087(逐字)
なし	31タイトル	

16

書入は、資料が生成されたあと、何時誰がどのようにその資料にアクセスしてきたかを知る上で、重要な情報となる。

ただし、手書き資料の場合、雑多なメモ帖のようなものも含まれており、印刷本のように、まず本文があって、あとから書入がなされた、という風に、明確に区分できるものと、できないものを分けて考える必要がある。

ここでは、本文として、ある程度の分量を有する書写対象が別にあるものを掲げた。書き損じがあることは、その一つの目印だが、これは書入には含めていない。(たとえば WS002 の 19 コマ左頁の 3 行目には本文の修正痕があるが、ここでの書入にはカウントしていない。)

こうして見たとき、本文が漢字の資料 60 タイトルのうち、書入があるものはおよそ半数。文字としては、クオックグーのみ、タイ文字のみの書入のあるものがそれぞれ 7 タイトルずつ、チューノムは 3 タイトル、漢字が 1 タイトルで、それ以外は複数の文字種が使われてる。

内容的には、漢字の読音あるいは意味を示したもので、すべての文字に逐一書入しているものもある (WS008) が、多くは部分的に、おそらく音や意味の分からない文字にだけ記してある。

また、書写材料(墨、インク、鉛筆など)や筆跡の相違も、当該資料が何時誰によってアクセスされたかを知るための情報として重要。

書入(本文:漢字+字喃—18タイトル)

漢字、字喃	1タイトル	WS015(巻末)
漢字、タイ語	1タイトル	WS010
字喃、タイ語	1タイトル	WS005(タイ語・字喃)
字喃	1タイトル	WS086(掲)
クオックグー	1タイトル	WS045(001-文書類, 031-経典)
タイ語	2タイトル	WS007a(字喃も書入?)018(表紙)
なし	11タイトル	

書入(本文:字喃—15タイトル)

漢字、タイ語	1タイトル	WS020(漢字・タイ語)
字喃、タイ語	1タイトル	WS085
クオックグー、タイ語	1タイトル	WS093
タイ語	2タイトル	WS009,014(巻末)
なし	10タイトル	

17

本文が漢字とチューノムからなっているものは18タイトル、チューノムのみのものが15タイトル。書入があるものは、それぞれ7タイトル、5タイトル。

WS093は、本文チューノムの仏典に対して、クオックグーおよびタイ文字による書入が全体に亘って付されており、複数言語のテキスト研究という意味で、まとまった情報を含む資料のひとつと言える。

紙背利用

	例
印刷故紙	WS021(己卯年三篇通書)
抄写故紙	WS002_035, 003_031, 004_017

修正/修復痕

	例
消去/加筆	WS002_019他(墨消), 043_002-(上書), 082_002-(消ゴム), 091_003-(加筆)
「上下」「前後」反転	WS009_007(cf. 029_009)・091_017(上下), 026_031(前後)
貼紙	WS003_003-, 007_017, 013_013, 057_004-(複数頁同一箇所), 092_015(複数字)
裏打	WS011_033~(『中原報』中華民国35年...)

18

故紙の紙背利用の例としては、WS021が最もまとまった形で残っている(暦占い)。

本文の修正例としては、墨で上から消したり、消ゴムを使う場合、貼り紙をする場合が各処でみられる。

そのほか、上下反転の例としては、WS009とW029が同一のテキストなので比較すると分かりやすい。前者の7コマ左ページの1行目冒頭2字「羅意」とある右横に「下上」と書入がある。この「下上」の意味するところ、「羅」が下で「意」が上であるということは、後者の9コマ左ページの1行目冒頭2字が「意羅」となっていることから分かる。

修復痕では、裏打ち紙に新聞紙を用いた例が目立つ(WS011『中原報』など)。

まとめ

- 同一出所コレクションからみる書物の流通と共有(鈔本—原本の存在)
- モノの素材からみる資料の形成・伝来過程
- 読書の痕跡からみる資料利用の実態
- ...コンテンツ研究の補助的役割

19

本報告では、この資料群の性格に関する分析にまで立ち入ることはせず、その前提として、そもそもこの資料群からどのような情報が得られるのかを整理した。

資料本文に記されている内容だけでなく、そのモノの素材・構造、アクセスの痕跡に焦点を当てることで、日本に将来されるまでの経過、つまり、何時何処でどのようにして作成され、移動し、どのように利用されてきたかということに関する基本的な情報が得られた。

ただしこの資料群は、同一出所のコレクション全体の一部に過ぎず、さらに、他出所（他の寺院など）のコレクションも含まれており、ここから得られた情報は、より広い文脈で位置付ける必要があることが、再確認できた。

現段階では、こうした情報から個々の資料のまとまりを確定しタイトルを付すなど、資料研究よりは資料管理の面で大きな意味を持ったことが指摘できる。

参考文献

「景福寺資料」京都大学貴重資料デジタルアーカイブ, <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/cseas/canhphuoc>

大野美紀子「序―特集に寄せて―」『東南アジア研究』60(1): 5-16, 2022.7

桜井由躬雄「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本目録」『東南アジア―歴史と文化―』1979(8): 73-117, 1979-04-25

清水政明「漢喃版『佛説天地八陽經』に見る字喃の方言性」『東南アジア研究』60(1): 40-57, 2022.7

小島浩之・矢野正隆「漢字・字喃經典への料紙調査の応用」『東南アジア研究』60(1): 17-39, 2022.7

矢野正隆・小島浩之・大野美紀子「〈付録〉京都大学東南アジア地域研究研究所所蔵「景福寺資料」目録」『東南アジア研究』60(1): 58-70, 2022.7

Sripana, Thanyathip; 西田昌之訳『ベトナム人と安南派仏教(アンナムニカーイ)の来泰、およびラッタナコーシン王朝初期におけるワット・サマナーナムボーリハーンの建立』Japan-ASEAN Transdisciplinary Studies Working Paper Series, No. 13, 2022

矢野正隆・小島浩之「「景福寺資料」状態調査報告：東南アジア地域資料管理のための基礎データ」『東京大学経済学部資料室年報』14: 71-79, 2024.3

Today's Contents

1. Purpose
2. Data
3. Methods
4. Results
5. Discussion
6. Tentative Conclusions

2

1. Purpose

- 南部方言音韻史 (historical phonology of Southern dialect)
(近藤2017, Shimizu 2022)
- 文献資料(written documents)による変化の追跡
 - 漢語中古音(Middle Chinese, 8-10C) (平山 2022)
 - > 漢越音(Sino-Vietnamese readings)の成立(10C)
(Nguyễn T.C. 1979, 三根谷1972)
 - > Quốc Ngữによる表記(17C) (Gregerson 1967, 清水1999)
 - > 南部Chữ Nôm資料(19C) (Nguyễn N.Q.2018, 清水 2022)
 - > 現代南部方言(Southern dialect) (Thompson 1959, Pham 2006)

3

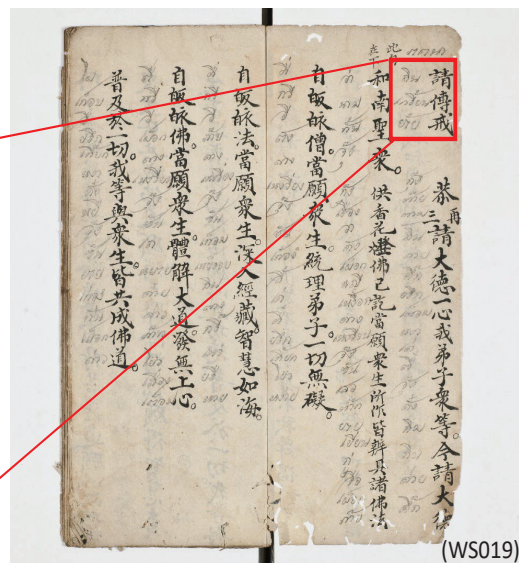
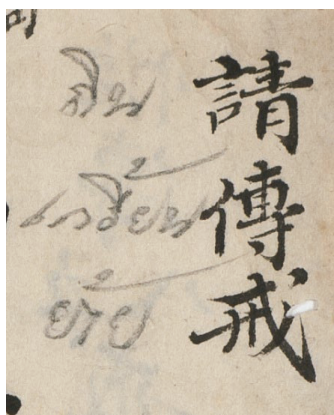
2. Data

- 景福寺ハンノム資料 (大野 2022)
 1. 佛說天地八陽經 *Phật Tuyết Thiên Địa Bát Dương Kinh* (WS007a) 漢文チュノム対訳 (清水 2022b)
 2. [資料名不詳] (WS019) タイ文字書入(with Thai notations)
- 蓼雲仙傳 *Lục Vân Tiên Truyện*
 3. 粵省佛鎮寶華閣版 (Nguyễn Q.T. 2008, Shimizu 2022a)

4

2. Data

- 2. WS019

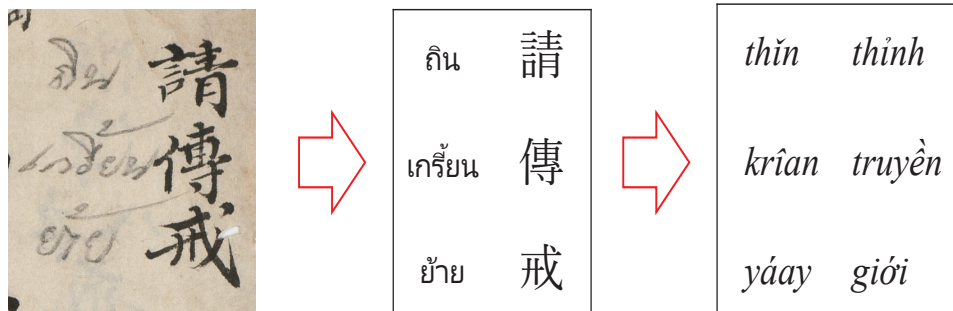


(WS019)

5

3. Methods

1. 漢字音のローマ字転写(Quốc Ngữ)
2. タイ文字のローマ字転写(AUA方式)
3. 比較・分析と考察



6

Evolutionary Process of the Southern Dialect

• Phonemes in Southern Vietnamese

- (1) Initials: /t t̚ c k g(̃ɣ) ʔ tʰ b d f s z ʃ kʰ(̃x) h m n ɲ ɳ r l j/
- (2) Medial: /w/
- (3) Vowels: /a: a ɤ: ʌ ʉ: ʉ ɛ: e: i: ɔ: o: u: iɤ uɤ ʉɤ/
- (4) Finals: /p t k k̚ m n ɲ ɳ̚ w j/
- (5) Tones: 1.level, 2.mid falling, 3-4.broken, 5.rising,
6.low glottalized, 7.rising checked, 8.low checked

Shimizu (2014)

7

Evolutionary Process of the Southern Dialect

- Changes that occurred in Southern V finals

(a) /n, t/ > /ŋ, k/

ex) *ơn* [ʔɤ:ŋ¹] 'favor,' *cuốn* [ku:ŋ⁵] 'to roll,' *ăn* [ʔaŋ¹] 'to eat,' etc.

(b) /ŋ, k/ > [ŋ̊, k̊] / V[+front, +high]_#
/ŋ̊m̊, k̊p̊/ / V[+back, +high]_#

ex) *bốn* [bɔ:ŋ̊m̊⁵] 'four,'
bún [bɔ:ŋ̊m̊⁵] 'rice vermicelli, etc.

Shimizu (2014)

8

Evolutionary Process of the Southern Dialect

- Changes that occurred in Southern V finals

(c) [ŋ̊, k̊] > /n, t/

ex) *thanh* [t^han¹] 'sound,' etc.

(d) /i/ > /w/ / _ n/t

ex) *tình* [tɯn²] 'affection,' etc.

/e/ > /ɤ:/ / _ n/t

ex) *kênh* [kɤ:n¹] 'canal,' etc.

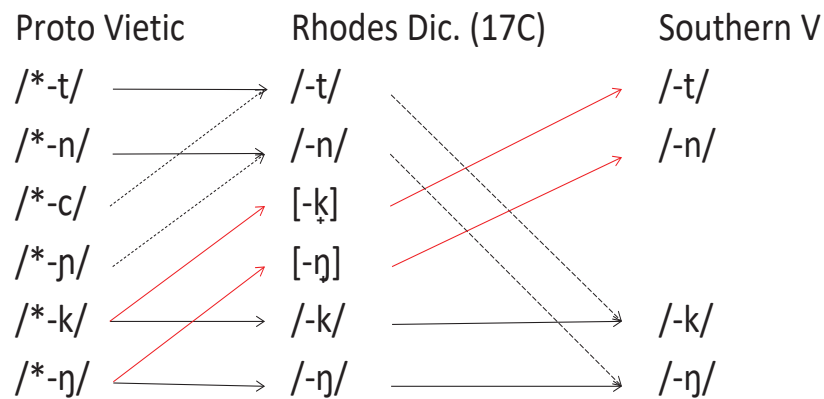
Shimizu (2014)

9

Quốc Ngữ System	(a)	(b)	(c)	(d) Southern Dialect
u:n / u:t	> u:η / u:k			u:η / u:k (ư:n / ư:t)
ɣ:n / ɣ:t	> ɣ:η / ɣ:k			ɣ:η / ɣ:k (ơ:n / ơ:t)
ʌ:n / ʌ:t	> ʌ:η / ʌ:k			ʌ:η / ʌ:k (â:n / â:t)
a:n / a:t	> a:η / a:k			a:η / a:k (a:n / a:t)
an / at	> aη / ak			aη / ak (ă:n / ă:t)
u:η / u:k				u:η / u:k (ư:ng / ư:c)
ʌ:η / ʌ:k				ʌ:η / ʌ:k (â:ng / â:c)
a:η / a:k				a:η / a:k (a:ng / a:c)
aη / ak				aη / ak (ă:ng / ă:c)
ien / iet	> i:η / i:k			> i:η / i:k (iê:n / iê:t)
uɣn / uɣt	> u:η / u:k			> u:η / u:k (uơ:ng / uơ:c)
uon / uot	> u:η / u:k			> u:η / u:k (uôn / uôt)
ieη / iek				> i:η / i:k (iêng / iêc)
uɣη / uɣk				> u:η / u:k (uơ:ng / uơ:c)
uoη / uok				> u:η / u:k (uông / uôc) 10

Quốc Ngữ System	(a)	(b)	(c)	(d) Southern Dialect
i:n / i:t	> i:η / i:k	> iη / iɣ	> in / it	> u:n / u:t (in / it)
e:n / e:t	> e:η / e:k	> eη / eɣ	> en / et	> ɣ:n / ɣ:t (ê:n / ê:t)
ɛ:n / ɛ:t	> ɛ:η / ɛ:k			> ɛ:η / ɛ:k (en / et)
iη / iɣ			> in / it	> u:n / u:t (inh / ich)
eη / eɣ			> en / et	> ɣ:n / ɣ:t (ênh / êch)
aη / aɣ			> an / at	> an / at (anh / ach)
u:n / u:t	> u:η / u:k	> uη̃m / uḱp		uη̃m / uḱp (un / ut)
o:n / o:t	> o:η / o:k	> oη̃m / o:k		oη̃m / o:k (ôn / ôt)
ɔ:n / ɔ:t	> ɔ:η / ɔ:k			ɔ:η / ɔ:k (on / ot)
uη̃m / uḱp				uη̃m / uḱp (ũ, ung / uc)
ɔη̃m / ɔḱp				ɔη̃m / ɔḱp (ou, ông / ouc, ôc)
aη̃m / aḱp				aη̃m / aḱp (ao, ong / äoc, oc)

Evolutionary Process of Final Dentals & Velars



Shimizu (2014)

12

4. Results (資料 1)

• Irregular correspondence in 佛說天地八陽經(WS007a)

Nôm	Readings	Phonetic Components	SV	Standard Forms	SV	Pages	Chinese Meaning
𪛗	biểng	𪛗	biểng	丙	bính	2a4	懈怠
𪛗	nhác	𪛗	dát	落	lạc	2a4	懈怠
𪛗	dút	𪛗	dặc	悉	tất	5b5 6a1, 6b1, 7b1	休滅
𪛗	chắc	質	chắc	職	chức	7b4	固
𪛗	miệng	免	miểng	𪛗	mãnh	12b3	口
𪛗	dút	𪛗	dặc	悉	tất	24a3	斷
𪛗工𪛗	đặng	鄧	đặng	憚	đạn	27a2	皆
𪛗犬言王	cuống	狂	cuống	卷	quyển	28b2	卷
𪛗	lặng	吝	lặng	朗	lăng	31a1	靜
𪛗	trộn	終	chung	論	luận	32a5	共

13

4. Results (資料 3)

• Irregular correspondence in 夢雲仙傳

Nôm	Readings	Phonetic components	SV	Standard Forms	SV	Pages	Meanings
咯	lăng	各	lận	浪	lăng	1a2	to be quiet (唸咯 lăng lăng)
邦	ban	邦	bang	班	ban	1b12, 9a9	day-time (邦埋 ban mai)
助	gắ	亘	cắ	艮	cắ	2b3	to stick
徵	chân	徵	trư	蹟	眞 chân	2b4, 2b10, 9a9	foot (徵{𠂔上天} chân trời)
啫	han	香	hươ	罕	han	2b10	to ask
烈	liéc	烈	liệt	列	liệt	5a2	to glance
盤	bàng	盤	ban	傍	bàng	11a3	to be enough (彼盤 bĩ bàng)
咽	nhă	因	nhân	仍	như	12a11	to talk nonsense (啞咽 nói nhăng)
嚙	màng	曼	mạn	忙	màng	12b6	to desire
方	phăn	方	phươ			15a4	to grope (嚙{𠂔口方} hủi phăn)
干	cang	干	can	綱	cang	15a12	substitute for 綱
難	nang	難	nan	能	nă	15b2	carefully (難{𠂔火弩} nỏ nang)

14

4. Results (資料 3)

• Irregular correspondence in 夢雲仙傳

Nôm	Readings	Phonetic components	SV	Standard Forms	SV	Pages	Meanings
光	quan	光	quang	官	quan	15b7 16b12	mandarin (部光 bộ quan)
唐	đàn	唐	đàng	彈	đàn	16a1	musical instrument
千	thiên	千	thiên	声	thanh	17a2	to be sacred
冤	hoang	冤	oan	荒	hoang	17b1	substitute for 荒 (天荒 thiên hoang)
彦	ngàng	彦	ngạ	昂	ngang	18b11	to be puzzled (語彦 ngữ ngang)
閑	nhàng	閑	nhàn	讓	như	20a7	to be lively (閑閑 nhộn nhàng)
洛	lă	各	lận	浪	lă	20b12	to be quiet (洛{𠂔} 裡 lăng lể)
乾	càng	乾	càn	強	cườ	22a9, 26a2, 26a9, 39b9	the more ... (乾添 càng thêm)
悶	muống	悶	muộn	夢	mộ	22b9	water morning glory
忙	man	芒	mang	曼	man	23b12	to be unconscious (忙{𠂔迷} mê man)

15

4. Results (資料 3)

- Irregular correspondence in 蓼雲仙傳

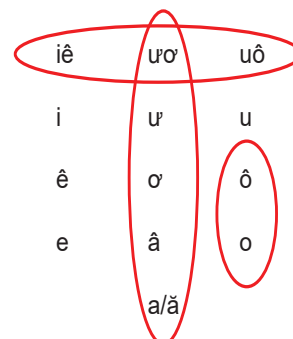
Nôm	Readings	Phonetic components	SV	Standard Forms	SV	Pages	Meanings
徵足	chư ^{ng}	徵足	chân	徵	trư ^{ng}	24a8, 34b8	because (爲{徵足} vì chưng)
空	khô ⁿ	空	khô ^{ng}	坤	khô ⁿ	24b1	to be difficult
終	chô ⁿ	終	chun ^g			26a6	to be restless (犇終 bôn chôn)
論	lượ ^{ng}	論	luậ ⁿ	量	lượ ^{ng}	33a3, 42a8	to think (忖論 nghĩ lượ ^{ng})
北	bắ ^t	北	bắ ^c	扒	八 bá ^t	33a4, 44b1, 44b5	to arrest, catch
天	thiê ^{ng}	天	thiê ⁿ	声	than ^h	33a9	to be sacred (灵天 linh thiê ^{ng})
得	đắ ^t	得	đắ ^c	怛	đắ ^t	33a12	to sell well (半得 bán đắ ^t)
喻	mượ ⁿ	命	mặ ^{ng}	嚙	曼 mặ ⁿ	34b8	to borrow (喻衛 mượ ⁿ về)
降	dán	降	giá ^{ng}	旦	đá ⁿ	34b10	to stick (降連 dán lên)
引	dắ ^{ng}	引	dắ ⁿ	孕	dự ^{ng}	35a1	to be aloud (引{口}崔 dắ ^{ng} dỏi)
捌	bá ^c	捌	bá ^t	博	bá ^c	35b12	uncle
版	bắ ^{ng}	版	bắ ⁿ	榜	bắ ^{ng}	39b5	to be surprised (版潮 bắ ^{ng} lắ ^{ng})
別	biế ^c	別	biế ^t	碧	bí ^{ch}	42b11	bluish green

16

4. Results (資料 1, 3)

- The rhymes which underwent n>ng; t>k processes in Southern Nôm materials:

preceding vowels	central	back	front
monophthong	an/at 17	on/ot 1	en/et 0
	ăn/ăt 5		
	ân/ăt 9	ôn/ôt 2	ên/êt 0
	ơn/ơt 0		
	ưn/ưt 2	un/ut 0	in/it 0
diphthong	ươn/ươt 1	uôn/uôt 2	iên/iêt 6



17

4. Results (資料 2)

• Middle Chinese (攝) SV (17C) Southern Dialect

通 <i>tōng</i>	----	-ŋ/k	>	-ŋ̃m/k̃p	>	-ŋ̃m/k̃p
江 <i>jiāng</i>	}	-ŋ/k	>	{	>	{
宕 <i>dàng</i>						
曾 <i>zēng</i>						
梗 <i>gěng</i>	----	-ŋ/k	>	-ŋ̃/k̃	>	-n/t
臻 <i>zhēn</i>	}	-n/t	>	-	>	{
山 <i>shān</i>						

18

4. Results (資料 2)

通攝	SV (17C)	Thai
東董送 屋	-ng -c	-ŋ [12(54)] -k [4(5)] -ŋ [1(1)]
冬 宋 沃	-ng	-ŋ [1(1)]
鍾腫用 燭	-ng -c	-ŋ [6(14)] -k [3(6)]
江攝	SV (17C)	Thai
江講絳 覺	-ng -c	-ŋ [1(1)] -k [2(2)]

宕攝	SV (17C)	Thai
陽養漾 藥	-ng -c	-ŋ [25(69)] -m [1(1)] -k [4(5)]
唐蕩宕 鐸	-ng -c	-ŋ [7(18)] -k [3(7)] -w [1(1)]
曾攝	SV (17C)	Thai
蒸詵證 職	-ng -c	-ŋ [2(3)] -k [7(20)]
登等磴 德	-ng -c	-ŋ [6(20)] -k [4(17)]

19

4. Results (資料 2)

梗攝	SV (17C)	Thai
庚梗映 映 陌	-nh -ng -ch	-n [1(1)] -ŋ [1(1)]
耕耿靜 耕 麥	-nh -ng -ch	-n [1(1)] -k [1(1)] -t [1(1)]
清靜勁 昔 昔	-nh -ch -c	-n [15(42)] -t [2(3)] -k [1(1)] -t [1(4)]
青迥徑 錫	-nh -ch	-n [4(14)] -t [1(1)]

20

4. Results (資料 2)

臻攝	SV (17C)	Thai
眞軫震 質	-n -t	-ŋ [12(34)] -n [1(1)] -m [1(1)] -k [5(20)] -t [1(1)]
諄準稕 術	-n -t	-n [2(2)] -t [1(2)]
文吻問 物	-n -t	-ŋ [8(10)] -k [4(58)]
欣隱焮 迄	-n -t	-ŋ [1(1)] -k [1(1)]
元阮願 月	-n -t	-ŋ [7(27)] -n [2(8)] -k [5(10)] -t [1(1)]
魂混恩	-n	-ŋ [1(1)] -n [3(7)]
痕很恨 沒	-n -t	-ŋ [1(2)] -k [1(1)]

山攝	SV (17C)	Thai
寒旱翰 曷	-n -t	-ŋ [5(9)] -k [1(25)] -t [2(4)]
桓緩換 末	-n -t	-ŋ [8(15)] -k [2(2)] -t [1(2)]
刪清諫 刪 鎋	-n -t	-ŋ [1(1)] -t [1(7)] -
山產禡 黠	-n -t	-ŋ [1(2)] -k [1(1)] -t [1(2)]
先銑霰 屑	-n -t	-ŋ [5(6)] -n [7(15)] -m [1(1)] -k [2(8)] -t [2(2)]
仙獮線 薛	-n -t	-ŋ [5(5)] -n [9(27)] -k [1(1)] -t [4(8)] zero [1(1)]

21

4. Results (資料 2)

<i>n:n</i>	(25)	<i>n:ŋ</i>	(55)
-iên	14	-iên	11
-uyên	4	-uyên	6
-in	1		
-ôn	3	-ôn	2
		-ân	15
-uân	2	-uân	1
		-an	11
		-oan	4
		-ăn	5

<i>t:t</i>	(14)	<i>t:k</i>	(25)
-iêt	5	-iêt	7
-uyêt	1		
		-ôt	1
		-ât	12
-uât	1		
-at	6	-at	5
-oat	1		

22

5. Discussion

- All the cases of 通 rhyme class are transcribed with -ŋ/k, which implies that - $\widehat{\eta m}/\widehat{k p}$ after back vowels remained unchanged.

功 *cô^{ng}* ýž /ko^ŋ/

- All the cases of 梗 rhyme class are transcribed with -n/t, which implies that - $\eta/\text{ḱ}$ after front vowels had changed to -n/t.

明 *min^h* đũ /min/

23

5. Discussion

- About 32% of 臻 and 山 rhyme classes show that -n/t after central vowels and diphthongs remained unchanged, which implies that some of -n/t after central vowels and diphthongs seem to be unchanged.

真 *chân* 眞 *fəʒi* /cəəŋ/

順 *thuân* 順 *cŋi* /thùn/

- 3 cases of -n after ô (混 and 魂 rhymes) are transcribed with -n, which implies that a few cases of -n/t after back vowels seem to be unchanged.

本 *bôn* 本 *fŋi* /bôn/

24

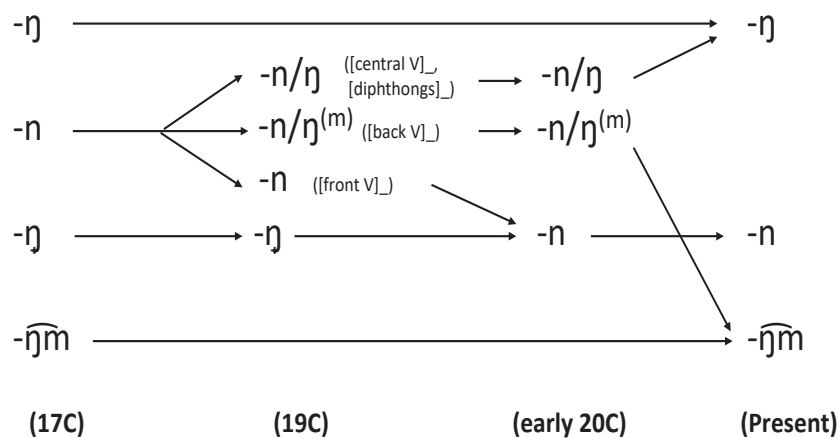
5. Discussion

- 1 case of -n after i (震 rhyme) is transcribed with -n, which implies that the cases of -n/t after front vowels seems to be unchanged.

信 *tín* 信 *bŋi* /tín/

25

6. Tentative conclusions



26

6. Tentative conclusions

- Parallel sound change in other languages (e.g. Chaozhouhua)
 - Chaozhouhua 潮州話 also underwent the process $-n > -\eta$; $-t > -k$ within 120 years (林 2005)

Xian I, II	am (iəm)	Shen	im (iŋ) ³¹
III, IV	iəm (iam, ien)		
CHH	uam, uaŋ		
Shan I, II	aŋ	Zhen I	uŋ, uŋ
III, IV	ien (ien) ³²	III	iŋ, uŋ (in)
CI, II	ueŋ (uaŋ, uiŋ)	C	uŋ
III, IV	ueŋ (uaŋ, uŋ, uiŋ)		
Dang I	aŋ, uŋ	Tong I	aŋ, oŋ—
III	iaŋ, uŋ	III	oŋ, ioŋ, eŋ
C	uaŋ		
Jiang	aŋ, (uaŋ, uŋ)	Zeng I	eŋ (aŋ)
Geng	eŋ	III	eŋ (iŋ)
CHH	oŋ, uaŋ		
CHH	ioŋ, uaŋ		

(Yue 2001: 222)

27

References

- 大野美紀子 (2022) 「〈特集〉「景福寺資料」の学際的研究——東南アジアにおける文献資料の新たな活用に向けて——」『東南アジア研究』60: 5-70.
- 近藤美佳 (2017) 「ベトナム語南部方言の形成過程に関する一考察」(博士論文)
- 清水政明 (1999) 「Alexandre de Rhodesの辞書に見るベトナム漢字音について」『東南アジア——歴史と文化——』28: 55-80.
- 清水政明 (2022) 「漢喃版『佛説天地八陽經』に見る字喃の方言性」『東南アジア研究』60: 40-57.
- 平山久雄 (2022) 『中古音講義』(汲古書店)
- 三根谷徹 (1972) 『越南漢字音の研究』(東洋文庫)
- 林伦论 (2005) 「从《汕头口语语法基础教程》看120年前的潮州方言音系」『语言科学』4(2): 74-80.
- Nguyễn N.Q. (2018) Chữ Nôm ghi âm Nam Bộ trong tương quan với ngữ âm vùng miền - trường hợp văn bản nôm Kim cổ kỳ quan của Nguyễn Văn Thới, *Tạp chí KHXH TPHCM*, số 5 (237): 34-45
- Nguyễn Q.T. phiên âm và chú giải (2008) *Nguyễn Đình Chiểu, Lục Vân Tiên Truyện, Bản Nôm và bản quốc ngữ cô nhất*, Nhà xuất bản Văn học-Trung tâm Nghiên cứu Quốc học.

28

References

- Nguyễn T.C. (1979) *Nguồn gốc và quá trình hình thành cách đọc Hán Việt*, Nhà xuất bản Khoa học Xã hội.
- Gregerson K.J. (1969) A study of middle Vietnamese phonology, *Bulletin de la Société des Etudes Indochinoises*, 44(1): 135-193.
- Pham A.H. (2006) Vietnamese rhyme, *Southwest Journal of Linguistics*, 25(2): 107-141.
- Shimizu M. (2014) The Distribution of Final Palatals in Vietnamese Dialects, *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*, 24-25, May, 2014, Pathumwan Princess Hotel, Bangkok, Thailand: 146-153.
- Shimizu M. (2022) Philological study of Vietnamese historical phonology—Nôm materials for 19th-century Southern dialect, *Journal of Southeast Asian Linguistics Society*, 15(4): 1-14.
- Thompson L.C. (1959) Saigon phonemics, *Language*, 35(3): 454-476.
- Yue A.O. (2001) The historic role of the late professor Y. R. Chao's 1929 field materials, *Language and Linguistics*, 2(1): 197-228.

29

第 3 章

地域研究と Informatics

地域研究のための研究データ管理の始め

木谷 公哉

情報学研究者が日々直面する研究現場においては、情報学と地域研究のあいだで、研究データをめぐる対応に乖離が生じている。具体的には、(1) 共有管理機能の制約、(2) 大容量データの処理と加工、(3) 多言語情報の特定と検証、(4) 研究分野特有の複雑な分類体系など、データ管理の困難に関わる問題が多く存在する。情報学研究者にとって、地域研究者がフィールドから持ち帰る「重要な研究データ」が、どのような意味で重要なのかは必ずしも自明ではない。そこで現状を理解するために、一情報学研究者として実際にフィールドに赴き、地域研究の現場が生成する研究データと、その生成過程を調査した。本稿では、このフィールド経験を踏まえ、地域研究の実態に即した研究データ管理の試案を提示するものである。

1. 研究データ管理とは何か

現在、研究データ管理（Research Data Management: RDM）は、研究者にとって「避けては通れない必須の課題」となっている。主な理由は次の三点である。

1. 公的資金における要請（DMP の作成）

科学研究費助成事業では、研究データの管理・利活用に関する対応として、令和6（2024）年度以降に実施する新規・継続を含む全ての研究課題において、研究開始前にデータ管理計画書（DMP）を活用し、研究データの適切な管理と利活用を促進することが求められている^[1]。

2. 研究インテグリティの確保

政府の対応方針においては、研究セキュリティ確保の基盤として、研究者自身による研究活動の透明性確保と自律的なリスクマネジメントの徹底が求められている^[2]。たとえば京都大学では、「発表された研究成果の根拠となる研究資料等（文書、数値データ、画像等）」について、論文等の発表後少なくとも10年間保存する義務があると定められている^[3]。

3. 国際的潮流としてのオープンサイエンス

情報通信技術の進展により研究データ量が増大する一方で、オープンサイエンスの潮流のもとで、研究成果の透明性・再現性・再利用性を高めることが求められている^[4]。研究データの管理は、公開の可否も含めた方針策定と実行を通じて、研究の社会的説明責任や波及効果に直結する要素となっている。

以上より、RDMは単なる事務作業ではなく、研究の継続性・効率性・健全性を支える基盤的活動であり、大学全体の責務として位置付けられるべきものである。

1. 1. 保存から利活用へ：研究データ基盤に求められる条件

国立情報学研究所が提供する研究データ管理サービス「GakuNin RDM」には、標準ストレージ（NII Storage）として1ユーザーあたり100GBまで、かつ1ファイルあたり5GB未満という制限がある^[5]。たとえば、筆者の参加する人文社会科学系の科学研究費補助金（B）「東南アジア大陸部越僑コミュニティの基礎研究：ベトナム仏教寺院資料分析から」（代表：大野美紀子）プロジェクトでは、メンバー間で共有している研究データ用ドライブが4年間（2026年2月時点）で600GBを超える容量を使用しており、さらに1ファイル5GBを超える動画も含まれている。したがって、単一プロジェクトであっても必要となる研究データ量は相当大きい場合があり、現状の制限では、特に大容量データや動画を扱う研究においては運用上の制約が生じる可能性がある。

具体的なデータ例として、京都大学貴重資料デジタルアーカイブに掲載した景福寺資料（98点）^[6]を含む景福寺漢喃本目録データの保存用マスターデータ（TIFF形式の画像）など、約142GBのデータが存在する。また、「景福寺」という一つの寺院について、プロジェクト関係者数名が写真や動画（インタビュー等）を撮影・収集した結果、データ点数は2,354点に達しており、本プロジェクト全体（タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア等）のベトナム仏教寺院および関連施設のデータ（4年間）の総数は15,900点に及ぶ。このように、単なる写真や動画に限らず、長期的な保存を見越した大容量データも扱う必要がある。

1. 2. 京都大学の研究データ基盤

京都大学では、2025年5月よりNextcloudを用いた「RDM Drive」が提供されている^[7]。サービス当初は20TBまでの範囲であったが、有償化後（2028年度以降）は50TBプランへの拡充も検討されている^[8]。なお、100TBまで対応可能なオブジェクトストレージは検討対象としない。オブジェクトストレージは、膨大なデータを安価かつ安定的に長期保存することに特化した技術であり、システムバックアップやアーカイブ用途には非常に優れている。しかしながら、本件の主な利用目的は、日々の研究活動においては、既存のファイルサーバーのような階層構造（ディレクトリ）による直感的なファイル操作や、柔軟なデータ利活用が求められるためである。これらのサービスは、当初は試行的運用として無償利用とされていたが、現在は2027年度まで無償利用可能であり、2028年度以降は負担金が発生する見込みとされている。現状では、データの保管や共有は可能である一方で、そのための設計や保管したデータを手軽に利活用できるか、維持管理経費をどうするかという点で依然として課題である。実際のプロジェクト運用では、単なるオンラインストレージにとどまらず、蓄積したデータを手軽に検索・参照・再利用できる環境が求められている。しかし、研究データ管理の制度的要請が強まる一方で、地域研究の現場ではどのように研究データが生成されているのかは、必ずしも十分に理解されていない。

2. 情報学研究者がフィールドに出してみた

本稿では、RDMを制度として議論するためには、その前提として、地域研究のフィールドで実際にどのような研究データが生成されているのかを確認しておく必要がある。そこで、地域研究者とともにフィールド調査を行い、地域研究の現場が生成する研究データとその生成過程を把握した。データ収集では、寺院資料をはじめ、寺院内にある文字資料、所蔵資料、碑文、位牌、その他の置物、柱、建物など、対象となり得るものを可能な限り網羅的に写真撮影した。現地では、「どこに何があるか」を見落とさないため、広範な対象を撮影する必要があった。また、神社・寺院は17時頃に閉まることが多く、1日に多いときには8件程度を巡ることもあった。その結果として、1日あたりの撮影データ量は膨大となり、後からデータを一括して受け取った場合には整理が困難となることが明らかとなった。この課題に対応するため、可能な限り当日中にデータを回収し、少なくとも「いつ・どこで撮影したデータか」を分類しておく必要がある。



図1 寺内資料に目を輝かせる研究者達

3. フィールド過程の可視化の試み

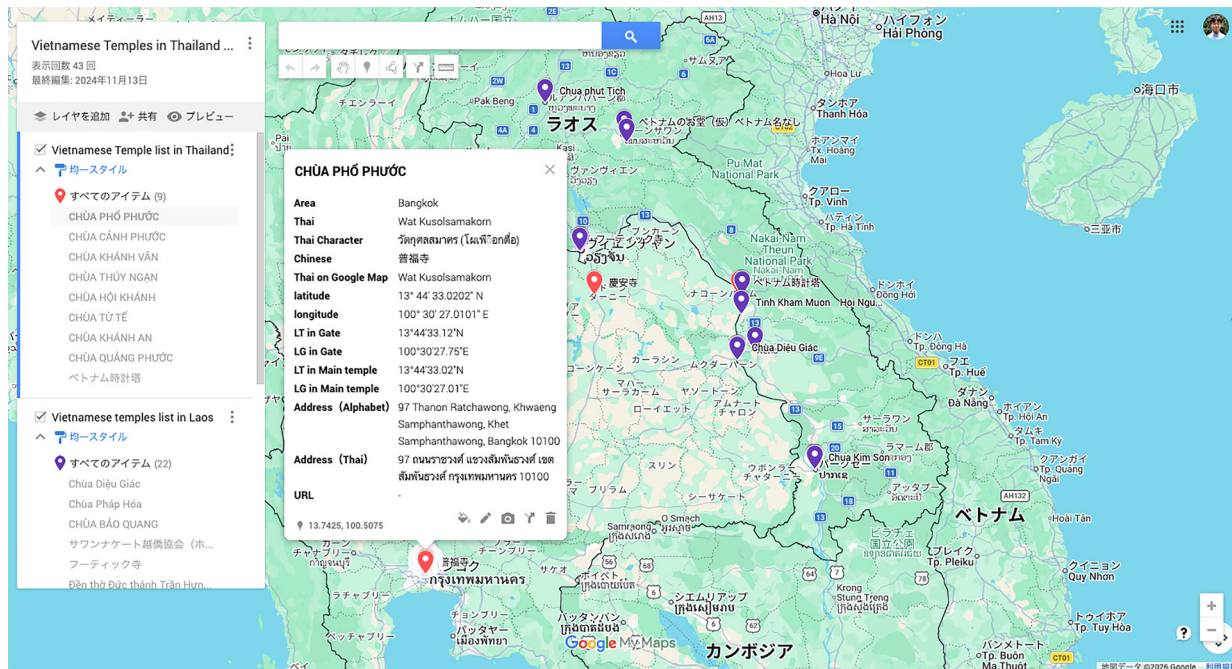


図2 Google My Maps (© Google, 2026) をもとに筆者作成

各調査地において緯度・経度（地点情報）を収集し、Google Maps 上で位置を確認したうえで可視化した（図2）。特筆すべき点は、各研究者がスマートフォンを用いることで、現地において容易に緯度・経度を記録できた点である。特にラオスでは、施設が Google Maps に掲載されていない、あるいは掲載されていても現地語（ラオ語）や不明確な名称表記の影響により、場所の特定が困難なケースがみられた。データを整理する上で、データの位置（所在）を明確にすることは極めて重要である。この点で、現地において手軽に地点情報を収集できたことは、データ整理および可視化に寄与した。この地点情報は、後述する GPS ログ（ルート可視化）や写真・資料データとの照合作業の基盤となるものであり、フィールド研究におけるデータ管理の基本単位として位置づけられる。

3. 1. ルートマップ

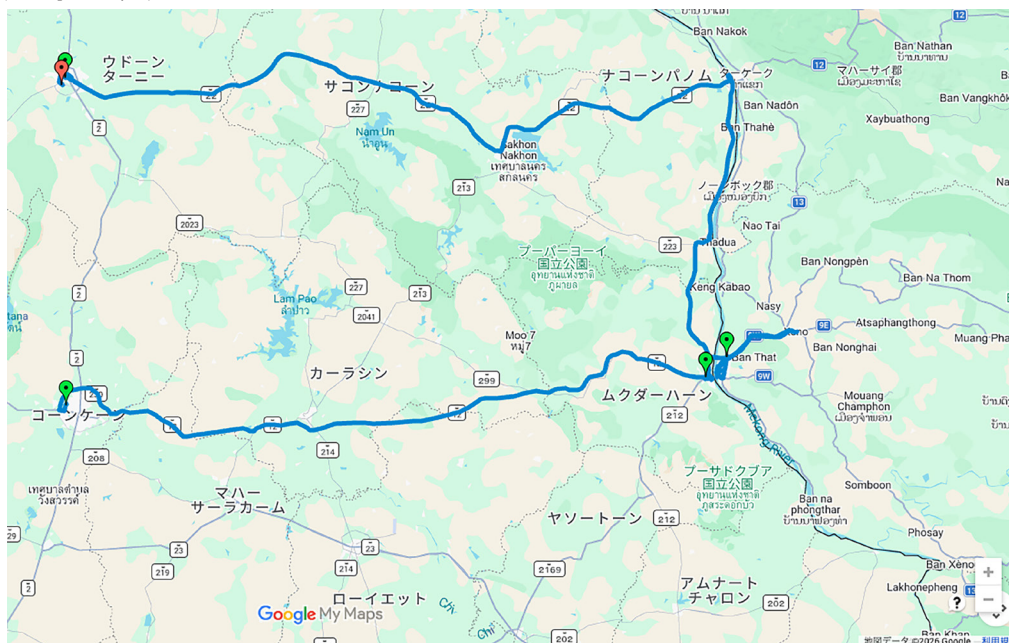


図3 Google My Maps (© Google, 2026) をもとに筆者作成

図3は、スマートフォンの登山用アプリ「ジオグラフィカ」で取得したGPSログを、Google My Mapsで可視化したルートマップである。バンコク市（タイ）を出発し、東北タイのムクダーハーン県からサワンナケート県（ラオス）へ陸路で国境を越え、再びタイ側へ戻ってウドンターニー県まで移動した経路を記録したものである。フィールド調査において、「いつ・どの地点を通過したか」をログとして残すことは、後から収集資料・写真・聞き取り記録などと照合し、資料の取得地点や時点を把握するうえで有効であると考えられる。このような時空間情報の記録は、フィールド研究におけるデータ管理の基盤を構成するものであり、RDMの観点からも重要である。こうしたGPSログの収集は、スマートフォンの高性能化や位置情報精度の向上により、研究者が比較的容易に実施できる点に特徴がある。

3.2. ルート詳細

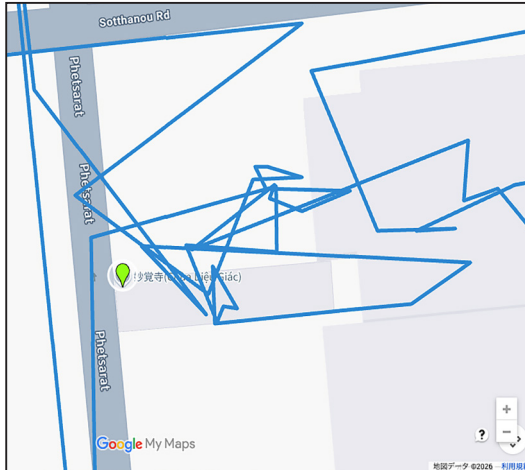


図4 Google My Maps (© Google, 2026) をもとに
筆者作成：ラオス・サワンナケートの妙覚寺
(Chùa Diệu Giác) (2023年9月)

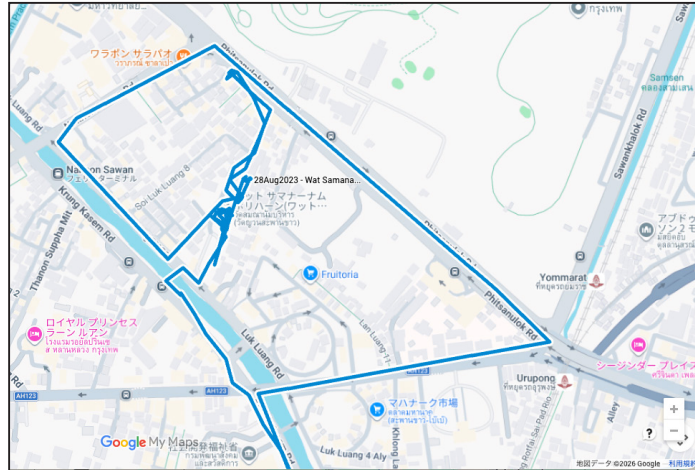


図5 Google My Maps (© Google, 2026) をもとに
筆者作成：タイ・バンコクの景福寺
(Wat Borommanan Borihan Canh Phuoc temple) (2023年8月)

図4および図5は、各寺院における調査ルートを示したものであり、GPSログデータをGoogle My Mapsで可視化したものである。このようなデータにより、調査の日時および移動経路、ならびに寺院内の調査地点を記録し、後から把握することが可能となる。さらに、写真・資料データの撮影日時や現地メモと照合することで、調査行動と取得データとの対応付けが可能となる。

4. フィールド調査への最小提案

本提案は、実際のフィールド調査における試行経験に基づき、運用可能性と記録負担のバランスを考慮して導出したものである。

一定の工夫を導入することで、フィールド調査と研究データ管理（RDM）に伴う負担は軽減可能である。後からデータの取得地点を特定するための最小限の情報として、位置情報、名称情報、連絡先情報の3点が有効と考えられる。本稿で提案する最小セットは以下のとおりである。

1. 位置情報（GPS：緯度・経度・撮影日時）

不可欠である。後から地図上での位置確認や移動ルートの復元、写真の撮影順（時系列）の照合を行うための基軸となる。

2. 名称情報（調査対象の正面写真：門・銘板等）

不可欠である。看板や施設名表示（門標・銘板など）を文字情報として再確認でき、同名施設の混同を減らす。また、撮影データ群がどの調査対象に属するか（帰属）を示す区切りとしても機能する。

3. 連絡先情報（看板等：電話・住所・Web・SNS等）

有効である。住所表記がある場合には、行政区分の特定や表記ゆれの確定に役立つ。加えて、後日の照会や確認作業の手掛かりとなる。

このほかにも、撮影日時のタイムゾーンや端末時計のずれを防ぐための事前統一、参照ID（寺院ID・地点ID等）の付与、方向・視点情報（コンパスによる方角）の記録、撮影目的の記録など、有用な要素は多い。しかし、現地で求める項目を増やしすぎると整理が追いつかず、結果として記録自体が放置される危険性がある。そこで本稿では、まずは上記の3点に絞って提案する。

なお本最小セットは、完全性よりも運用可能性を優先した設計であり、調査条件や研究目的に応じて適宜拡張されることを前提とする。

4. 1. 位置情報（GPS：緯度・経度・撮影日時）

1. スマートフォンで写真撮影

* データに緯度・経度・撮影時刻のGPS情報自動付与

2. スマートフォンのアプリで緯度・経度測定

* 可能ならGPSログをとる



利用マニュアル



図6 スマートフォンを使った位置情報取得方法

図6に示すように、位置情報を手軽に保存する方法として、スマートフォンが写真に付与するGPS情報（EXIFメタデータ）を活用する手法がある。カメラアプリに位置情報の利用を許可しておくことで、撮影時に端末内部時計に基づく日時情報とともに、緯度・経度および撮影時刻が自動的に記録される。さらに、スマートフォンがネットワークに接続されている場合には、A-GPSやWi-Fi測位等の補助機能により、測位の初期速度や精度が向上することがある。

ただし、位置情報の記録には、事前にカメラアプリで位置情報の利用を許可しておく必要がある。また、SNSのメッセージ機能等を通じて写真データを共有した場合、プライバシー保護の観点から緯度・経度情報が削除されることがある点にも留意が必要である。こうした仕様を知らずに共有されるケースもみられた。

そこで第2の方法として、スマートフォンの位置情報取得アプリを用いて緯度・経度を直接測定し、地点情報として記録する方法も試した。その結果、有効である可能性が示された。スマートフォンのみで情報取得が可能であるため、調査メンバーにも導入しやすい。本プロジェクトでは、写真撮影方法およびアプリ利用手順に関するマニュアルを作成し、メンバー間で共有している。さらに、当該マニュアルは、京都大学東南アジア地域研究研究所情報処理室のウェブサイト（<https://info.cseas.kyoto-u.ac.jp>）にて公開している。

4. 2. 名称情報（調査対象の正面写真：門・銘板等）

調査対象地に到着したら、まず対象を特定できる門や入口などの正面写真を撮影することを原則とする。1日に複数の調査地を巡回する場合、寺院内で撮影される資料や景観は類似しやすく、後のデータ整理において帰属の判別が困難になることがある。そのため、名称が掲示されている可能性の高い門や入口を撮影しておく運用を徹底する。

この運用により、門から次の門までの撮影データは同一調査地に属することを示す区切りとなり、データ帰属を担保するエビデンスとなる。単純な手順であるが、整理工程における効果は大きい。また、Google Maps等で地点情報を新規登録・修正する際にも、名称確認の根拠資料として活用できる。



図7 ラオス・サワンナケートの法華寺（Chùa Pháp Hóa）正門（2023年9月1日）

撮影機材としては、手ブレ補正機能を備え、光学ズームにより適切な距離から正面を撮影できるスマートフォン、またはデジタル一眼カメラ等の使用を推奨する。手ブレ補正が不十分な機材では、文字が判読困難な画像となり、整理作業やOCR処理に支障を来す場合がある。さらに、位置情報（緯度・経度）を記録する観点からはスマートフォンが有効であるため、スマートフォンとデジタル一眼カメラの併用が望ましい。

4.3. 連絡先情報（看板等：電話・住所・Web・SNS等）

連絡先情報（看板等）として、寺院の周囲には住所や電話番号等が記載された看板が設置されていることが多い。これらは単なる宣伝目的の場合もあるものの、撮影して記録しておくことで、後から所在地の特定や表記確認に活用できる場合がある。



図8 ラオス・サワンナケートの法華寺（Chùa Pháp Hóa）の連絡先情報（2023年9月1日）。
現地掲示の公開情報を対象としているが、個人情報に配慮し加工を施している。

4. 4. フィールド調査を RDM につなげる最小セット

- ・フィールド調査では「資料(写真・動画・メモ)」と「調査地」を結び付けて保存することが不可欠
- ・資料所在の分布を可視化し、将来的な共有・公開の基盤となる

1.位置:緯度・経度・撮影日時(時系列・帰属の補強)

2.名称:正面写真(名称判読・OCR)

3.連絡先:看板等(再訪・照会の手掛かり)

- ・Google Maps 等での地点特定・検証・検索が容易
- ・同名施設の混同防止／地点登録(新規・修正)の根拠(エビデンス)
- ・重要:増やしすぎない(現地で実行できる最小セットを標準化し、継続運用を優先)

図9 フィールド調査を RDM へ接続するための最小セット

フィールド調査では、調査地情報と資料を結び付けて保存することが、資料所在の分布を可視化し、将来的に共有・公開するための基盤として極めて重要である。資料が大量に蓄積されるほど、「どこのデータか」を後から確定できるかどうか、データの再利用性と整理可能性を左右する。

この目的のために不可欠な最小セットは、(1) 位置情報(緯度・経度・撮影日時)、(2) 名称情報(門・銘板等の正面写真)、(3) 連絡先情報(看板等:住所・電話・Web・SNS 等が確認できる場合の撮影)の三点である。これらの関係を整理したものを図9に示す。

これらを最低限の標準として記録しておくことで、Google Maps 等における地点同定や可視化が容易となり、名称による検索可能性も確保される。また、地点情報の新規登録や修正を行う際には、正面写真や看板写真がエビデンスとして機能し、同名施設の混同や表記ゆれによる誤同定を抑制できる。

有用な記録項目は他にも存在するが、現地で求める項目を増やしすぎると運用が破綻し、記録自体が継続されない危険性がある。したがって本稿では、まずは3点の最小セットを徹底して調査データの帰属を担保し、必要に応じて撮影日時の統一(タイムゾーン・時計ずれ対策)や参照ID付与等を段階的に追加する方針を提案する。

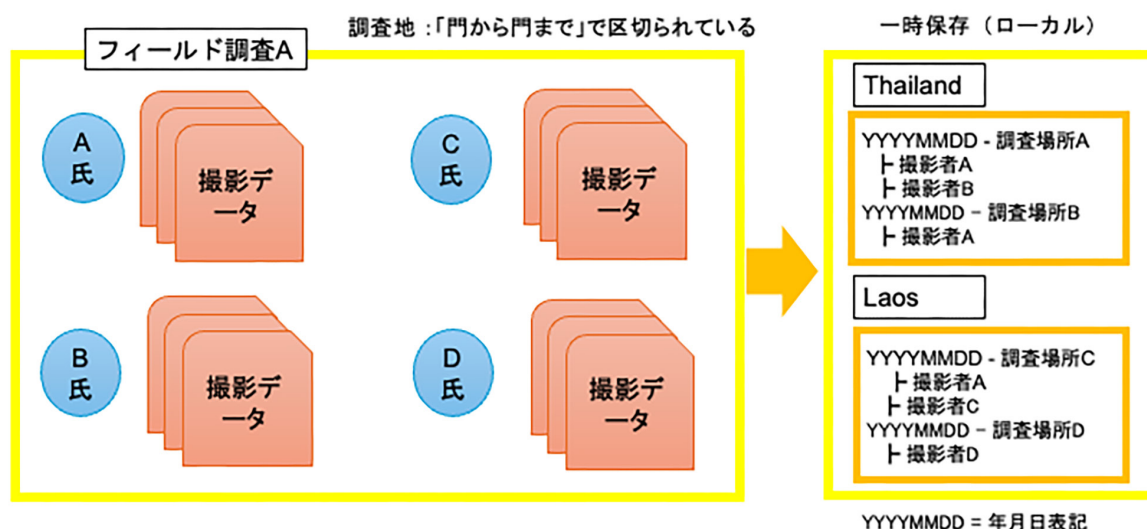
5. 地域研究データ整理の設計試案

本整理工程は一事例に基づく試案であり、他の研究領域や調査対象に対しては調整が必要となる場合がある。研究データの整理・保存工程は次の4段階に整理できると考えられる。

1. 撮影データの整理(一次保存)
2. 保存先の設計(共有・公開を見据えた保存構造)
3. 属性による整理(国別等のビュー)
4. 内容分類(専門知依存)

地域研究におけるデータ整理は、必ずしも洗練された情報システムの導入から始まるわけではない。むしろ、フィールドから持ち帰った撮影データをどのように整理し、保存するかという極めて実務的な工程から出発する。本節では、実際に試行した経験をもとに、これらの工程を具体的に検討する。

5.1. 撮影データの整理（一次保存）



撮影者ごとの撮影データ収集 → 帰属整理(国→場所→撮影者)

運用上の注意: 撮影データは可能な限り現地で整理する(調査後は量が膨大になり、整理が困難)

図 10 撮影データの帰属整理方法（門から門までを単位とした区切り）

最初の工程は、撮影データ（写真・動画）に記録された位置情報（緯度・経度）および撮影日時と、訪問した調査地を照合し、データの帰属を確定する作業である。これは比較的客観的に実施可能であり、研究分野の専門知識がなくとも実行できるため、研究データ管理の基盤を形成する。

撮影者ごとに撮影データを収集し、調査単位で束ねたうえで、国→調査場所→日付→撮影者の順に帰属整理を行う。具体的には、調査対象を特定できる門や入口の正面写真を「区切り」とし、「門から門まで」を同一調査地に属するデータ群として扱う。

なお、撮影データの整理は可能な限り現地で行うことが望ましい。調査後はデータ量が増えすぎ、整理負担が急増するためである。

本工程は以下の手順で整理できる。

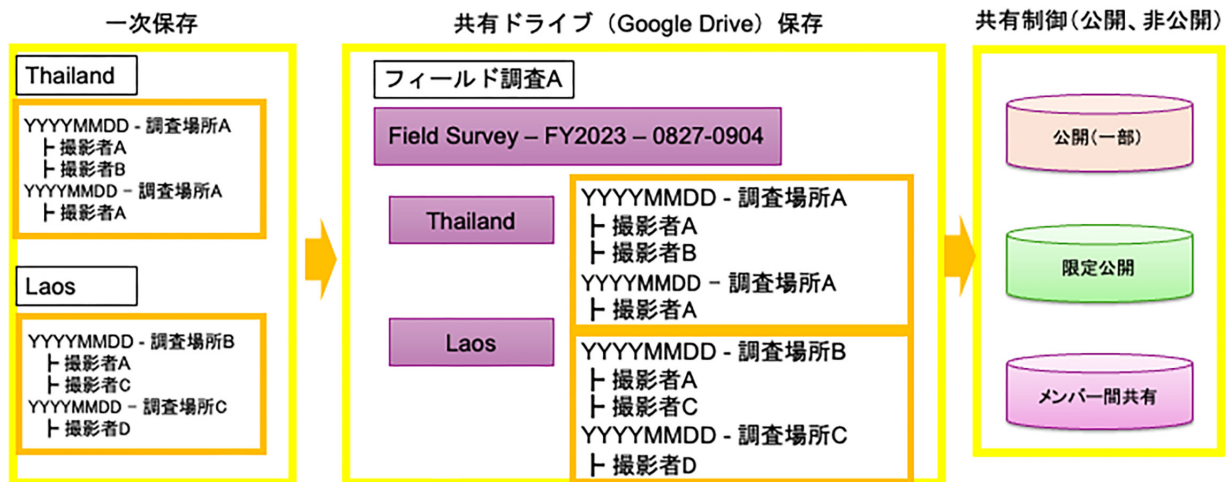
- 撮影者ごとに撮影データを収集する
- 調査単位で束ねる
- 国 → 調査場所 → 日付 → 撮影者の順に帰属整理する
- 「門から門まで」を同一調査地のデータ群として区切る

5.2. 保存先の設計（共有・公開を見据えた保存構造）

保存先の設計では、一次保存で整理した撮影データを共有ドライブ（Google Drive）へ集約し、継続的な運用と将来的な共有・公開に耐える保存構造を整える。基本方針は、(1) 原本（マスター）を一箇所に安定して保存すること、(2) 整理の多様性をフォルダ複製ではなくショートカット等のビューによって実現すること、の2点である。

具体的には、フィールド調査ごとにマスター領域を設け、国（必要に応じて地域）配下に「日付 - 調査地」フォルダを作成し、その下に撮影者別フォルダを配置する。これにより、再訪時にも同一の調査地に対して日付単位でデータを追加できる。

また、国別・分類別などの見せ方はショートカット等を用いて構成し、重複保存を避けつつ、継続的な運用と拡張性を確保する。



原本(マスター)は共有ドライブに集約し、整理ビュー(国別・分類別)はショートカットで多視点化する。複製を避けることで、継続運用と将来的な拡張性を確保する。

図 11 研究データ保存構造の設計 (マスター保存とビュー分離の原則)

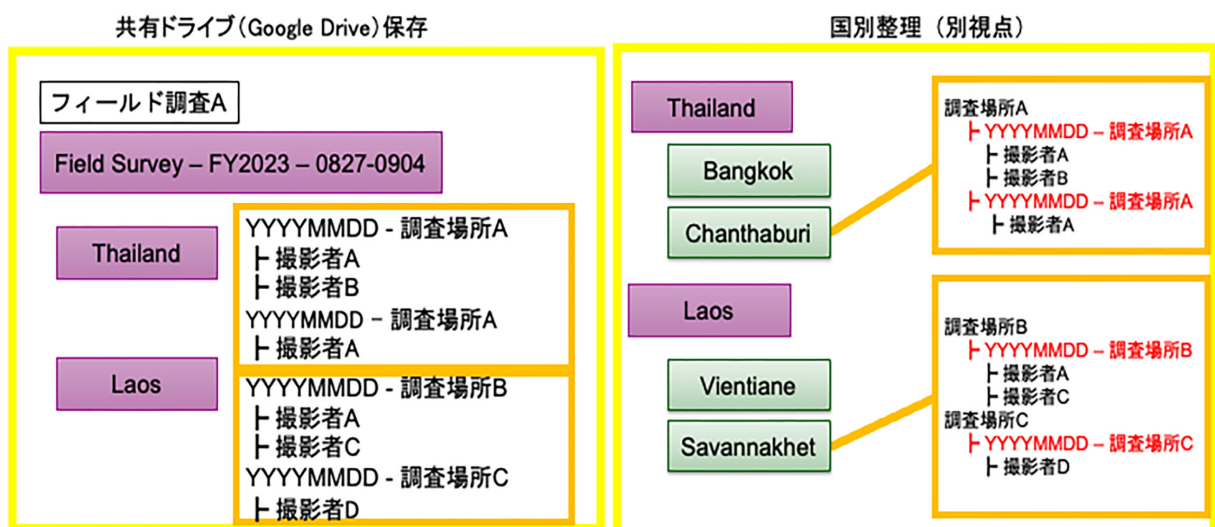
5.3. 属性による整理 (国別等のビュー)

第3段階では、フィールド調査ごとに保存されたマスター構造を維持したまま、国→地域(市等)を起点に、調査地単位で参照できる整理ビューを構成する。ここで重要なのは、マスター側のフォルダ構造を変更せず、Google Drive のショートカットを最大限活用して「見せ方」を追加する点である。

たとえば、マスター領域が以下の構造で保存されている場合：

フィールド調査
 ↳ 国
 ↳ YYYYMMDD - 調査地 A
 ↳ 撮影者 A
 ↳ 撮影者 C

第3段階では、以下のように、国→地域(市等)→調査地の階層を持つビュー領域を用意し、調査地フォルダの配下に該当する訪問単位フォルダへのショートカットを配置する：



フィールド調査別データ整理(マスター)は触らない、国・地域・調査地を起点にした“ビュー”を作る
 ショートカット(赤字部分)で再編するので重複(再訪)にも耐える

図 12 ショートカットを用いた調査地単位の整理ビュー構成

- 国
- └ 地域（市等）
- └ 調査地 A
- └ YYYYMMDD – 調査地 A（ショートカット）

この方式であれば、ショートカット配下（撮影者別フォルダ等）を編集する必要がなく、マスターを複製することなく調査地単位の整理が可能となる。また、同一の調査地が複数のフィールド調査（年度・プロジェクト）にまたがって出現する場合でも、調査地ビューの下にショートカットを追加するだけで対応できる。

5.4. 内容分類（専門知依存）

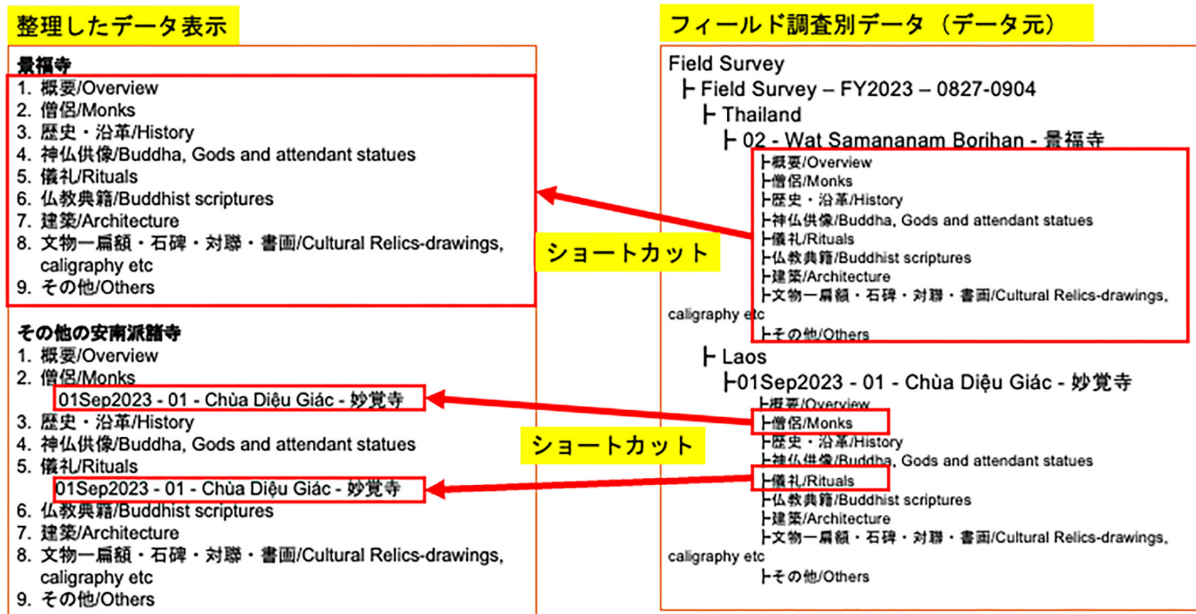


図13 「内容分類ビュー」の試行構造

第4段階では、フィールド調査別に保存されたデータを、内容カテゴリー（僧侶、儀礼、建築、文物等）ごとに分類することを試みた。

当初は、フィールド調査別のデータ（データ元）を直接カテゴリーに振り分け、そのうえで調査地ごとに分類ショートカットを作成する方法を採用した。しかし、Google Drive の Web UI 上で個々のファイルに対してショートカットを作成する操作は、データ量が増加すると著しく非効率となり、実運用には適さなかった。

そこで、いったんファイル・フォルダ操作によってオリジナル側で分類を行い、その後、調査地単位に分類ショートカットを作成する方法へと変更した。しかしこの方法では、マスター構造そのものを変更することになるため、分類が誤っていた場合に元の状態へ戻すことが困難になるという問題が生じた。

さらに本質的な問題として、内容分類は撮影者の文脈理解や研究分野特有の知識を必要とする作業であり、情報学研究者が単独で担うべき工程ではないことが明らかとなった。したがって、内容分類は基盤的なデータ整理工程とは切り分け、専門研究者との協働のもとで実施されるべき段階であると位置付けられる。

5.5. 専門知依存の内容分類における限界（情報学研究者の立場から）

本研究では、フィールド調査別に保存されたマスターデータをもとに、調査地ごとに内容分類を行う試みを行った。しかし、その過程でいくつかの構造的な問題が明らかになった。

第一に、分類作業の過程でマスター構造を直接変更してしまったことで、データの不可逆的な再編が生じた。その結果、修正や再分類の際に元の帰属関係を追跡することが困難となった。

第二に、分類フォルダの下に日付や撮影者情報を組み込んだことで、同一調査地であっても異なる日付のデータを横断的に把握することが難しくなり、帰属（調査地 × 日付 × 撮影者）の軸が弱まった。

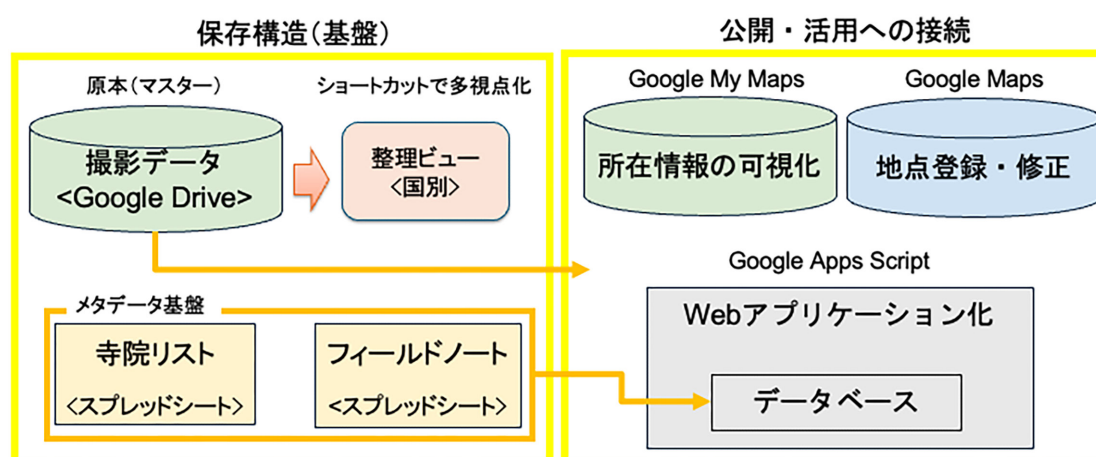
第三に、内容分類は研究分野固有の専門知識に強く依存するため、十分な基準共有がないまま情報学研究者が分類を行うと、解釈の揺れや誤分類が生じやすく、後工程で混乱を招く可能性があることが明らかとなった。

以上の結果から、以下の点が明らかとなった。

- ・ マスター構造を分類によって変更すると不可逆性が生じ、修正コストが増大する
- ・ 帰属情報（調査地 × 日付 × 撮影者）の軸が崩れることで、横断的な把握が困難になる
- ・ 内容分類は専門知に依存するため、基準共有なしでは誤分類や混乱を招く

したがって、マスター構造は固定し、内容分類はビューとして扱う、あるいは補助的技術を用いて慎重に実施する必要がある。

5.6. 設計試案のまとめ（整理から公開へ）



整理されたデータは、可視化・検索・公開へと接続可能な基盤となる

図 14 研究データ整理・保存から公開・活用への統合構成

本稿で示した整理・保存設計は、単にデータを保管するためのものではなく、将来的な共有・公開へと接続可能な基盤構造を意図したものである。具体的には、寺院リストやフィールドノート等の構造化情報はスプレッドシートで管理し、撮影データや関連資料は Google Drive 上に原本（マスター）として保存する。スプレッドシートはメタデータ基盤として機能し、その情報をもとに Google Apps Script による簡易 Web アプリケーションの構築や、Google My Maps による所在地情報の可視化などへ展開できる。さらに、調査地情報については Google Maps 等の地図サービス上で地点登録・修正を行うことで、所在情報を参照しやすい形に接続できる。

このように、整理段階でデータの帰属と構造を明確にしておくことが、研究データを公開可能な資源へと転換する前提条件となる。

さらに、このように構築された基盤の上において、近年発展が著しい OCR や生成 AI 等の技術を組み合わせることで、研究データの可視化と利活用の可能性は一層拡張される。

6. 多言語 OCR と生成 AI による研究データ整理の可能性

近年、OCR（光学文字認識）や生成 AI の急速な発展により、多言語環境下で生成されるフィールド調査データの扱い方にも新たな可能性が開かれつつある。特に、建造物の門や銘板、看板等に記された文字情報を抽出し、それを翻訳・整理する技術は、地域研究におけるデータの可視化と検索可能性を高める契機となりうる。

しかしながら、これらの技術は整理設計を代替するものではなく、あくまで設計された基盤の上で補助的に機能するものである。したがって、本章で示した整理・保存設計を前提としたうえで、多言語 OCR および生成 AI を用いた試行例を次節で示し、その有効性と限界、ならびに検証の必要性について検討する。

6.1. 多言語文字の抽出：Google ドキュメントの OCR（テキスト変換）



図 15 多言語 OCR における文字抽出の結果と検証例（成功例と誤読例）

Google Drive にデータを保存する場合、画像から文字情報を抽出する手段として、Google ドキュメントの光学文字認識（OCR）機能は手軽に利用できる有力な選択肢の一つである。データ整理を行う側が多言語の名称を理解できなくても、正面から適切に撮影された画像であれば、読み取り精度は概ね良好である。

一方で、ベトナム語表記などにおいて一部が正しく読み取れない場合もある。これは、文字部分に影がかかっていることや、文字のかすれ、書体、解像度などの影響によるものである。

抽出された文字情報の妥当性については、機械翻訳による内容確認に加え、抽出された原語表記を用いた検証によって信頼性を高めることができる。例えば、Google Maps 上で地点登録の有無を確認したり、インターネット上で関連情報（公式サイト、記事、画像等）の有無を照合したりすることで、検証可能性が向上する。

OCR は「文字抽出」の工程にとどまるものであり、研究データとして利用するためには、別途「検証」の工程が不可欠である。

6.2. OCR 手法の比較：Google ドキュメント OCR と Google Cloud Vision API

(a) Google ドキュメント OCR (元画像)	(b) Google Cloud Vision API (元画像)	(c) Google Cloud Vision API (加工画像)
EX ZROS 穂 วัดพาบระ CHUA PHÁP TÒA ฆะทุมพะวน 佛 彌 E CH: THUY - NHẬT (SAU Cang Duting IP	EX ZROS 穂 วัดพาบระ CHUA PHÁP TÒA ฆะทุมพะวน 佛 彌 E CH: THUY - NHẬT (SAU Cang Duting IP	E ENCENCESE ANSEASSAY # วัดพาบระ CHUA - PHÁP - HOA ฆะทุมพะวน E CB:THLY-NEUT (ST P

同一画像に対して、Google ドキュメント OCR および Google Cloud Vision API を適用し、さらに画像前処理の有無による差を比較した。ベトナム語表記において、Vision API は加工画像に対して比較的安定した抽出結果を示した。

図 16 OCR 手法および画像前処理の有無による文字抽出結果の比較

法華寺 (Chùa Pháp Hóa) を事例に、門に記された多言語文字を対象として、Google ドキュメント OCR と Google Cloud Vision API の 2 種類の OCR 手法を比較した。

比較にあたっては、元画像に加えて、OCR 処理を想定した画像加工版も用意した。画像加工には、筆者が公開している OCR Preprocess Toolkit (https://github.com/kimipooh/ocr_preprocess) を使用した。文字部分のコントラスト強調とエッジ保持を目的とし、CLAHE の調整、ストレッチの抑制、軽度のアンシャープ処理を施した。加工パラメータの選定は容易ではなく、本試行では生成 AI (ChatGPT) を補助的に用い、文字形状を崩さない範囲で調整を行った。

使用した主なオプションは以下の通りである。

```
-p clahe -w 3200 --clahe "16x16+128+2" --stretch "0.05%x0.05%" --unsharp "0x1.2+1.0+0.01"
```

調整方針は次の通りである。

- CLAHE を弱め (16x16) → エッジを破壊しない
- stretch を最小限 → 白飛び防止
- unsharp をやや強め → H と T の識別安定化
- 2 値化は行わない → Vision API 向き

その結果、元画像に対する読み取り精度は、Google ドキュメント OCR と Google Cloud Vision API の間で大きな差は見られなかった。一方、加工画像については、Google ドキュメント OCR では読み込みエラーが発生したのに対し、Google Cloud Vision API では、ややぼやけたベトナム語表記を比較的正確に抽出できるなど、一定の改善が確認された。これは、前処理の条件によっては文字形状が損なわれ、OCR 精度に影響を与える可能性があることを示しており (図 16)、前処理の適用には慎重な調整が必要である。

この比較から、日常的なフィールド調査データの整理においては、Google ドキュメント OCR でも概ね実用的であると考えられる。ただし、画像前処理を積極的に行う場合や、言語混在・低コントラスト環境への対応を想定する場合には、Google Cloud Vision API の方が柔軟性を持つ可能性が高い。

Google Cloud Vision API へのアクセスには、筆者が公開している Google Cloud Vision Multi-Language OCR Tool (木谷, 2026) を利用した。本ツールは多言語 OCR 処理を目的としたソフトウェアであり、詳細は参考文献^[9]を参照されたい。

本比較は限定的な条件下での結果であり、対象や撮影条件の違いによって結果が変動する可能性がある。

なお、本試行は探索的検討の位置づけであり、定量的評価については今後の課題とする。

6.3. 分類の可能性と検証の必要性

本節では、Google Drive に保存された撮影データおよび資料 (翻刻、メモ等) を対象に、生成 AI (Google Gemini API) を用いて分類を試行した事例を示す。対象は「景福寺資料」2,354 点である。

本試行では、ファイルリストの取得から分類結果の保存までを、すべて Google クラウド環境内で完結する構成とした。高度な専用システムを構築する方法も考えられるが、「誰もが比較的容易に再現できること」を重視し、既存の Google Drive、スプレッドシート、Google Gemini API (生成 AI) を Google Apps Script により連携させた構成とした。

Google Gemini API には入力サイズの制限 (<https://ai.google.dev/gemini-api/docs/file-input-methods>) があるため、サイズの大きい動画データは分類対象から除外した。また、分類結果とあわせて「なぜその分類と判断したか」という理由も出力させるよう設計した。使用したモデルは Gemini 2.5 Flash Lite であり、約 2,000 件規模の処理であれば数十円程度のコストで実行可能であった。

処理の流れは以下の通りである。まず、Google Drive からファイルリストを取得し、緯度・経度、撮影日時、作成日時、最終更新日時、最終更新者、ファイルサイズ、説明欄などのメタデータを収集する。次に、それらの情報およびテキストデータを入力として生成 AI に分類を行わせ、その結果をスプレッドシートに保存するとともに、Google Drive 上の各ファイルのメタデータ「説明」欄にも書き戻した。既存のメモがある場合は保持したまま追記する設計とした。



図 17 Google Drive・スプレッドシート・Google Apps Script を用いた分類支援システムの実行画面

この方式により、Google Drive 上での検索性が向上し、撮影データを調査場所まで辿った後、個別ファイルの一つずつ確認する負担を軽減できる可能性がある。

本試行は開発途上段階にあり、分類精度の体系的検証は未実施である。生成 AI による分類は有望ではあるが、専門家による確認と評価を前提とする補助的手法として位置づけるべきである。

なお、本手法は 1 件ごとの処理に一定の時間を要し、Google Apps Script の連続実行時間が最大 6 分であるという制約を受ける。そのため、処理を分割して実行する必要がある。本試行では、ファイルリストの作成に約 5 時間 30 分を要し、各データの平均分類時間は 6.54 秒であった。

6.4. 生成 AI による分類補助の例

図 17 に示した分類支援システムにより得られた結果の一例として、本試行では以下の 9 分類を設定した。

1. 概要 / Overview
2. 僧侶 / Monks
3. 歴史・沿革 / History
4. 神仏供像 / Buddha, Gods and attendant statues
5. 儀礼 / Rituals
6. 仏教典籍 / Buddhist scriptures
7. 建築 / Architecture
8. 文物（扁額・石碑・対聯・書画） / Cultural Relics
9. その他 / Others

手動分類との区別のため、生成 AI による分類には冒頭に [AI] を付与した。図 17 の左端の例は、手動分類（「景福寺本堂正面」）である。

提示した 4 例はいずれも成功例であり、出力された判断理由も概ね妥当な内容であった。理由説明の一部は英語で出力されているが、対象画像の視覚的特徴を踏まえた説明として整合的である。ただし、これらの理由は分類後に生成されたものであり、必ずしも生成 AI の内部判断過程を忠実に反映しているわけではない点に注意が必要である。

全体として、目視による確認では分類精度は一定水準に達しているように見受けられた。一方で、僧侶と神仏供像が同時に写り込む場合など、境界的事例では神仏供像へ分類される傾向が見られた。この点は、プロンプト設計や分類優先順位の設定に依存する可能性がある。

以上より、生成 AI は整理設計を前提としたうえで、分類作業を加速する補助的技術として活用可能であると考えられる。ただし、その結果は専門家による確認と評価を前提とするものであり、現段階では体系的な精度検証が今後の課題である。現時点での生成 AI は専門知を代替するものではなく、分類候補の提示および作業負担軽減を目的とする補助的技術として位置づけるのが妥当である。

7. まとめ：整理設計から生成 AI 活用へ

本稿の検討は主に東南アジアにおける宗教施設調査を対象としているが、情報学的視点から地域研究のフィールド調査において生成される「資料（写真・動画・フィールドノート、その他資料）」と「調査地」を確実に結び付けて保存するための研究データ管理（RDM）上の要点を整理した。フィールド調査ではデータが大量に生成されるため、後から「どこのデータか」を確定できるかどうか、再利用性と整理可能性を左右する。その最小限の実装として、位置情報（緯度・経度・撮影日時）／名称情報（門・銘板等の正面写真）／連絡先情報（看板等）の3点を標準化し、現地で実行可能な「増やしすぎない」運用を提案した。

加えて、撮影データを継続的に運用し、共有・公開へ接続するために、整理・保存工程を段階化した。第1段階では撮影者ごとのデータ収集と帰属整理を行い（現地整理を推奨）、第2段階で原本（マスター）を共有ドライブに集約し、ショートカットにより整理ビューを多視点化することで複製を避ける。

さらに、国別等のビューによる参照性を確保しつつ、可視化（Google My Maps）、地点登録・修正（Google Maps）、スプレッドシートをメタデータ基盤とした Web アプリケーション化（Google Apps Script）へと接続することで、整理されたデータを「可視化・検索・公開」へ展開可能な基盤として位置づけた。

最後に、多言語環境におけるデータ整理の補助として、OCR 手法比較、ならびに生成 AI による分類補助を試行した。これらは現時点では整理設計を代替するものではないが、設計された基盤上で補助的に用いることで、作業負担の軽減や検索性向上に寄与し得る。一方で、生成 AI の出力には検証が不可欠であり、専門家による確認と評価を組み込んだ運用へ段階的に発展させることが今後の課題である。

ただし生成 AI の進展は急速であり、将来的には分類・検証支援まで含め、研究データ整理の自動化がより現実的な選択肢となる可能性がある。示した最小セットと保存設計は、そのような将来の高度化を受け止めるための基盤整備としても位置づけられる。

本稿で示した枠組みは、他の地域研究領域においても適用可能性を持つと考えられるが、その有効性については今後の実証的検討が必要である。

以上の要点を整理したものを図 18 に示す。

本章で示した整理設計および可視化の具体例については、参考資料として別途提示する。



図 18 フィールド調査データの整理設計と生成 AI 活用の関係

参考文献

- [1] 日本学術振興会．n.d.「科研費における研究データの管理・利活用について」．<https://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/01_seido/10_datamanagement/> (2026 年 3 月 30 日)
- [2] 文部科学省科学技術・学術政策局．2024.「大学等の研究セキュリティ確保に向けた文部科学省関係施策における具体的な取組の方向性（概要）」．<https://www.mext.go.jp/content/20241218-mxt_kagoku-000039402_1-1rrr.pdf> (2026 年 4 月 6 日)
- [3] 京都大学．n.d.「京都大学における研究データ管理（RDM）」．研究データ管理推進セクション．<<https://rdm.kyoto-u.ac.jp/docs/introduction/summary/>> (2026 年 4 月 6 日)
- [4] 内閣府．2025.「オープンサイエンスの戦略・施策の検討に資する調査・分析等の委託（2024 年度）報告書」．<https://www8.cao.go.jp/cstp/2024_os_report_1.pdf> (2026 年 4 月 6 日)
- [5] 国立情報学研究所．n.d.「Q&A 集—5. 標準ストレージ（NII Storage）の使用容量に制限はありますか？」
GakuNin RDM サポートポータル．<<https://support.rdm.nii.ac.jp/faq/>> (2026 年 4 月 10 日)
- [6] 京都大学図書館機構．2023.「景福寺資料」京都大学貴重資料デジタルアーカイブ（東南アジア地域研究研究所蔵）．<<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/cseas/canhphuoc>> (2026 年 4 月 10 日)
- [7] 京都大学情報環境機構．2025.「RDM Drive」．<<https://www.iimc.kyoto-u.ac.jp/ja/services/storage/rdmdrive>> (2026 年 4 月 10 日)
- [8] 京都大学情報環境機構．2025.「有償化後はどの程度の負担金額になる見込みですか」RDM Drive/
RDM ObjectStorage 申請関係よくある質問．<<https://www.iimc.kyoto-u.ac.jp/ja/services/storage/faq/rdm-apply/20250512182919>> (2026 年 4 月 10 日)
- [9] 木谷公哉．2026.『Google Cloud Vision Multi-Language OCR Tool』（ソフトウェア）．<https://doi.org/10.5281/zenodo.18910589>

第 10 章

参考資料：

東南アジア大陸部におけるベトナム仏教寺院分布 — Google Maps と GPS 情報を用いた可視化の試み

木谷 公哉

1. 分布図の概要

本資料では、タイおよびラオスにおけるベトナム仏教寺院の分布を可視化した結果を示す。

本分布図は Google My Maps 上で公開しており、以下の URL からインタラクティブに閲覧可能である。

- ・ タイ (図 A1)

<https://www.google.com/maps/d/viewer?mid=1w1Kz57aKwErr9nk5g5Pyql1vGKrR84k>

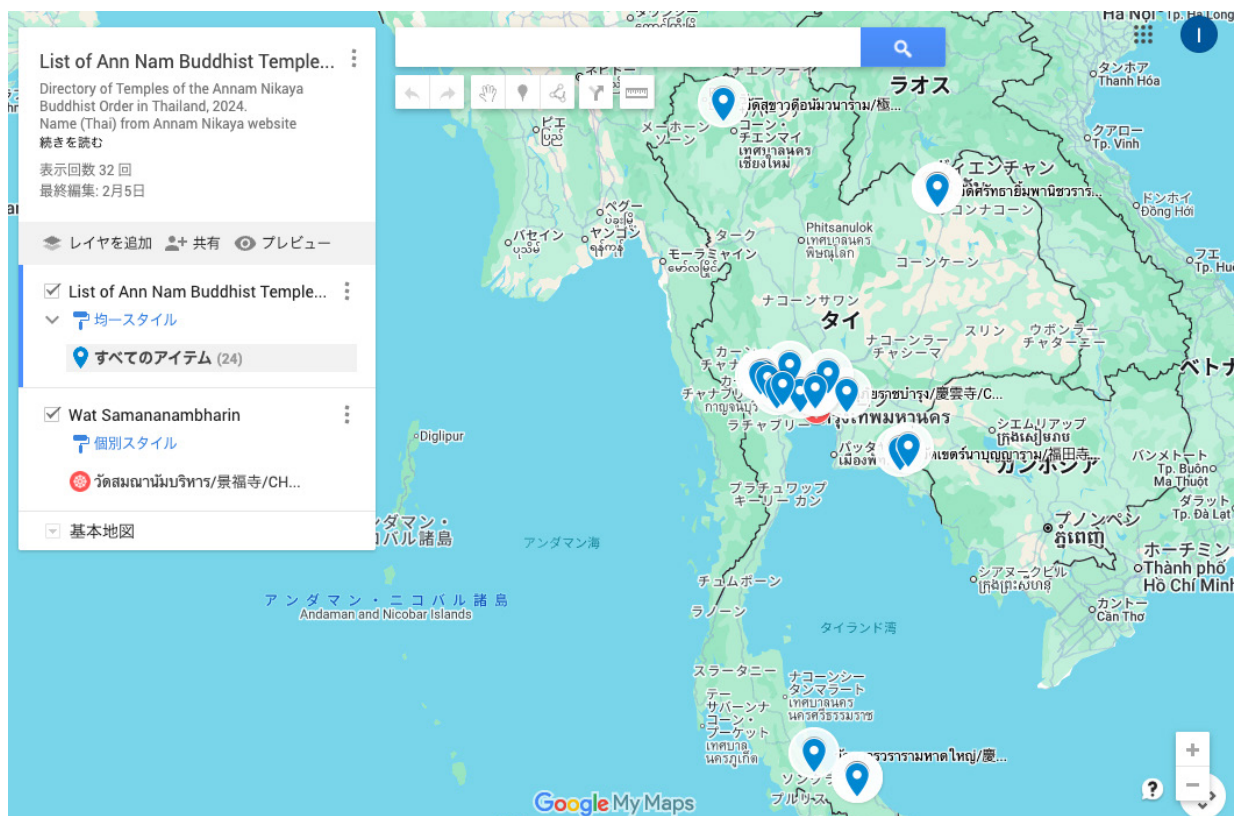


図 A1 タイにおける安南派仏教寺院分布図 (Google My Maps をもとに筆者作成)

- ・ ラオス (図 A2)

<https://www.google.com/maps/d/viewer?mid=1KXhaITQfaYC8MKunhDgy3LpVQWQ-cQQ>

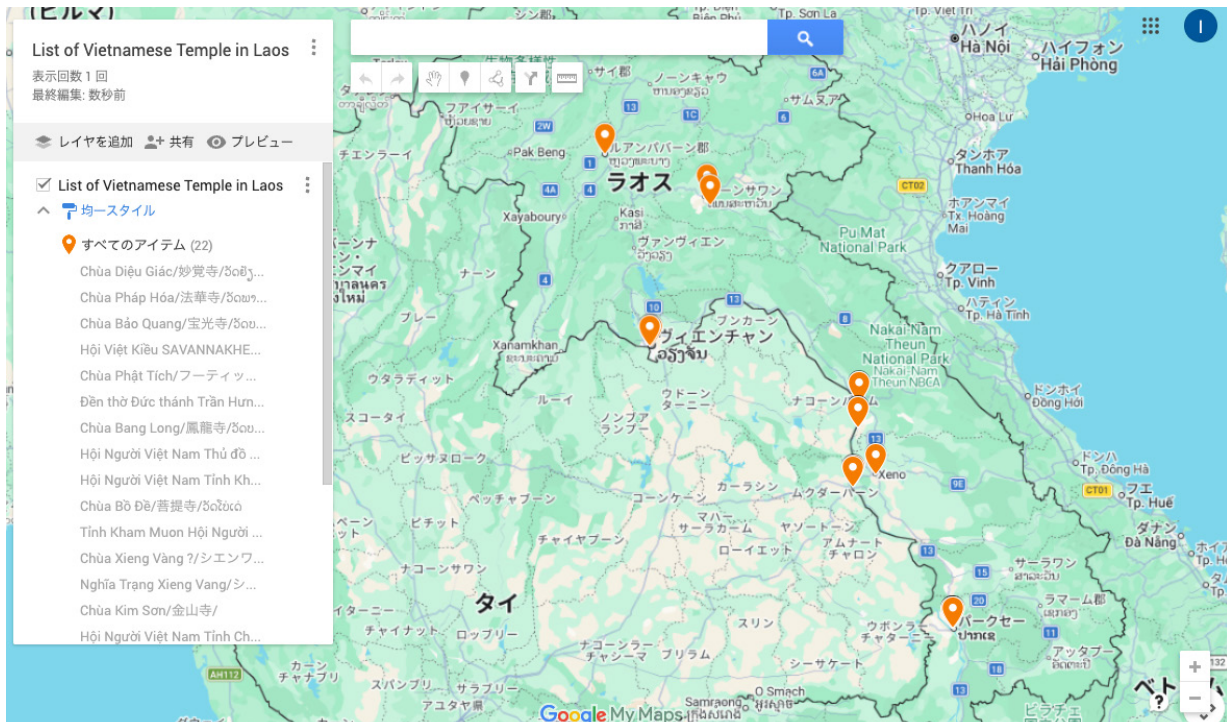


図 A2 ラオスにおけるベトナム仏教寺院分布図 (Google My Maps をもとに筆者作成)

各国ごとにレイヤーを分けることで、分布状況の比較が可能な構造とした。

2. データ作成方法

本資料では、地点情報の取得には研究者による現地での GPS 測定および Google Maps における既存地点情報を併用し、可視化には Google My Maps を用いた。

Google Maps は地点情報の参照・確認および既存地点の利用のための基盤として機能し、Google My Maps はそれらの地点情報を整理・可視化するためのツールとして位置づけられる。

2.1 基礎データ整理

寺院リストを Google スプレッドシート上で整理し、名称および GPS 情報（緯度・経度）を確認・修正した。

2.2 緯度・経度の決定

緯度・経度は、研究者による現地での位置情報取得（スマートフォンによる GPS 測定）および、Google Maps における既存地点情報を併用して確定した。

具体的には、以下の優先順位により採用した。

- ・ 研究者が現地で測定した本堂（主要建物）の位置情報
- ・ Google Maps に登録されている既存地点情報
- ・ 門（入口）において測定または確認した位置情報

この優先順位により、可能な限り実態に即した位置情報を採用した。

Google Maps の地点情報については、現地状況との整合性を確認したうえで採用した。

2.3 寺名の多言語統合

寺院名称は、現地語・ベトナム語・中国語の表記を統合した。最も完全な表記を先頭に置き、他言語を併記する形式とすることで、多言語環境における識別性と検索性を確保した。

3. 可視化用データ設計

Google My Maps へのインポート用データとして、以下の最小項目に整理した。

- 寺院名称
- URL (参照情報)
- Google Maps 登録情報
- 緯度
- 経度

項目を最小限に限定することで、可視化処理を簡潔にし、再利用可能な構造とした。

4. Google My Maps による可視化

整理したデータを Google My Maps にインポートし、地点情報として登録した。国別にレイヤーを分けることで、分布の比較および分析が可能な構造とした。

5. 本資料の位置づけ

本資料は、第3章で提示した研究データ管理（RDM）における整理設計および可視化の具体例として位置づけられる。ここで示した手法は試行的なものであり、今後の研究対象やデータ条件に応じて調整が必要となる。

本資料で示した分布図および可視化データは、研究データの再利用および検証を目的として公開するものである。

東南アジア大陸部越僑コミュニティの基礎研究
ーベトナム仏教寺院資料分析からー

令和4～8年度科学研究費助成事業研究成果報告書
(基盤研究 (B) / 課題番号: 23K21975)

研究代表	大野美紀子
編集・組版	山川綾乃
発行	京都大学東南アジア地域研究研究所
発行日	2026 年 3 月 31 日